

中京大学大学院心理学研究科

博士学位請求論文

精研式 SCT の特異反応に関する研究

—反応分析法立案に向けて—

**A Study about Specific Responses in Seiken-Sentence  
Completion Test: Toward forming of analysis method of  
responses.**

2021年9月17日学位授与

石井明子

## 目次

第 1 章 問題提起.....	1
1-1 はじめに.....	1
1-2 SCT 研究の概観.....	2
1-2-1 諸外国の SCT.....	2
A : The Emotional Insight Test.....	3
B : Rohde-Hildreth Completions Blank.....	3
C : The Incomplete Sentence Blank.....	4
D : The Forer Structured Sentence Completion Test.....	5
E : The Sacks Sentence Completion Test.....	5
F : The Miale-Holsopple Sentence Completion Test.....	6
G : Washington University Sentence Completion.....	6
H : The Sentence Completion Series.....	7
1-2-2 本邦の SCT.....	9
A : 精研式 SCT.....	9
B : K-SCT.....	10
C : MJ 式 SCT.....	11
1-3 精研式 SCT に関する諸研究.....	12
1-3-1 分析法・解釈法・整理法に関する研究.....	13
1-3-2 刺激語に関する研究.....	19
1-3-3 SCT 解釈と評定者に関する研究.....	19
1-3-4 精研式 SCT を用いた研究.....	21
A : 反応分類による分析方法.....	21
B : 反応分類以外の分析法.....	25
1-4 本論文の目的.....	27
第 2 章 反応分類による分析の試み——家族・家庭に関する刺激語を例として——..	31
第 1 節 研究 1 : 反応分類による出現率の算出.....	31
1 目的.....	31

2 方法.....	32
3 結果.....	37
4 考察.....	42
第2節 研究2：反応内容分析 .....	44
1 目的.....	44
2 方法.....	44
3 結果.....	46
4 考察.....	50
第3節 研究3：反応形式分析 .....	53
1 目的.....	53
2 方法.....	53
3 結果.....	56
4 考察.....	69
第4節 研究1・2・3の考察.....	74
1 研究1・2・3のまとめ .....	74
2 反応内容分析・反応形式分析の可能性.....	74
第3章 自己領域の分析と臨床的アセスメントへの適用可能性の検討 .....	76
第1節 研究4：反応内容分析とGHQ28の関連.....	76
1 目的.....	76
2 方法.....	77
3 結果.....	80
4 考察.....	87
第2節 研究5：反応形式分析とGHQ28の関連.....	89
研究5-1 特異反応の抽出 .....	89
1 目的.....	89
2 方法.....	89

3 結果 .....	91
4 考察 .....	109
研究 5-2 GHQ28 との関連 .....	112
1 目的 .....	112
2 方法 .....	112
3 結果 .....	112
4 考察 .....	113
第 3 節 研究 4・5 の考察 .....	114
3-3-1 研究 4・5 のまとめ .....	114
3-3-2 精神的健康と関連がみられた分析側面の特徴 .....	115
3-3-3 本研究の課題 .....	115
第 4 章 総合考察 .....	117
第 1 節 各研究の概要 .....	117
4-1-1 先行研究との比較による本論文の反応分析法の意義 .....	117
4-1-2 <家族・家庭>領域における反応内容分析・反応形式分析の試案とそこから得られた提案 .....	118
4-1-3 反応分析法および特異反応の再検討と臨床的アセスメントへの適用可能性 .....	119
第 2 節 特異反応抽出によって現れる指標とその意味付け .....	121
4-2-1 反応内容分析の指標と意味づけ .....	121
4-2-2 反応形式分析の指標と意味づけ .....	123
第 3 節 実際の活用に向けた分析的手続き .....	126
第 4 節 今後の展開 .....	133
引用文献 .....	136
要旨 .....	144
謝辞 .....	147
付録 .....	148
付録 A .....	149

付録 B .....	150
付録 C .....	151
付録 D .....	152
付録 E .....	153
付録 F .....	154
付録 G .....	155
付録 H .....	156
付録 I .....	157

## 第1章 問題提起

### 1-1 はじめに

臨床心理学には、アセスメントという分野がある。アセスメントとは対象者（群）を文字通り“査定すること”を指し、その人のパーソナリティや能力、資質などについて評価し、理解することである。その方法には、面接法、観察法、そして心理検査法があり、中でも心理検査法は多くのツールが開発されてきた。とりわけ投映法は、あいまいな刺激を提示することで人の自由な反応を引き出し、それに対して分析と解釈を行う方法を指し、習熟に時間を要するとされる。それゆえ、臨床心理学の専門ともいえる技法のひとつである。

文章完成法とは、単語ないし未完成な文章に対して、連想されることをそれらに続けて書き、文章を完成させる方法を指す。文章完成法には2つの意味がある。一つはその人のパーソナリティを推量する投映法を指し、もう一つは調査目的に見合う刺激語を提示し、その人の考えや感じ方を調べる調査方法を指す。つまり、文章完成法とは心理検査(test)の名前でもあり、調査方法(method)の呼称でもあるという、やや複雑なものとなっている。よって、それらの意味が混同されていることも少なくない。本論文では前者の投映法としての文章完成法について述べる。投映法としての文章完成法はSCT(Sentence Completion Test)と呼ばれることが多い。

SCTは海外で発表された心理検査である。Ebbinghausが1897年、知能の研究にこの手法を用いたことを発端にパーソナリティ検査として発展してきた(小林, 2004)。SCTを最初にパーソナリティ検査として発表したのはTandler(1930)だとされ、被検査者の問題について情緒的洞察を得る事を目的に、反応を繰り返し読み、直接解釈を行う方法が用いられた。詳細は後述するが、その後、それぞれの目的に応じて様々なSCTが発表され、分析法も数量分析が用いられるなどして今日まで発展してきた。

本邦で最も広く用いられているSCTは精研式SCT(佐野・榎田, 1954)であろう。しかし、精研式SCTは「たんに社会生活や家庭環境といったものを調査するフェイスシートまがいに考えて安易に実施している企業が散見する(駒崎, 1979, p18)」, 「『大まかな印象』程度の解釈しかされないことも少なくない(黒田, 2012, p140)」, といった心理検査としての位置づけすら危ぶまれる使用法がなされている。このような問題は精研式SCTに系統的な分析法が存在せず、精研式SCTの開発者である佐野・榎田が直観法、つまり直接反応から被検査者のパーソナリティを推察する手法を採用した(佐野・榎田, 1954)ためと考えられる。直観法とは、佐野・榎田(1954, p65)によると「SCTをざっと全般的に眼を通し、それより受ける全体的な印象より診断していく方法」である。佐野・榎田(1954)は、精研式SCTを非行少年に施行し、実際の事例を挙げて、SCT反応そのものがその人のパーソナリティを表しているとした。

直観法を用いることによる問題は他にもある。SCTの刺激は、単語や書きかけの文章といった有意味刺激であり、被検査者に検査意図を推測させ、回答の歪曲を招く可能性がある。実際に、MMPIによって社会的望ましさが高いと評定された被検査者はSCTでも望ましいとされる記述をすとの報告もある(Rozynko, 1959)。よって、反応内容をそのまま所見とす

るような単純な解釈では、誤った所見となる惧れがある。また、直観法は独断での解釈、恣意的解釈という批判に耐えがたい、調査研究と臨床実践による成果をつなぎにくいといった問題を生じると推察される。

確かに、直観法による解釈が有益な所見をもたらす可能性は大いにある。鈴木(2000)は TAT について、TAT 反応は読めば誰にでもわかる言語的産物であるため、実際に反応から相当に本質をとらえたことを言えることもあると述べている。これは同じく言語的産物である SCT にも当てはまる。しかし、そのみでは上記の問題を払拭できない。特に、独断的・恣意的解釈であるという批判は、その反応の印象や雰囲気を読み取る、反応から解釈への根拠が明確でない、という点にみられる。結果的に、解釈や所見の再現性や評定者間一致の問題にもなりかねない。反応からどれほど鋭く本質をとらえた解釈を導くかは、その評定者の人間理解の深さや臨床経験に左右されるにしろ、なぜその反応を取り上げるのか、なぜそのような解釈になるのか、少なくとも説明できることが重要なのではないかと考えられる。ロールシャッハ法のスコアリングや鈴木(1997)による TAT の分析、バウムテストの指標アプローチ(岸本, 2015)など、多くの投映法がそうであるように、精研式 SCT にも直観法と相補的に用いるような、その人の特徴的反応を抽出する「分析」の手続きと、その特徴的反応を意味づける「解釈」の手続きが必要である。そして、それらの方法の定式化が必要と考えられるが、分析法に関する研究は少なく、定式化された方法は見当たらない。

本論文では、調査研究・臨床実践で広く用いられる精研式 SCT について、その分析法の立案を試み、その臨床的アセスメントへの適用可能性を検証する。まず、SCT について、先行研究を概観し、中でも分析法について詳細に記述することとする。その後、改めて精研式 SCT の使用に関する問題点について考察し、直観法および従来の分析法の問題を可能な限り補完する新たな定式的な分析法を提示する。

## 1-2 SCT 研究の概観

SCT は言語が刺激であるため、検査そのものについて文化的背景を考慮しなければならない。また検査の発展にも海外と本邦では内情が異なると思われる。よって、ここでは海外と本邦に分けてそれぞれの SCT をみていくこととする。

### 1-2-1 諸外国の SCT

昨今、投映法はアメリカにおいて、使用頻度が少なくなったとされる(*e.g.*, Piotrowski, 2015)。よって、Watkins, Campbell, Nieberding, & Hallmark(1995)や Cashel(2002)の報告にある 1990 年代～2000 年代初期ほど現在は使用されていない。しかし、2015 年に行われた臨床心理学の博士課程における心理アセスメントの訓練では、83 の博士課程プログラムのうち、47%のプログラムで SCT が教えられているとされた(Mihura, Roy, & Graceffo, 2017)。2017 年に行われた学校心理士 1317 名を対象とした調査では、SCT は 25.8%の学校心理士に使用され、投映法の中では最もよく用いられているとされた(Benson, Floyd, Kranzler, Eckert, Fefer, & Morgan, 2019)。アメリカ心理学会の司法部門のメンバーと司法領域におけ

る心理学の高等教育機関出身の専門家 152 名を対象とした調査では、SCT が投映法の中でロールシャッハ法に次ぐ第 2 位の使用頻度であることが報告された(Archer, Buffington-Vollum, Strednym, & Handel, 2006)。また、心理学系論文のデータベースである Psycho info で 2015 年～2020 年の 5 年間の“Sentence completion test”を検索すると、2021 年 1 月現在、240 件の文献がある。SCT は海外でも主要な投映法の 1 つであることがわかる。

海外にも複数の SCT が存在し、どの SCT が使用されているのかを調査した研究がある(Holaday, Smith, & Sherry, 2000)。また、臨床実践において使用される心理検査を調査した研究では、複数の SCT が挙げられている(e.g., Peterson, Lomas, Neukrug, & Bonner, 2014)。ここでは、これらの調査で使用されていると確認できるものや主要な SCT について取り上げる。また、調査研究のツールとして SCT が用いられた研究ではなく、SCT そのものの性質や分析法・解釈法に関する研究についてみていくこととする。

#### A : The Emotional Insight Test

先述した Tendler(1930)によるパーソナリティ検査として初めての SCT は The Emotional Insight Test と呼ばれ、全 20 の刺激語から構成された。実際の施行から、(1)反応や反応の連想の流れが個人により異なること、(2)反応は満足・苛立ち・恐怖・反感・嗜好・興味・愛着の指標であること、(3)被検査者自身あるいは社会に関する反応が表出されることから、反応が個人のパーソナリティを表すと考えられている。

分析法は反応を個人内・個人間で比較する方法が提示され、特に個人内比較では、検査を通して繰り返しみられる反応がその人の情緒的傾向を表すとしている。このように、分析に数量的分析を行わず、解釈は直観法を用いる SCT である。

The Emotional Insight Test を修正した SCT を用いて、Carter(1947)は健常群 20 名と不安や恐怖によって適応が阻害されていると自己申告した群（不適応群）20 名、神経症の診断を受けている群（神経症群）20 名の SCT 口頭反応時の皮膚電位、反応時間、反応内容（“肯定的自己”・“否定的自己”・“肯定的社会”・“否定的社会”・“恐怖と反感”・“分類不能”）、単語数の比較を行った。その結果、反応内容と単語数には明確な違いが見られなかった。しかし、不適応群や神経症群は概して、皮膚電位の変化の現れ、反応時間の遅れがみられ、特にそれらが同時に生じる時、葛藤の所在だけでなく葛藤の激しさを表しているとした。Carter(1947)の研究は、The Emotional Insight Test 実施において、皮膚電位や反応時間などの分析視点を提示し、解釈を行ったものといえる。

#### B : Rohde-Hildreth Completions Blank

次に開発された SCT は Rohde(1946)による Rohde-Hildreth Completions Blank である。この SCT は、主題統覚検査の開発で有名な Murray による欲求-圧力理論を基にしており、Payne が 1928 年に作成した職業指導に使用した SCT を改訂したものである。改訂にあたり、(1)パーソナリティのすべての側面に関する情報を引き出すため、より広範な領域を網羅すること、(2)被検査者が自由に表現できるよう、刺激語の言い回しの影響を最小限にとどめ

ること、(3)実施場所の時間的制約に検査が影響されないよう、制約された時間を超えない程度で実施できることの3点が考慮された。最終的にこのSCTは全64の刺激語となり、若者の性格特性を明らかにするため、より深層にある欲求・圧力・内的状態・特性、さらに志向・自我構造・知能・情緒的成熟度などを査定するよう開発された。

このSCTの分析にはスコアリングが行われ、SCT全体は欲求(達成欲求や攻撃欲求など)、内的状態(葛藤や悲観的・楽観的など)、内的統合(自我理想達成や超自我など)による33の変数に対してそれぞれ1~10点で評定されるが、評定は評定者の判断にゆだねられる。また、各刺激語から欲求・圧力・内的状態について直観法によって評価する方法を採用している。しかしRohde(1946)のスコアリングは、高い評定者間一致率、高い信頼性と妥当性を得ており、SCTおよびそのスコアリングマニュアルが被検査者のパーソナリティを適切に査定することを示した点が注目される。

### C : The Incomplete Sentence Blank

パーソナリティ・アセスメント学会会員60名を対象にした調査で、最も多くの者が使用していると答えたSCTはRotter(1951)、Rotter & Willerman(1947)のThe Incomplete Sentence Blank(ISB)である(Holaday, Smith, & Sherry, 2000)。Peterson et al.,(2014)によるカウンセラー926名を対象とした調査によると、ISBは病院臨床のカウンセラーの20%、学校臨床のカウンセラーの12%が使用していると報告されている。

ISBは、陸空軍専用の療養所で、精神的健康の観点から適応を評価するために使用されていたSCTを改訂したものである。ISBは集団へのスクリーニングを目的とした半構造化検査と位置づけられ、(1)ステレオタイプの反応を減らし、個人的反応の幅を広げること、(2)特別な訓練をせずとも、一致した結果を得られるスコアリングマニュアルを作成することを目指して改訂された。現在は40の刺激語から成り、子どもから成人まで、幅広く不適応のスクリーニングを目的として使用されている。

ISBは、直観的解釈も行うが、適応 - 不適応を判断するスコアリングも導入されている。スコアリングは内容を“肯定”・“中立”・“葛藤”に分類し、“肯定”・“葛藤”はそれぞれ3つのレベルで重みづけを行う7件法が採用されている。この重みづけは、(1)45名の軍療養所での精神病圏・戦争経験による心的外傷・外科的損傷の入院患者、(2)適応の一般原理や著者らの経験の2つの基準により作成された(Rotter & Willerman, 1947)。最終的な解釈は、各反応を0点(よいユーモアや楽観、温かい受容など)~6点(著しい葛藤や不適応)で評定し、合計得点が高いほど、不適応であるとしている。Rotter, Rafferty, & Schachtize(1949)は、大学生の不適応や治療の必要性を査定する男女別のスコアリングマニュアルを開発した。開発は男性53名・女性58名のISBを対象に行われ、適応 - 不適応のカットオフポイントは135点である(Rotter & Rafferty, 1950)。

ISBは、これまで多くの信頼性や妥当性に関する検証が行われており、高い評定者間一致率(e.g., Ames & Riggio, 1995; Churchill & Crandall, 1955; Lah, 1989; Rotter, Rafferty, & Lotsof, 1954; Rotter, Rafferty, & Schachtize, 1949; Rotter & Willerman, 1947)を示してい

る。信頼性は、高いとする結果(*e.g.*, Rotter, Rafferty, & Schachtize, 1949; Rotter & Willerman, 1947; Weis, Toolis, & Cerankosky, 2008)や低いとする結果(*e.g.*, Churchill & Crandall, 1955; Rotter, Rafferty, & Lotsof, 1954)がある。また、妥当性も、高いとする結果と低いとする結果が混在しており(*e.g.*, Lah, 1989; Rotter & Rafferty, 1950; Rotter, Rafferty, & Lotsof, 1954; Rotter, Rafferty & Schachtize, 1949; Rotter & Willerman, 1947; Torstrick, McDermut, Gokberk, Bivona, & Walton, 2015), 特にカットオフポイントについての調査が多く(*e.g.*, Churchill & Crandall, 1955; Fuller, Parmelee, & Carroll, 1982; Getter & Weiss, 1968; Lah, 1989; Logen & Waehler, 2001; Weis, Toolis, & Cerankosky, 2008), よりカットオフポイントを高く設定した方が良いとする結果がみられる(*e.g.*, Ames & Riggio, 1995; Lah, 1989)。

他に、ISB 反応の文字や文法などのエラーについて分析したものがある。Guertin(1959)は精神科患者の ISB にみられた“単純な単語の誤り”・“著しい言葉の誤用”・“印刷された構成の無視”・“固執反応”など 17 のエラーに対して因子分析を行い、“単語への不注意”・“的外れ”・“スペルの乏しさ”・“電文体様の言い回し”の 4 つを抽出した。Guertin(1959)はこれらのエラーが診断の一助となる可能性を指摘した。

#### D : The Forer Structured Sentence Completion Test

Forer(1950)より開発された The Forer Structured Sentence Completion Test(FS-SCT)も、先述した Rohde 同様、欲求-圧力理論を基に作成され、100 の刺激語から構成されている。各刺激語は<人間関係(父・母・男性・女性・人々・権力)>、<主要な欲求>、攻撃性や不安などの<感情を引き出す環境>、攻撃性・拒否・失敗・応答・性的刺激・愛情と結婚に対する<反応>といった臨床実践で重要と考えられる領域を網羅するよう作成されている。客観的解釈を行うため、チェックリストを用いて“回避的”・“省略”・“受容的”・“不安”などに各反応を分類し、反応の傾向を明らかにする方法を用いる。また、反応の雰囲気、攻撃性の方向と強さ、感情レベル(感情語の数)についてもそれぞれ記録する。Forer(1950)はそれぞれ解釈仮説(例えば、ある領域で“省略”が多くみられれば、抑圧や意図的な回避など、その領域での葛藤が表れている可能性がある)や注目すべきポイント(例えば、その人の力動を把握する方法として、家族とその他の人へのそれぞれの態度を比較する)も提示している。

他に、Picano, Roland, Rollins, & Williams (2002)は FS-SCT にみられる“省略”・“否認”・“検査や実施者へのコメント”・“不真面目な反応”・“刺激の反復”・“単純な連想”の 6 つを防衛反応とし、その数と面接や他の心理検査などとの関係を調査した。

#### E : The Sacks Sentence Completion Test

Sacks(1949)は一人称と三人称の 2 つの SCT を作成し、どちらが検査として優れているのかを調査し、被検査者の病理の深刻さの程度をよく表し、また被検査者自身も真実を記述しやすいとしたのは、一人称の刺激語であると結論付けた。その際に作成した SCT が、後に Sacks & Levy(1950)の発表した The Sacks Sentence Completion Test(SSCT)である。SSCT

の目的は、特定の領域への態度、個々人の重要な生活領域、また被検査者の意識・前意識・無意識的感情や思考を査定することにある。60の刺激語は<家族>・<性>・<対人関係>・<自己概念>の4領域、さらに下位カテゴリーからなっている。たとえば<家族>であれば、父親・母親・家族集団の3つのカテゴリーがある。4領域で全15カテゴリー、各カテゴリーに4つの刺激語が設定されている。評定はカテゴリーごとに行われ、換算表を用いて“顕著な混乱なし”から“重篤な混乱”まで3段階と“不明”にそれぞれ分類する。また、評定とは別に、(1)被検査者の内から刺激された反応か環境から刺激された反応か、(2)ストレス下での感情コントロールの程度、自他の責任・興味・要求など思考の成熟の程度、(3)未来・自己の能力・目標・恐怖の対象・罪悪感は現実的か、などを反応から吟味する。つまり、直観法的な解釈を行う。Sacks & Levy(1950)は、反応を吟味することにより被検査者のパーソナリティ構造を推定できるとしている。最終的にはカテゴリーごとにサマリーを作成し、評定と合わせてカテゴリー間の関係を検討し、被検査者の力動的理解を目指す。

Sacks & Levy(1950)はほかに、検査者が重要あるいはわかりにくいとした反応について被検査者に詳細を説明するよう求めることを推奨している。また、記述ではなく口頭での実施についても言及しており、反応時間の変化や声のトーン・ボリュームの変化、顔色などが手掛かりになることを指摘している。本邦では神・大伴・林(1962)により一部修正したSSCTの日本版が発表されている。

#### F : The Miale-Holsopple Sentence Completion Test

Holsopple & Miale(1954)は、被検査者にとって思考や感情を表現する際に脅威的でない様に考慮した、The Miale-Holsopple Sentence Completion Testを開発した。このSCTは全73の刺激語から構成され、無意識および前意識の欲求・動因・葛藤・人格構造のシステムを査定するものである。分析におけるスコアリングシステムは開発されておらず、直観法による解釈が用いられる。

#### G : Washington University Sentence Completion

本邦では、Loevinger & Wessler(1970)・Loevinger, Wessler, & Redmore (1970)によるWashington University Sentence Completion(WU-SCT)が海外のSCTの中で最も知られていると推察される。このSCTは全36の刺激語から構成され、自我発達の水準を測定するものである。Loevinger(1976)のいう自我とは、人が自らや世界を意味づけする枠組みであり、10段階の発達段階をもつとしている。著者らはもともと、女性のパーソナリティの研究を行っており、パーソナリティにおける中心的な変数である自我発達を測定する方法にSCTを選択した。その際に、自我発達の水準を査定するスコアリングの必要性が生まれ、スコアリングマニュアルを開発したことがWU-SCTの発展のきっかけであった。

各反応はマニュアルにある例文とのマッチングにより、自我発達の10段階のうち、“衝動的”・“自己保護的”・“同調的”・“自己意識的”・“良心的”・“個性的”・“自立的”・“統合的”の8段階に分類され、段階による反応数の分布から最終的な自我発達段階が決定

される。また、各段階はそれぞれ 1～8 点となっており、各反応が分類された段階の点数の合計によって、最終的な発達段階を決定する方法もある。前・後半各 18 の刺激語による短縮版も発表されている。本邦でも、邦訳版(宮下・上地, 1981)や日本版(*e.g.*, 佐々木, 1981; 渡辺・山本, 1989)が発表されている。

WU-SCT の信頼性と妥当性については、これまで多くの研究がなされており、高い評定者間一致率(*e.g.*, Novy & Francis, 1992; Snarey & Lydens, 1990), 高い信頼性(*e.g.*, Loevinger & Wessler, 1970; Novy & Francis, 1992; Redmore & Waldman, 1975), 高い妥当性あるいは理論との一致(*e.g.*, Sutton & Swenson, 1983; Westenberg & Block, 1993; Helson & Wink, 1987)が確認されている。

#### H : The Sentence Completion Series

Brown & Unger(1998)は、クライアントの関心事や特定の悩みの領域にひそむ心理的テーマを探る The Sentence Completion Series(SCS)を開発した。SCS は、50 の刺激語から成り、成人版・青年期版・家族版・仕事版など 8 種類ある。反応のスコアリングは検査者の臨床スキルに依存している。Peterson et.al,(2014)が行ったカウンセラー926 名を対象とした調査によると、SCS は ISB と同人口のカウンセラーに使用されていると報告されているが、SCS に関しては後続の研究などが確認できず、詳細は不明である。

以上についてまとめると、海外の SCT 分析法にも直観法は用いられているが、それ以外にも反応をある観点から分類する方法、また反応例と照らして自我水準や適応などの程度を評価し、数値化する方法などがある(Table1)。

Table1 海外で用いられるSCTの特徴  
Characters of foreign SCTs

SCT	アセスメント目的	分析法・解釈法
The Emotional Insight Test	被検査者の情緒的傾向	直観法
Rohde-Hildreth Completions Blank	深層にある欲求・圧力 ・内的状態・特性, 志向・自我構造・知能 ・情緒的成熟度など	スコアリング (SCT全体から, “欲求”, “内的状態” について判定) 直観法
The Incomplete Sentence Blank	適応水準	スコアリング (刺激語別に 適応-不適応の判定) 直観法
The Forer Structured Sentence Completion Test	人間関係, 主要な欲求, 感情を引き出す環境, 情緒的刺激への反応	反応分類 (“回避的”, “省略” など) 反応の雰囲気, 攻撃性の方向と強さ, 感情語の数について記録
The Sacks Sentence Completion Test	特定の領域への態度, 個々人の重要な生活領域, 被検査者の意識・前意識 ・無意識的感情や思考	反応分類 (領域ごとに混乱の有無の観点 から分類) 直観法
The Miale-Holsapple Sentence Completion Test	無意識および前意識の 欲求・動因・葛藤 ・人格構造のシステム	直観法
Washington University Sentence Completion	自我発達水準	反応分類 (自我発達水準の観点から分類) あるいはスコアリング (自我発達レベルの 判定)
The Sentence Completion Series	関心事や特定の悩みの領域 にひそむ心理的テーマ	スコアリング

海外での SCT の開発と発展をみると、直観法よりも、定式化した分析・解釈法を用いる方が、その SCT ののちの発展に大きく寄与しているように思われる。つまり、分析・解釈法が定式化し、マニュアル化することにより、その SCT は多くの臨床家や研究者で同一の手続きをとることができ、追試研究によるマニュアル自体の批判的検討や改訂、また調査研究間の比較検討が可能になる。そのことが SCT 発展に必要な要因であると考えられる。

先に述べたように、投映法の使用頻度は以前に比べるとかなり減ってしまった。しかし、近年でもスコアリングマニュアルのある SCT は調査研究の分野で用いられている。例えば ISB は外向性・神経症傾向・精神病傾向との関連が調査されている (Joy, 2017)。SSCT には、解離性遁走のパーソナリティの調査 (Jha & Sharma, 2015)、自殺や暴力などの破壊的行動の予測因子となるパーソナリティや自己イメージの調査 (Sitnik-Warchulska, 2016)、発達障害の子どもを育てる母親の感情状態の調査 (Grinina, 2019) がある。最も使用されているのは WU-SCT で、リーダーシッププログラムの受講を通じた変化の意識 (Vincent, Denson, & Ward, 2015)、精神病理や内的葛藤の外在化・内在化 (Duffy, Ruegger, Tiegreen, & Kurtz, 2017)、孤独 (Ishanov, Osin, & Kostenko, 2018)、感情的気づきに関する質問紙の妥当性検

証(Smith, Quinlan, Schwartz, Sanova, Alkozei, & Lane, 2019)など、多くの研究で WU-SCT による自我発達との関連が調査されている。

## 1-2-2 本邦の SCT

本邦の臨床実践で使用されている SCT には佐野・榎田(1960)による精研式 SCT, 片口(1964)による構成的 SCT(以下, K-SCT), 法務省矯正局(1965)による法務省式 SCT(Ministry of Justice SCT, 以下 MJ 式 SCT)がある。

### A: 精研式 SCT

精研式 SCT は佐野・榎田(1954)が、「被験者の生活史の中、問題となりそうな点、感情的傾向、自己に対する確信の度合、失敗に対する反応、目指している目標、楽観的か悲観的か、エネルギーが豊富な方か、他人に対する反応等々(p59)」を査定するために作成したものであり、著者らが 1956 年に改訂したもの(佐野・榎田, 1956a)が現行の精研式 SCT となっている。Part I・Part II で各 30, 計 60 の刺激語で構成されている。佐野・榎田(1954)は、「SCT というものも、やはりその持つニュアンスを生かすという状態で使うのが一番ふさわしい使い方(p81)」とし、その解釈に反応から直接感じ取れるものを所見とする直観法を用いることとした。また、解釈に一定の方向性を持たせるため、精研式 SCT において評価すべきパーソナリティとその決定要因を提示した(佐野・榎田, 1956b)。著者らの定義によると、パーソナリティには、知能・精神的分化度・性格類型や特性(分裂質・循環質・癩癩質・神経質・ヒステリー)・エネルギー・楽観的 - 悲観的・支配的 - 従属的・目標並び動因・キャセクション<sup>1</sup>・生活態度・ダイナミクスの 10 の側面がある。また、パーソナリティの決定要因には、身体・家族・社会・成育歴とその環境・生活水準の 5 要因がある。その後、改訂が行われ(榎田・小林・岩熊, 1997; 佐野・榎田, 1972), SCT が評価する現行のパーソナリティ側面には、見通しや判断力などからなる知的水準(diff), S(分裂気質)・Z(循環気質)・E(粘着気質)・M(類型なし)からなる情意(性格類型), H(ヒステリー)型・N(神経質)型そして H の一側面である G(顕示欲)型からなる力動, 価値観や生活態度・目標などからなる指向の 4 側面がある。さらに、現行はそのパーソナリティの決定要因として、健康や容姿・食欲などからなる身体, 家族・成育歴や生活水準からなる家庭, 社会生活や交友関係からなる社会の 3 要因について分析を行う。評価の記述方法は以下のとおりである。

- ・「知的水準」はその反応文から評定者が - ~ ++ まで 4 段階で評価する( ~ + など 4 段階にとどめず評価してもよいとされている)。
- ・「性格類型」は SE などその混合型も含めて評価し、続いて H・G や N が認められるか否か、さらにその強さ(時には「性格類型」よりそれらが強く認められる)を ±・+・++ の 3 段階で評価する(± ~ + など臨機応変に用いてよいとされている)。

---

<sup>1</sup> キャセクション: その人の特に強く興味を引き付けられているもの。特技, 興味をもつもの。(佐野・榎田, 1956a)

- ・Hの基本属性である未成熟(immature: i)あるいは顕耀性<sup>2</sup>(Geltungsbedurftige: G)が顕著に認められる場合 H(i)というように評価する。GはHの一側面であるが、独立に評価する。よって G+i などと記号化する。
- ・「身体」は反応文から評定者が主観的に感じるエネルギーを一～++の4段階で評価する(4段階のどれかにあてはめず、“～+”など評価してもよいとされている)。
- ・「指向」と「家庭」「社会」については、反応文から把握できたことや重要と思われることを記述する。

さらに、榎田・佐野・袴田・大久保(1956)は、精研式 SCT が IQ80～90 以上、16 歳以上を対象としており、その使用に限界があることから、少年用の開発を行った。少年用は精神年齢 14～16 歳を対象としており、(1)成人用と同じくパーソナリティとその決定因を査定する、(2)成人用の刺激文に使用する言葉をより平易なものに変更する、(3)家庭環境を重視した内容にする、(4)実施時間を短縮するため刺激文の数を 50 に減らすといった特徴がある。3 点目に関しては、青年期以前を対象とすると、家庭の影響力がより大きいとの仮説による変更であった。

佐野・榎田・坂村・白土 (1960)は小学生と中学生に同じ SCT の使用は適さないこと、先述の少年用は小学校高学年からの使用を狙っていたため、より低い年齢層に使用可能な SCT の開発が必要であること、などから少年用を“中学生用”とし、新たに“小学生用”の作成を行った。小学生用は、中学生よりも刺激文が若干長いことが特徴である。これにより、刺激文の要請するところをわかりやすく提示している。佐野ら(1960)による小学 3～5 年生 275 名を対象とした調査では、目的に合致する率(各刺激文によって明らかにされたパーソナリティ・決定因の領域数の総和を全刺激文の数 50 で除したもの)を求めたところ、概して 70～80%の被検児が 30 個以上の刺激に有効な反応を示したとの結果が得られた。また、どの刺激文がどの領域を明らかとしやすいのか、どのような反応内容が出現しやすいのかについても調査され、例えば、「小さい時、私は」では家庭的要因が出現しやすいなどを明らかにした。

精研式 SCT に関する研究については後に詳述することとする。

## B : K-SCT

K-SCT は、Forer(1950)の開発した被検査者の対人的態度の様相を把握する FS-SCT を邦訳し、わが国の文化的背景に合わせて大幅な改変を行ったものである(片口, 1964; 片口・早川, 1989)。K は「構成的」をローマ字にした際の頭文字である。K-SCT は「被検者の対人的態度の様相を出来るだけ多角的に理解することに焦点を当てようとしたため(片口・早川, 1989, p14)」, 長文の刺激を用いている。刺激は全 36 個であり、家族・異性や同性・一般の人々・権威からなる<対人態度>, 攻撃・拒否・欲求挫折・性・愛情・結婚からなる<反応様

<sup>2</sup> 顕耀性：自己顕示欲が強く、自分を良く見せようとする傾向(榎田・伊藤, 1993)

式>、失敗や不満・不安・抑うつや劣等感・罪悪感からなる<問題の所在>、空想的願望・現実的願望からなる<願望>から構成されている。適応年齢は15歳～成人である。解釈には、直観法と相補的に使用するための記号化による分類が用いられる。具体的には<対人態度>と<反応様式>は、“肯定-積極”、“肯定-受動”、“否定-積極”、“否定-受動”、“両価感情”、<問題の所在>と<願望>は、自分自身について記述する“内向”と他者や集団・社会について記述する“外向”、さらに“内向”は下位分類として“内層(内省、内罰、自虐など自分自身の内面の記述)”、“表層(身体的状況、経済的状況など自分自身の外的条件の記述)”・“内層・表層(自分自身の内面・外的状況どちらも記述)”、“外向”は下位分類として“個人(自分以外の個人、他者の記述)”、“集団”(社会、制度、環境、一般的人間集団の記述)、“個人・集団(個人と集団の両方の記述)”に分類される。また、全カテゴリー共通に、“中性感情”、“反応失敗”、“内容否認”、“あいまい性”にそれぞれ反応を分類する。片口・早川(1989)はそれぞれの反応の出現率とその解釈仮説を提示している。また、各分類項目に該当する実際の反応数をそれぞれ該当しうる反応数で除すことによって、肯定指数・防衛指数といった形で被検査者の傾向を表し、一般傾向との比較により、その被検査者の対人態度がどれほど偏っているのかをみることができる。

K-SCTについては、著者らの発表以降、検査そのものに対する研究は見当たらない。K-SCTは定式化された分析方法とその分析に基づいて得られた標準データ、さらに解釈が確立されたものとして明示されているためではないかと推察される。

### C : MJ 式 SCT

MJ 式 SCT は法務省で統一した SCT の使用を目指して作成されたものである。当時、全国の少年鑑別所で使用されている SCT はその様式や分析・解釈規準が統一されておらず、各々が各々の SCT を用いていた。そこで、全国的に統一した様式、分析・解釈を行う SCT の必要性が高まり、1963年に法務省独自の SCT の開発を行うこととなった(法務省矯正局、1965)。MJ 式 SCT は被検査者の適応領域、特殊な場面・対象への態度、パーソナリティの特殊な側面について捉えるよう開発されている。少年用・青年用・成人用があり、すべて第一形式・第二形式各30の刺激語から構成されている。また、刺激は精研式 SCT に近い単語・短文形式である。刺激は<家族関係>、<交友関係>、<身体関係>、<一般対人関係>、<学校関係>、<感情・情動>、<自己・日常生活態度>、<自己・意欲その他>、<事象・事物>からなる。それぞれ、例えば<家族関係>であれば、父・母・同胞などのように、下位項目が設けられている。解釈は、直観法の使用が主であるが、問題の発見を容易にするため、整理法が考案されている。その整理法とは、以下の方法をとる。

- ・適応の観点からそれぞれの反応を“+ (適応)”・“± (両価)”・“0 (中立)”・“− (不適応)”に分類する。ただし、感情・情動に当たる刺激語(例えば、「私がすきなのは」)は分類しない。
- ・上記の分類と並行して、該当すれば“当為”・“理想像”、“非現実”、“内省・後

悔”，“拘禁反応”も確認する。

- ・形式的特徴があれば，反応型として，“固執”・“感情短反応(「好き」「嫌い」といった短い感情反応)”・“冗長”・“自己中心”・“空想反応”・“虚偽反応”など，さらに誤字脱字や文法の誤りも確認する。

本邦で使用されているこれら 3 つの SCT の特徴をそれぞれ比較してみると，精研式 SCT や MJ 式 SCT は広くパーソナリティを把握することを目的とし，刺激は単語あるいは短文形式である。そのため，反応の自由度が高く，現れる被検査者のパーソナリティも反応次第となる。K-SCT は上記の精研式・MJ 式 SCT とは事情が異なり，対人的態度の様相の把握というターゲットが明確かつ焦点化されているため，長文形式の刺激が採用されている。長文の刺激により，導き出される反応は自ずと収束してくる。記号化や個人間比較も先の 2 つの SCT より容易であると考えられる。

K-SCT については，SCT それ自体の性質や分析方法について後続研究は行われていないようである。K-SCT は明確なマニュアルが存在しているためと考えられるが，そのことがかえって，海外のような後続研究を誘発する状況にならなかったと考えられる。

MJ 式 SCT は，マニュアルの存在もあるが，法務省関連の限定した場所で使用されているため，使用する臨床家・研究者が限られ，広く目にする機会が少ない。分析法に関しては，2013 年，MJ 式 SCT の内容分析の手順を示し，所見作成までを定式化しようと試みたものが発表された。寺嶋・西藤・香川・吉川・二宮(2013)は，信憑性の高い結果を得るためには，結果の整理から所見作成までの手順の定式化が重要であるとし，「文章構成の正確さ」，「反応型」，「反応の意識レベルを考慮した刺激文の個別分析」，「反応相互の関係と領域ごとの分析」，「検査者の臨床経験に基づく分析」，「報告書の作成」の 6 段階を示した。寺嶋ら(2013)は事例を挙げて，どのように所見まで反応を整理・分析・解釈するかを示した。

それでは，精研式 SCT の研究はどのような状況であろうか。

### 1-3 精研式 SCT に関する諸研究

本邦で比較的多く用いられている SCT は精研式 SCT であるとされる(e.g., 深津, 2008; 黒田, 2012)。本研究において筆者が精研式 SCT を取り上げるのは，多く用いられている SCT でありながら，その分析法が確立されていないためである。よって，精研式 SCT の分析法の確立は，広く調査研究と臨床実践に寄与する可能性が高い。

以下に，(1)分析法・解釈法・整理法に関する研究，(2)刺激語に関する研究，(3)分析・解釈に影響する評定者の研究，(3)精研式 SCT を使用した研究について概観する。なお，本研究の目的に沿うよう，研究結果ではなく，あくまでもその分析手法に焦点を当てて記述する。また，今後「SCT」のみの記述はすべて精研式 SCT を指すものとする。

通常，反応の特徴を抽出する段階を分析，反応に対して意味づけを行う段階を解釈，そして，SCT には，60 の刺激語による解釈をまとめるための整理法が発表されている。所見までの手続きとしては，分析，解釈，整理となる。これまで，その研究の提示する方法がどの段

階にあたるのかあまり意識されていないようであるが、本研究では、その点を考慮し、異なる名称で記述されているものは、上記の定義により名称を置き換えて記述する。

### 1-3-1 分析法・解釈法・整理法に関する研究

これまで、SCT 反応の解釈を行うため、いくつかの方法が考えられてきた。

分析法に関する研究には、反応特徴の解釈仮説を探索したもの、解釈のターゲットに接近する方法を探索したもの、反応分析の観点を提示したものなどがある。

加藤(1967)は、SCT にみられる無応答の意味、つまり解釈仮説の立案を行った。手続きは、一般中学生 100 名、児童自立支援施設児（非行児群）47 名を対象に、対人的態度を把握できると思われる 20 の刺激語（例えば「小さい時、私は」）を分析対象とし、各群の無応答の頻度を刺激語ごとに調査し、2 群に差がみられるかを調査した。また、無応答がなかった者と 1 つでもあった者に分け、それぞれの“肯定”・“否定”・“中性”・“無応答”・“内容否認”・“あいまい反応”の反応数の比較を行った。さらに K-SCT の防衛指数を算出し、こちらも比較を試みた。これらの結果、SCT の無応答は、何かしらの防衛の表れであり、中性反応より積極的な防衛であり、否定的感情に近いものである、と結論付けられた。加藤(1967)の研究は、無応答という特徴的反応の解釈を可能とし、実践的であるが、適用できる反応が少ない。また、刺激語ごとの検討がなされていないため、無応答がその刺激語にとって一般的でないのか否かがわからないことが課題である。

近藤・西野・小高・小倉(1997a)は、精神疾患の重症度・進行度・回復度などを、SCT を用いて定量的に評価する方法の確立を目指して、2 種類の反応分析法を検証した。反応分析法は、(1)反応文に含まれる 3 文字と日本語コーパス<sup>3</sup>中の 3 文字の一致率を求め、反応が現代日本語と一致する程度から評価する方法、(2)刺激語と反応文の中で現れる単語同士の概念的な関係の度合いを測定する方法であった。近藤ら(1997a)は、入院患者 21 名・通院患者 2 名・一般大学生 12 名を対象に、まず、一刺激語に対する反応部分に現れた 3 文字のパターンとコーパス中の 3 文字パターン、また SCT 全体に対する 3 文字とコーパス中の 3 文字パターン上位 200 個の一致率をそれぞれ調査した。例として、SCT 全体の 3 文字パターンの例を Figure1 に示す。各対象者群の一致率を比較した結果、一刺激語では、通院患者と一般大学生は差がみられなかったのに対し、入院患者は一致率が低かった。また、SCT 全体では、入院患者、通院患者、一般大学生の順で一致率は低かったが、中には一般大学生であっても入院・通院患者より一致率が低い者も存在した。つまり、現代日本語と SCT 反応の一致率は、病理が重くなるにつれて低下していくが、すべての被検査者の病理を反映する指標ではないといえる。次に、SCT の刺激語と反応中に現れる名詞・動詞・形容詞・形容動詞の意味的なつながりの度合いである「概念距離」を、先頭の単語とそれ以下の単語・隣り合う単語間・一刺激語中の単語間すべてについて測定し、それぞれ平均を算出した結果、概念距離による鑑別はあまり有効ではないと結論づけられた。近藤ら(1997a)の分析法は、SCT 反応を定量化

<sup>3</sup> 日本語コーパス：日本語の例文を多数集積したデータベース(近藤・西野・小高・小倉・崎畑・横尾, 1997b)

し、客観的な分析を行う方法として優れているが、反応内容に触れていないため被検査者像をつかめない、つまりパーソナリティ検査という面では使用しづらいと考えられる。

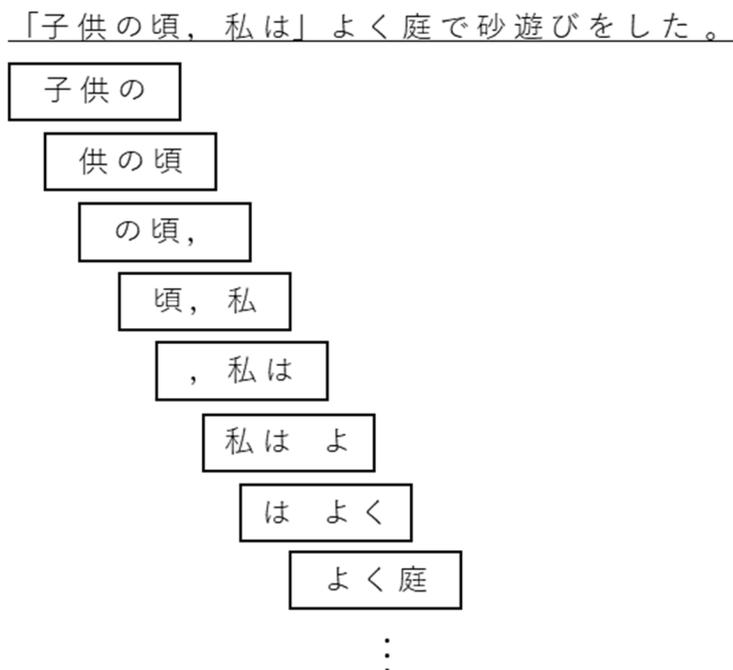


Figure1 近藤ら (1997b) の文字パターンの切り出しの例  
An example of the way of making string-pattern by Kondou et al.(1997b)

注) Figure1は近藤ら(1997b)による図を筆者が作成しなおしたものである。

堀越・横田(2005)は、SCTを用いて過去のいじめ経験の有無をスクリーニング可能か、加害者・被害者・傍観者・援助者・無関係者といったいじめ経験を有する大学生37名を対象に、SCTのうち24の刺激語を用いて調査した。各刺激語から受ける印象、さらに新たに追加したいじめの把握や役割に関する刺激語(例えば、「いじめに参加することは」など)の印象をそれぞれ「否定的(1点)」～「肯定的(5点)」の5段階で評定し、いじめを予測するSCTの刺激語を抽出した。さらに被検査者のいじめ役割(例えば、被害者や加害者、傍観者など)の違いによる各刺激語の評定得点への影響を検討し、いじめ被害者は他の役割に比べて「学校では」の点数が有意に低いなど、SCTによりいじめを把握可能であると結論付けた。堀越・横田(2005)は、被検査者の体験を被検査者の意図しない形で予測できる可能性を示唆しているが、パーソナリティ検査として特定の体験の有無を把握することがどれほど重要であるのか疑問である。むしろ実際に体験したか否かよりも、そのような体験を通して得るような心性をその被検査者が抱いていると考えるべきであろう。堀越・横田(2005)の分析はその反応自体を意味づけるためのものではないが、もしこの方法を分析法に用いると、段階評定は評定者によって評定が異なる可能性があるため、評定者の訓練が必要であろう。

SCTにある「死（Ⅰ-12）」と「自殺（Ⅱ-13）」の刺激語について、水野・有木・浅川・北島・津川・張(2013)はロールシャッハ法の包括システムにみられる自殺の可能性に関する指標(Suicide Constellation, 以下 S-CON)と、有木・水野・浅川・北島・津川・張(2013)は、Zung Self-Rating Depression Scale(以下、SDS)の Q19「自分が死んだほうがほかの者は楽に暮らせると思う」との関連をそれぞれ調べ、各心理検査の自殺リスクの有用性を調査したのもある。両研究ともに、精神科外来通院患者 70 名を対象に、自殺に対して“肯定・親和的”・“否定・非親和的”・“中立的”・“両価的”・“無反応”・“その他”に SCT の 2 つの刺激語への反応を分類し、各項目に該当する反応をした者の S-CON の値及び SDS の Q19 への回答を調査した。水野ら(2013)は、ロールシャッハ法の S-CON との関連について、SCT の「自殺（Ⅱ-13）」に“肯定的・親和的”にこたえる者は、S-CON の数が 7 以上を示したとした。さらに、S-CON の下位指標との関連を調査し、「自殺（Ⅱ-13）」に“両価的”にこたえる者の多くは、過去に自殺念慮や自殺企図歴を有し、S-CON の指標の一つである「FV+VF+V+FD>2」に該当した、とした。有木ら(2013)は、先述の SCT 反応の分類に“判定不一致”を加え、SDS の Q19 との関連を調べ、「自殺（Ⅱ-13）」に“肯定的・親和的”にこたえる者は、“否定的・非親和的”にこたえる者よりも SDS の Q19 に対して高い頻度で希死念慮を抱くと回答するとした。一方、上記の研究の後続研究であり、精神科外来通院患者 98 名を対象とした風景構成法の「構成の型（アイテムの統合度）」・「色彩の程度（余白の大きさや筆圧など）」との関連の調査からは、有意な関連がみられなかったとした(北島・水野・有木・浅川・津川・張, 2014)。これら一連の研究により、「自殺（Ⅱ-13）」に対して“肯定的・親和的”あるいは“両価的”に反応することが、自殺リスクを示す可能性があるといえる。自殺リスクのアセスメントは臨床上大変重要であるが、一つの指標に過ぎず、また 60 の刺激語のうち残り 58 の刺激語についてはどうなのか、回答を歪曲されていた場合はどうなるのか、むしろ自殺や死とは全く無関係な刺激語との関係の方が、投映法として、また心理検査による自殺のサインとして重要なのではないかと思われる。

長田(2015)は、SCT に現れる抑うつ傾向を検討するため、大学生・大学院生 121 名を抑うつ尺度によって健康群と抑うつ群に分け、それぞれの“+反応（肯定的反応）”と“-反応（否定的反応）”の数を比較した。その結果、“-反応”は抑うつ群に有意に多く、関連がある、しかし SCT 全体の“-反応”の数からは抑うつの判別はできないとした。また、“+反応”を 4 点、“±（両価）”を 3 点、“0（評価なし）”を 2 点、“-反応”を 1 点として、各群の平均値を比較し、抑うつ群に否定的反応が出やすい刺激語を同定した。さらに、9 名のうつ病・抑うつ神経症患者の臨床群を加え、各群を比較すると、臨床群・抑うつ群・健康群の順で“-反応”の数は多く、5 つの刺激語で抑うつ群よりも臨床群の方が有意に“-反応”が多いとした。長田(2015)は、抑うつの高い者に否定的反応が多いことを見出し、抑うつの高い者が有意に否定的反応を表出する刺激語を同定した。しかし、上記にもある通り、否定的反応の総数は抑うつを判別できないことも明らかとなり、SCT を基にした抑うつのアセスメントが可能なのか疑問である。また、スコアリングを行っているが、その平均点が低いことが必ずしも否定的反応の多さにはならないであろうし、点数の割り当てが適切かも疑問が残

る。

平野・那須川(2020)は文章からパーソナリティ特性理論であるビッグファイブの特性を推定する人工知能システムを使用し、SCT反応を分析・解釈しようと試みた。著者らは、精神科入院治療を受けた統合失調症患者 89 名の SCT の「自殺 (II-13)」への反応を“否定”・“過去に希求”・“希求・肯定”・“過去希求・現在否定”・“不明”の 5 つに分類した。人工知能による各群のビッグファイブの値を比較したところ、希死念慮のある被検査者のパーソナリティ傾向が、先行研究で指摘されるパーソナリティ傾向とおおむね一致したことを示し、SCT から自殺企図のリスクを推測できる可能性があるとした。人工知能を用いた分析・解釈は評定者の主観が入らず、公平性を保てると考えられる。問題は、人工知能を臨床実践に導入することがどれほど現実に可能かということと、自殺リスクはあくまでもビッグファイブのスコアを媒介して判断したもので、他の側面についてもビッグファイブとの関連からしか推察できないことであろう。

佐藤・古屋・石井(1991)は、非行防止のための親子カウンセリングに来所した中学生 156 名を対象に、家族関係を分析するためのコードシステムを作成した (Table2)。コードシステムは、家族・家庭に関する全反応に適用するもので、“父親”・“母親”・“同胞”・“家庭”といった対象、それぞれ“対象への態度”・“対象の態度”・“自分との関係”・“記述的内容”・“言及なし (無反応)”といった内容の 2 軸構成である。内容には下位カテゴリー (例えば、“対象への態度”には“親和”・“同情”・“拒否”・“恐怖”・“両価的”・“その他”がある) が設定された。佐藤ら(1991)は、各カテゴリーに該当する反応の有無をカウントする方法により、それぞれの出現頻度及び出現率を算出し、男女の違いや問題行動とカテゴリーの関係について考察を行った。佐藤ら(1991)は、反応傾向を 2 軸から体系的に明らかにしようとする分析法であり、調査研究と臨床実践ともに使用しやすいと考えられるが、健常群を設けておらず、そこでみられた特徴が非行少年の特徴か否かがわからないという問題点がある。

Table2 佐藤ら(1991)によるSCT反応分類  
SCT responses' classification categories by Satou et al.(1991)

対象	言及内容				
	対象への態度	対象の態度	自分との関係	記述	言及なし
父親	親和	拒否	接近	記述	言及なし
母親	同情	厳格	孤立		
兄弟姉妹	拒否	愛情	回避		
家庭	恐怖	放任	両価的		
	両価的	両価的	その他		
	その他	その他			

注) 佐藤ら(1991)に掲載されている表を一部書き換え作成したものである。

熊野(2006)は SCT に 13 の刺激語を加えたものを大学生 85 名に施行し、自己開示の高低

との関係を調査した。分析項目は，“反応拒否”・“反応ごまかし”・“短い反応”・“意見”・“心情”であり，さらにそれぞれ下位項目（例えば，“反応拒否”には，“無応答”・“批判的反応”・“無効反応”・“拒否反応”・“問い返し反応”がある）を設定した。さらに，調子を弱める副詞（例えば，“あまり”“ほとんど”など）の有無，自己への言及度（刺激語に“私”はないが，反応で自分のことを記述したか否か），また形式的側面として文字数を取り上げた。それら分析項目と自己開示度の関係を調査した結果，文字数・自己への言及度とは関係が見いだせなかったが，調子を弱める副詞は自己開示度の低い群に有意に多いことが報告された。熊野(2006)は，SCTの反応特徴とパーソナリティ特徴（自己開示度）の関連の有無を検討し，SCT反応の分析となりうる所見を見出した。しかし，自己開示の高低を基準として，各群の反応をみているため，自己開示の中程度の被検査者はその特徴的反応を表出するのか否か，つまり，特徴的なSCT反応から特徴的なパーソナリティを推察できるといえるのか疑問が残る。

石井・鈴木(2010)は，精研式SCTの分析法として，分類による反応の類型化とその出現頻度によって一般的反応と特異反応を捉える方法を提案した。石井・鈴木(2010)は，190名の20歳男女によるPart Iにある<家族・家庭>に関する6つの刺激語の反応を対象に，刺激語別に反応類型とその下位カテゴリーである副類型，それぞれの出現頻度を算出した。さらに，出現頻度の低いものへの解釈仮説も提示した。しかし，刺激語によって反応分類項目及び副分類項目が異なり，系統的に設定されていなかった。よって，分類が非常に困難であり，分類項目は再検討を要すると結論付けた。

土橋(2015)は，先述した自我発達水準を測定するWU-SCTの評定方法を精研式にも適用しようと試みた。60の刺激語のうち12の刺激語が対象となり，宮下・上地(1981)による日本語版評定マニュアルを用いて評定された。評定は反応特徴および反応例に照らして分類する方法であり，大学院生12名を対象にマニュアル内の表現の変更や信頼性の確認，さらに大学生109名を対象に自我同一性尺度を用いて，さらなる信頼性と妥当性の確認を行った。その結果，SCTによる自我同一性と質問紙の間にみられた相関が弱く，現段階において自我発達水準を確実に測定できるものではないとした。

上記のように，SCT反応の特徴をどのように取り出すのか，その特徴が何を意味するのか，様々な方法によって試みられている。それには大きく2つあり，加藤(1967)や石井・鈴木(2010)のような特徴的な反応が意味するものは何かといったボトムアップなアプローチと，堀越・横田(2005)や水野ら(2013)，長田(2015)，佐藤ら(1991)のようないじめや非行，自殺リスク，抑うつなどの特徴や背景をもつ被検査者をSCT反応あるいは反応分布から捉えることができるか，いい換えれば被検査者の特徴や背景はSCT反応にどのように表れ，それをとらえる分析法とはどのようなものかといったトップダウンなアプローチがあるといえる。

ボトムアップ型の研究のメリットは，特徴的な反応そのものの解釈を可能とする知見を与えることにある。一方で，限界もある。加藤(1967)の分析は無応答の分析にとどまること，無応答が現れる刺激語を考慮しないことが課題となる。刺激語の中には，無応答が特別なこと

ではないものもあるかもしれない。石井・鈴木(2010)は反対に、刺激語の違いを最大限考慮し、刺激語ごとに分類項目を設定したため、その刺激語に適した項目であるが、複雑となり、分類自体が困難であることが問題である。

トップダウン型の研究のメリットは、一見普通の反応と思われるものでも解釈の指標となる可能性を示すことができる点にある。しかし、その背景やパーソナリティ特徴をもつことを前提に反応をみているため、ある特徴的反応をもつ者が皆共通した特徴的な背景やパーソナリティを持つといえるのか疑問である。

整理法には、先述した槇田・小林・岩熊(1997)のほかに、山本(1968)による、力動精神医学の観点から解釈を標準化・一般化することを目的に、自己に関するものと外界に関するものの2領域についてそれぞれ判定するものがある。前者には、自己肯定感 - 否定感、自我同一性の安定感 - 不安定感、身体の健全・安定性 - 病的・異常性、目標・理想・価値観など、情調の明るさ - 暗さ、性格特徴の6種があり、後者には家族、異性、一般対人関係、社会的態度の4種がある。まずはそれぞれ独立に、前者は現在と将来について否定的 - 肯定的の観点で、後者は被害的 - 協力的、主導的 - 征服の2つの交叉する観点から、個々の反応を評定する。最終的に、それぞれ座標軸上にプロットした際の集中や分散の程度から内的葛藤・矛盾・両極性の様相・精神的分化度を捉え、SCTの総合解釈とする方法である。例として自己に関する判定軸をFigure2に示す。山本(1968)は、個々の刺激語への反応を統合する視点を提供したが、軸上に反応を位置づけるには直観法による解釈が必要となる。

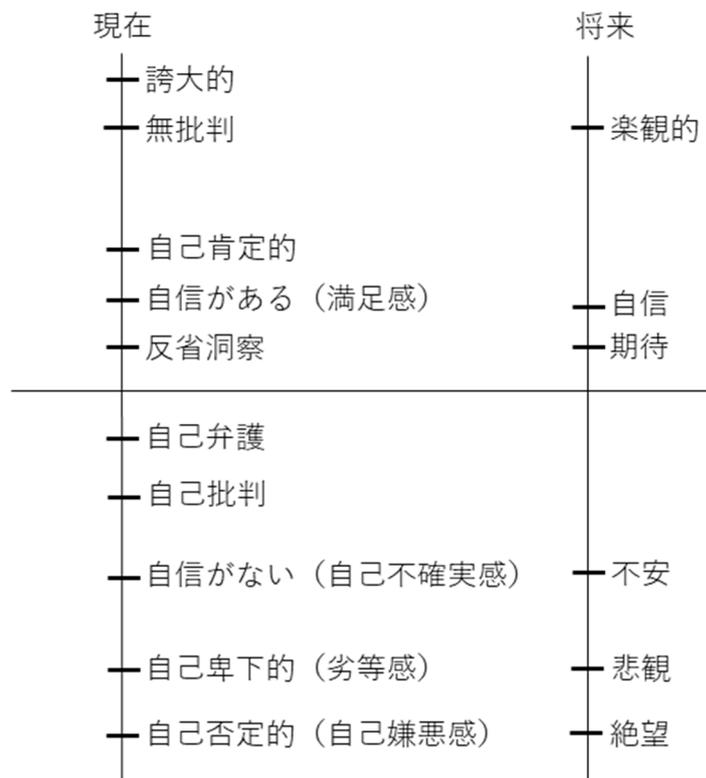


Figure2 山本（1968）の自己に関する判定軸  
Axis of judgement about self by Yamamoto(1968)

注) Figure2は山本(1968)による図を筆者が作成しなおしたものである。

### 1-3-2 刺激語に関する研究

SCTには、刺激語そのものの特性について調査した研究もある。今川(1982)は、SCTの刺激語がどれほど曖昧なものかを、大学生55名に各刺激語の曖昧さを「非常にあいまい(1点)」～「非常にあいまいでない(7点)」の7件法で評定するよう求め、調査した。その結果、60刺激語中41刺激語は曖昧な方に偏っているものの、もっとも曖昧とされた「今までは(1-28)」でも「かなり(2点)」と「やや(3点)」の中間ほどであったとした。また、人称の違いか刺激の長さのどちらかが、曖昧さの認知に影響を与えているとした。さらに、因子分析によって曖昧さの認知の次元を検討した結果、「私が心をひかれるのは」といった「私～+助詞」の刺激語、「仕事」のような名詞句のみで助詞を持たない刺激語、「もし」と「私」によって構成される刺激の3因子が抽出されたとした。

### 1-3-3 SCT解釈と評定者に関する研究

SCTは、その解釈に影響を与える評定者の要因について研究がなされている。

Indow, Sano, Namiki, & Makita (1962)は、評定者の評定経験の違いがSCTから読み取るパーソナリティ像に違いを生じさせるのかを調査するため、SCTの評定者経験の異なる3群

各 3 名に 220 名のケースの D（知的側面のうち精神的分化度）と S・Z・E（情意的側面），G（顕示欲）について各パーソナリティ特性の程度や有無を評価するよう求めた。その結果，9 名の評定者間での評定の斉一性は 5 つの特性すべてで認められたとしており，評定者の評定経験の違いは推測するパーソナリティ像に違いを生じさせないといえる。

曾野(1971)は，一般的に SCT 被検査者のパーソナリティがどのように把握されるのか，評定者側のパーソナリティはどのように影響するのかを調査した。方法は，D，さらに S・Z・E，さらに H（力動的側面のうち未成熟さ）の組み合わせによる 12 のパーソナリティ・タイプをよく表している SCT を 482 名の大学生に，1 名につき 2 タイプずつ見せ，SCT からどのようなパーソナリティ・タイプかを評価させ，もともと想定されているパーソナリティ・タイプと一致しているかを調査するものであった。また，評定者のパーソナリティ・タイプを調べ，その一致率に評定者自身のパーソナリティがどれほど影響するのかも調べた。曾野(1971)は，専門家でなくとも「一般的傾向として，他者のパーソナリティ特性を，あまり見当はずれでなく，それらしく判断していることが推察された(p193)」としており，中でも S・Z・E のような情意的側面が把握されやすいとした。また，E の特性を持つ評定者は他者の特性の把握が極めて悪く，D が低い評定者も比較的同様の傾向がみられると結論付けた。

榎田・伊藤(1993)も評定者のパーソナリティと SCT 評定の関係について調査した。榎田・伊藤(1993)は，曾野(1971)と同様の D と S・Z・E と H，加えて N(神経質)・G について，SCT を学んでいる人事・労務・教育関係者 126 名に 100 ケースを評定させ，著者である榎田・伊藤の評定との一致率をケースの性別，評定者の D や S・Z・E といったタイプ別に算出した。その結果，(1)ケースの D やパーソナリティ・タイプの評価における難易度にほとんど差はない，(2)H の評価は難易度が高く，G と N は低い傾向にある，(3)ケースの性別によって，また評定者の D によって正答率に違いがみられるパーソナリティの側面がある，とした。さらに，126 名中 66 名の男性を対象とした，評定者とケースのタイプの関係の調査では，S・Z の評定者はケースを S と，E の評定者はケースを Z と評定する傾向がみられるとした。つまり，評定者の精神分化度やパーソナリティによって，ケースの評価が異なる可能性を示唆した。

曾野・伯井(1971)は，評定者のパーソナリティとトレーニング経過(トレーニングによるケース評価の正答具合)について調査した。13 名の人事・労務関係者のパーソナリティを SCT から把握し，さらに SCT 評価のトレーニングを 11 回に渡って行った。その結果，評定者の D の高低や性格類型 (S・Z・E) とトレーニング経過に差はなく，H の高低のみ，さらにトレーニング 4 回目までで差がみられたとした。また，トレーニングの効果が大きかったのは，Z 及び G の高い評定者，効果が小さかったのは D が低い評定者であるが，トレーニング初期の正答得点の順位はトレーニング中・トレーニング後も変わらなかったとした。つまり，評定者のパーソナリティはトレーニングの効果にあまり関係がないといえる。

岩熊(2003 ; 2004 ; 2006 ; 2007 ; 2008 ; 2009 ; 2010)は，SCT の反応から人物像を推定する過程について調査した。手続きは，SCT の評定の知識をほとんど有しない大学生を評定者として，性別・年齢・出生年のみが開示された SCT をもとに推定されたパーソナリティ像を

単語・文章で 20 個ほど、その際に根拠とした反応、特にその人らしい反応を挙げるよう求めるといったものであった。岩熊による一連の調査は、(1)評定者は反応間に意味的関連性を見出し、それらを結合して推論の根拠としていること、(2)根拠とする SCT 反応の選択には評定者のパーソナリティが影響しており、選択された反応とパーソナリティ推論は単純な一対一対応ではなく、そこにも評定者のパーソナリティが影響していること、(3)反応からパーソナリティを推論する際に、各評定者の反応への認知的処理の深さ（反応そのままを所見とするものから反応の概念化を行うものまで）が導き出されたパーソナリティに影響を及ぼしていること、を明らかにした。

これら評定者と SCT による被検査者像の関係についての調査は、槇田ら(1997)の解釈法により被検査者像を描くことで、そこに評定者の認知的性質（情報の取捨選択の仕方や意味づけ方など）が反映されると考えられるために行われてきた（岩熊，2003）。上記の知見を総括すると、評定経験による評定の違いはみられないものの、評定者のパーソナリティによっては、正答率が悪い、あるいはあるパーソナリティ・タイプに偏った判断をしやすい、といえるようである。そして、これらの所見は、SCT 解釈とは個々の評定者の特性が反映される可能性を示しており、投映法全般における批判の一つである、“所見に解釈する者それぞれの独りよがりな考えが入り込み、その人によって所見が異なる”ことを肯定することにもなりかねない。この批判に応えるためには、SCT に、直観法ではない、定式化した分析・解釈法が必要であることを示唆している。

#### 1-3-4 精研式 SCT を用いた研究

SCT の分析法が定式化されていない中、調査研究ツールとして SCT を用いた研究では、どのような分析法が用いられているのだろうか。SCT を用いた研究はある対象者(群)の特徴を明らかにしようとするものが多い。ここでは、その分析方法にどのようなものがあるのか、という視点で各研究をみていくこととする。

##### A：反応分類による分析方法

もっとも大規模な研究には、槇田・小林・渡辺・岩熊・西村(1992；1993)の研究がある。槇田ら(1992；1993)は、質問紙・SCT・面接法を用いて、現代の日本人の生き方や価値観を縦断的に調査した。中でも SCT は、一部改訂されているが、自己、家族、友人や仕事・男女観、死・病気や健康といった側面を被調査者の言葉でとらえるために用いられた。対象者は 1175 名であり、反応のばらつきが大きかった＜自己＞に関する刺激語を除いて、KJ 法による内容に即した分類が行われた。その際、小カテゴリーを作成し、それらをさらに大カテゴリーにまとめ、最終的には大カテゴリーの出現頻度が性別・年齢・居住地域ごとに算出された。大カテゴリーは、例えば「家の人を私を」に対して、“良い評価”・“マイナスの評価”・“大切にしてくれる”・“疑問”・“呼び方”・“体質”・“無関心”・“その他”，といった項目であった。また、事例検討が各調査項目について行われた。

上記の分析には反応の分類が行われている。そして分類項目は“肯定”・“否定”といった

評価, “大切にしてくれる”といった具体的反応, “疑問”や“呼び方”といった内容様式といった観点があり, 一次元の, つまり下位分類や複数の観点を掛け合わせることがなく, すべての項目が同列に設定された分類方法が採用されている。このように, 反応の分類によって, 特徴を明らかにしようとする方法が既存の研究における SCT 分析のスタンダードであり, 他の調査研究でも, これらの観点からの分類が主である。以下, 反応を分類する観pointsの違いごとに, 先行研究を概観する。

### 評価的観点からの分析

“肯定”・“否定”といった評価的観点から分類を行ったものが, SCT 分析の中では最も多くみられる。

池田・河野・西川・上林・今田・田中・中川・森岡・須賀・平田・佐藤 (1982)や河野・池田・西川・上林・今田・田中・中川・森岡・須賀・平田・佐藤(1983)は中学生に共通してみられる精研式 SCT の特徴を浮かび上がらせるため, <家族>・<教師>・<友人>・<学校>・<自己>・<情意>に関する刺激語への反応を, “肯定”・“否定”・“中立客観的記述”・“当然の事柄”・“その他”に分類して出現率を算出した。ただし, <将来>に関する刺激語のみ, 反応の仕方の観点から分類項目 (“将来の職業”・“抽象的な将来像”など)を設けた。

また, 伊東(2010)は小・中学生の心身症患儿に特有の心理的特性について調査した。対象児を年齢により 3 群に分け, 佐野・楨田(1972)による<知的・情意的・指向的・力動的側面>, <家庭的・社会的要因>について投影されやすいとされる刺激語への反応を“肯定”・“否定”・“客観的記述”・“その他”・“無応答”に分類した。ただし, 「大きくなったら私は」のみ“職業的”・“精神的”・“物質的”・“その他”・“無応答”といった, 異なる分類項目が設けられた。伊東(2010)はパーソナリティ側面・決定要因別に群間及び男女の違いを比較し, また知的側面と家庭的要因については, 佐野・楨田・山本(1987)による肯定的記述と否定的記述の一般的出現率との比較も行った。

青野・熊代・沼田(1983)は摂食障害患者を対象に, 両親への態度, 食事や食行動に対する葛藤や病識の有無, 自己や将来に関する葛藤や不安の有無を SCT によって調査した。反応の分析は, 両親への態度について, 反応を“肯定”・“否定”・“依存”・“両価”に分類し, その他の調査項目は記述の有無を確認する方法であった。

南・野添(2008)も摂食障害患者を対象に, 神経性拒食症・過食症患者の親との関係と病型による違いを調査した。刺激語の中でも「私の父 (I-9)」「私の母 (II-6)」「家の人は私を (I-5)」を対象に, 分析は, “肯定”・“中立”・“否定”・“評価困難”にそれぞれ分類, さらに“肯定”のみ下位分類として“～してくれる”・“明るい子だと思っている”といった内容に沿った具体的反応による分類も設定された。また, “肯定的記述”に“中立”, “否定的記述”に“評価困難”をそれぞれ下位分類として, その下位分類の出現頻度及び出現率を求め, 各群を比較した。

渡辺(1970)は, 小学生の小児肥満症患者を対象に, 家庭・社会(学校)の関係及び患児の心

理的特徴の把握を目的に、質問紙や投映法を組み合わせたテストバッテリーを実施した。SCT 反応の分析については、反応内容から家庭・学校での態度を“+”または“-”で評定した。また、その他に、「家では(Ⅱ-1)」, また刺激語にかかわらず劣等感や恥, 欲求に関する反応を取り上げ、それぞれ内容様式で分類し、健常小学生からなる対象群と比較した。

中山(2007)は、触法少年の資質・心性の時代変化を調査するため、各年代の触法中学生を対象に佐野・榎田(1972)による4つのパーソナリティ側面のうち<指向的側面>と3つの決定要因のうち<家庭的要因>・<社会的要因>に関する全8つの刺激語について調査した。分析法は佐野・榎田・山本(1987)による分類を用いており、刺激語により分類項目は若干異なるが、“+の内容”・“-の内容”・“客観的記述”・“その他”・“重複”・“無答”などの各群の出現頻度及び出現率を比較した。

山田 英(1977), は小中学生の児童養護施設の入所児童と一般家庭児を対象に、現実生活への適応状態および未来への指向性について調査した。SCTの刺激語は一部改訂されているが、分析は<大人>・<教師(職員)>・<家族>に関する刺激語による反応を“プラス”・“マイナス”・“不明”に分類し、各群の出現率を比較した。また、<将来>に関する刺激語への反応は反応内容に沿った分類項目を設定し、出現率を比較した。山田 良(1977)も中学生の施設児と一般家庭児を対象に、人格発達や生活環境への適応状態および生活環境による自己像の様態の違いを調査するため、山田 英(1977)と同様の刺激語を用いて、“肯定”・“否定”・“中立”・“両価”・“その他”・“反応拒否/無応答”などに分類、<自己>に関する刺激語には反応内容に即した分類項目を設けて、その出現率を比較した。

これらでは、分類項目の出現率から対象者群に共通した傾向を得ることができている。さらに、対照群を設け、それぞれの出現率を比較して統計的な有意差の有無を調べることで、対象者群に特有の性質を把握するなどの成果を得ている。

これらの先行研究をみると、評価的観点による分類項目は、<家族><友人><社会>など、多くの刺激語領域に適用できると考えられる。ただし、池田ら(1982)や伊東(2010)などは<将来>, 渡辺(1970)は「家では」, 山田 良(1977)は<自己>に関する刺激語に対して別の分類項目を設けており、評価的観点が必ずしも全ての刺激語領域に使用できるものではない、あるいは最適ではないことがわかる。

### 具体的内容による分類

具体的な反応内容をそのまま分類項目に用いているものもある。

桂・栗山・長谷川・山口・山田・森下・中島・萩原(1972)は喘息患者と一般健常群の対人関係把握の違いを調査するため、「私はよく人から(Ⅰ-2)」「家の人は私を(Ⅰ-3)」「人々(Ⅰ-13)」「友達(Ⅱ-3)」「家の人は(Ⅱ-26)」の5つの刺激語に対する反応を、例えば「家の人は(Ⅱ-26)」であれば、『みんないい人』『理解してもらえない』など内容に沿って分類し、それぞれの出現率を算出し、群間で比較した。

出石(2001)は、施設入所児童の心理的側面の把握を目的に、小学3~6年生の入所児童と一般家庭児童を対象にバウムテスト・SCTを用いた調査を行った。SCTの分析方法は、佐野・

榎田(1972)による4つのパーソナリティ側面と3つの決定要因を把握する各刺激語群への反応を、それぞれ内容に即して(例えば、「勉強(知的側面)」は、「嫌い・苦手・しない」・“好き・楽しい・している”・“頑張る・できるようになりたい”の3カテゴリー)分類し、各被検査者群の出現頻度および出現率を比較した。

これらでは、先述した評価的観点からの分類同様、分類項目の出現率から対象者群に共通した傾向を得ることができている。しかし、出石(2001)が指摘するように多様な分類項目がみられ、統計的な処理に不向きと考えられる。

これらの先行研究の手法は、分類項目が実際の反応そのものであるため、分類されても内容を鮮明に捉えやすいというメリットがあると思われる。また、各刺激語に最適な分類項目を設定しやすい方法ともいえる。しかし、刺激語をまとめることが難しく、それぞれの刺激語にそれぞれ別の分類項目を設けなくてはならない、また先にあげたように、分類項目が増えやすくなるデメリットも考えられる。

### 内容様式による分類

内容様式は、評価や反応内容とは異なり、何について記述したのかについての分類である。

榎田(1997)は女子大生を対象に、風景構成法における家とSCTによるパーソナリティの比較を行った。SCTの分析法は、＜家族・家庭＞に関する刺激語による反応を“外面”・“性格”・“感情・評価”・“願望欲求”などに分類し、さらに下位カテゴリー(“外面”であれば“身体”・“趣味嗜好”・“職業”など、“性格”であれば“がんこ”・“やさしい”・“あかるい”・“似ている”，など)を設定して、出現頻度を算出した。

古屋(1993)は、非行防止の一環として行っている親子カウンセリングに来所した中学生を対象に、家族イメージを調査した。分析方法は、先述した佐藤ら(1991)の分類であり、統計的手法によって4つの家族イメージを抽出し、その特徴について考察した。

内容様式では、評価的観点・具体的内容による分類と異なり、分類を行ってもそれ自体からは被検査者のパーソナリティを推察することが難しい。例えば、ある刺激語で自分の性格について記述した被検査者と、自分の願望について記述した被検査者では何が違うのか、それぞれどのようなパーソナリティといえるのか、断定できない。そのため、榎田(1997)は対象者群から引き出された内容様式を提示するのみにとどまっている。古屋(1993)は反応様式に主に評価的観点からなる下位分類を設け、統計的手法を用いて、被検査者群の家族イメージの類型化を行っている。

これらの方法をみると、内容様式は、刺激語が何について記述するよう要請していると思ったのかを問題としているといえる。内容様式であれば、分類項目が膨大になることも少なく、分類は容易であると考えられる。しかし、それだけでは、何について記述したのかはわかっても、どのように記述したのかがつかみづらいというデメリットがある。そこで、上記の先行研究は、それぞれ下位項目を設ける事で、さらにその様式の詳細を捉えやすくしたり、反応内容や評価的側面をも考慮し、不足なく反応の特徴を汲み取ろうとしていることがわかる。ここで挙げた2つの先行研究は共に＜家族・家庭＞領域であるが、その他の領域で

も、内容様式による分類は可能と考えられる。

### それぞれの分類の観点が一次元になったもの

上記 3 つの観点からの分類が一次元に設けられている研究もある。つまり、評価的観点、具体的内容、内容様式がそれぞれ同列に並ぶ方法である。先に紹介した榎田ら(1992 ; 1993)はこのタイプの分類である。

また、橋本・雲井(2007)は女子高生・女子大生・医療系女子専門学校生を対象に、青年期女子の愛着タイプと自立、心理的特性の関連を質問紙・バウムテスト・SCT を用いて調査した。SCT は 2 つの刺激語を追加しており、詳細な分析方法は不明だが、友人については評価的観点、家族・同胞については“肯定的記述”・“人数構成”・“両親”・“家族成員”と、評価と内容様式が混合した分類項目が設定され、被検査者を質問紙によって 4 つの愛着タイプ群に分け、それぞれ出現率が算出された。

さらに、複数の観点を融合させた分類項目もある。甲斐(1985)は不登校児童を各々の状態から、例えば“精神病を疑わせるもの”“性格傾向に起因する不登校”など 5 群に分け、家庭・学校など様々な場面における自己認知を SCT によって調査した。分析方法は、反応分類であり、それぞれの出現率を算出し群間で比較する方法であった。分類項目は、“職業を述べているもの”といった内容様式であったり、また“マイナスの自己像”といった評価と内容様式が融合したものであった。

武内(1986)は、一般女子大生の家族・恋愛・結婚・男性観・女性観を調査するため、反応内容から分類項目を設定し、出現率を算出した。分類項目は“厳しい”・“優しい”といった反応内容、“行動的側面”・“精神的側面”といった内容様式、さらにそれらを掛け合わせた分類項目（例えば、「行動的側面からとらえた母（肯定）」など）が設定された。

### B：反応分類以外の分析法

その数は少ないが、反応分類以外の方法も行われている。

甲斐(1985)は反応分類による分析に加えて、自己像に関する記述を抜きだし、“ポジティブ”に評価しているものを 1 点、“ネガティブ”に評価しているものをマイナス 1 点として数値化し、各群の平均を比較する方法を用いた。

大日方・小西(1987 ; 1988)は不登校高校生と一般高校生を比較し、不登校生徒の心理的特徴を調査した。大日方・小西(1987)は不登校高校生・一般高校生を対象に、SCT を 2 回実施し、Kauffman & Raimy が 1949 年に発表した P・N・Av・Q という指数を用いて分析を行った。この指数はもともと、カウンセリングによるクライアントの変容過程を実証するために開発されたもので、カウンセリングにおける発言を単語・分節ごとに“肯定的”・“否定的”・“両向的”に分類し、“否定的発言”・“両向的発言”が全発言に占める割合を算出するものである。大日方・小西(1987)は、この指数を SCT 全体、また佐野・榎田(1972)が提唱する 4 つのパーソナリティ側面と 3 つのパーソナリティ決定要因が生起しやすい刺激語群ごとに算出し、一般・不登校群の平均を比較した。

岸本・根来・澤田・紀本・太田・定松・飯田・岸本(2012)は、アスペルガー症候群の診断を持つ7名を対象にSCTの成人・中学生・小学生用から46の刺激語を実施した。分析は、SCTの刺激語を梶田が1988年に発表した自己意識の主要様式である〈自己の現状について〉・〈他者から見られていると思う自己イメージ〉・〈過去の自己イメージ〉・〈将来の自己イメージ〉に加えて、〈家族イメージ〉・〈異性イメージ〉に分類し、それぞれについて各被検査者の反応内容から共通の特徴を抜き出す方法であった。

直観法に対する整理法となるが、武内(1986)は、反応分類による分析に加えて、佐野・槇田(1972)の評定法を用いて、精神的分化度3段階・基本性格3種類も評定した。

直観法によって得られた所見を数値化した研究もある。

先述した梶田(1997)は、反応分類による出現頻度の算出に加えて、SCT全体を通して、家族に対する感情、家庭内における自己評価、家庭に対する満足度をそれぞれ「肯定・満足」～「否定・不満」まで5件法で評価する方法を用いた。

大日方・小西(1988)は、不登校高校生・一般高校生を対象に、村上が1970年に発表した評定尺度を用いて比較した。その方法は、個々の刺激語による反応ではなく、SCT全体を通して評定する直観法であり、自我機能のあり方・自己受容のあり方・対人関係のあり方・表現形式について5段階評定を行うものであった。

また、玉井・三浦・横山・野間・桜井(2009)は20～40代の男性を対象に、自己意識の発達の様相を調査した。著者らは自己意識の様々な側面(身体・性・他者や事物への感情表現、能力、特性など22の側面)がどの程度反応に現れているのか直観法で得た所見を4段階で評定し、統計的手法によって年代間を比較した。

上記の先行研究を概観すると、SCTを調査研究ツールとして用いた研究の特徴は、対象者(群)に共通の特徴を見出すことが目的とされ、主に反応分類が用いられていることが挙げられる。佐野・槇田(1972)による「性格類型」「力動」「志向」やパーソナリティの「決定要因」を同定したり、「知的水準」や「エネルギー」を段階評価する方法が用いられることのほうが少なく、臨床実践による方法と調査研究の方法は別であるといえる。

反応分類に関しては、刺激語ごとに分類項目を設定する方法が主であり、評価、具体的な反応内容、内容様式の観点から設定される事が多い。中でも評価的観点が特に多く用いられる。さらに、これらの観点を混合に並べ、一次元の分類とする場合もあれば、上位カテゴリーに下位カテゴリーを設けた二次元とする場合もある。さらに、分類項目自体が複数の観点を融合している場合もある。これら既存の研究から示唆されることは、あるひとつの観点だけでは、全ての刺激語への反応を分類することが困難、あるいは汲み取れないものがあるということである。そのため、刺激語によって分類項目が異なる場合も見受けられるし、各々の研究目的に沿って分類項目の設定が異なり、研究間の比較が難しいという問題もある。

#### 1-4 本論文の目的

SCT に用いられる直観法は、反応のニュアンスをくみ取ることができる一方で、様々な問題がある。主な問題点として、被検査者による回答の歪曲の影響を避けられないこと、独断的・恣意的解釈であるという批判に耐えられないことが挙げられる。実際、MMPI と SCT (精研式ではない) の社会的望ましさの高さに関連がみられる (Rozynko, 1959)、解釈者のパーソナリティによって SCT 所見が異なる (e.g., 槇田・伊藤, 1993)、とそれぞれ指摘されている。また、直観法では分析・解釈の定式化といえず、調査研究での使用が難しい。その結果、臨床実践と成果をつなぎづらいつ考えられる。上記の SCT に関する調査研究を概観すると、SCT を用いた研究論文に近年のものが少ないことがわかる。これは、SCT に定式化した分析法が確立していないことが要因なのではないかと推察される。そこで、本論文では、直観法を補完するような定式化した SCT の分析法の立案を目的とする。

これまで行われてきた SCT の分析法を K-SCT や MJ 式 SCT も含めて、反応を分析するという観点から再度 Table3 にまとめた。

Table3 にある先行研究は調査研究が主である。調査研究に用いられたこれらの分析法をそのまま臨床実践に用いるには、多少の問題がある。SCT を用いた調査研究は目的や対象が絞られ、パーソナリティを包括的に拾い上げようとするものが少ない。また、使用する刺激語も限定していることが多い。一方、臨床実践でパーソナリティ検査として SCT を用いる際は、できる限り多くの観点から特徴を拾い上げる必要がある。よって SCT 一式の使用が通常である。つまり、調査研究と臨床実践両方に使用できる定式的分析法とは、SCT 一式を対象として、できる限り多くの観点から特徴を拾い上げられる方法となる。調査研究で用いられたそれぞれの分析法を臨床実践に適用することは、方法上可能であるが、分析の観点が圧倒的に足りないといえる。また、調査研究・臨床実践の成果をつなぐためには、個人間・個人内の比較ができることが前提となる。

Table3 にもあるように調査研究の主流は反応分類である。おそらく SCT の分析法でもっとも使用しやすいと考えられる。本論文は反応分類による定式的分析法の立案を試みる。

“調査研究と臨床実践両方に使用できる定式的分析法”の観点から反応分類の問題点を探ると、反応分類は扱う刺激語が増えるほど、刺激語共通の分類の観点(軸)や分類項目の設定が難しい。一方、異なる分類では、刺激語間の比較が難しくなる。多くの刺激語に共通して用いることができるものは、内容様式や表現様式であるが、内容様式も表現様式も反応の情感を取り上げることができず、SCT 反応のもつ重要な要素を取りこぼしてしまう。

一方、反応分類ではなく、特定の内容や表現の有無を抜き出す方法は、その内容や表現を抜き出す根拠が明確でないと、やはり恣意的な分析となる。対象者群の共通点を抜き出す方法は、反応分類の具体的内容による分類と同様の手続きといえる。特徴を抜き出す際の観点が刺激語間で一致しない可能性もあるため、被検査者内の比較が難しい。

スコアリングも、分類あつてのことなので、まずは分類軸および分類項目が確立している必要がある。

以上はすべて反応内容に関する問題である。数は少ないが、反応の形式に関する分析もあ

り、文字数が取り上げられている(熊野,2006)。これは反応形式の一側面であり、可能な限り多くの観点から特徴を把握する考えに立脚すれば、文字数以外の観点についても検討が必要であろう。

Table3 日本で用いられるSCTとその分析法  
Japanese SCTs and analysis method

SCT	分析式	長所	短所
精研式 SCT	反応分類 (あるいは記号化) 評価的観点 (肯定・否定など) 具体的内容 ("みんないい人"など)	最もポピュラーであり、 多くの刺激語で用いられやすい どのような反応であるのか、 わかりやすい	一部刺激語には不向き 分類項目が過剰に増える可能性が ある 刺激語によって分類項目が異なり、 比較できない
	内容様式 (外面、対象への態度など) 上記の観点が一次元に設定	多くの刺激語で使用できる	反応の情感がわからない
	上記の観点を融合 (“マイナスの自己像”など) 表現様式(無応答、反応拒否など) 自我発達水準 (WU-SCTマニュアルにある反応例)	反応の特徴を最もよく表す 分類項目を設定できる 反応の特徴を最もよく表す 分類項目を設定できる 多くの刺激語で使用できる 反応例があるため具体的	刺激語によって分類項目が異なり、 比較できない 刺激語によって分類項目が異なり、 比較できない 反応の情感がわからない 例にない反応を分類する際、 どの観点を基準に分類すべきか わかりづらい
反応分類 とスコアリング	評価的観点から分類後、 指数の算出	SCT全体(計算を行う範囲)の 情感が分かる 被検査者間の比較が容易	数値にまともにしてしまい、 個々の特徴が見えづらくなる
その他	評価的観点の程度を判定 特定の内容・表現の有無 共通点の抜出	最もポピュラーな観点であり、 かつニュアンスも考慮できる 特定の関心のみにターゲットを 絞ることができる 反応の情感をくみ取ることが できる	程度の評価が評定者によって 異なる可能性がある ターゲットとした理由が 不明確だと、恣意的 被検査者内比較が難しい
K-SCT	反応分類 とスコアリング 刺激語領域ごとに異なる分類軸の設定 (評価的観点、積極-受動、内向-外向) “中性感情”・“反応失敗”などは全刺激語 共通項目 →各種指数の算出	評定者の独断・恣意的とならない 評定者の独断・恣意的とならない 評定者の独断・恣意的とならない 評定者の独断・恣意的とならない SCT全体(計算を行う範囲)の 情感が分かる 被検査者間の比較が容易	反応そのものは考慮されない 反応そのものは考慮されない 反応そのものは考慮されない 反応の内容は考慮されない 数値にまともにしてしまい、 個々の特徴が見えづらくなる
MJ式 SCT	反応分類 (あるいは記号化) 表現様式	多くの刺激語で使用できる 評定者の独断・恣意的とならない 評定者の独断・恣意的とならない	反応の情感がわからない 個々の反応がどうであったかが 考慮されない 反応の内容は考慮されない

以上、分析法の作成を考えると、分析の容易さや刺激語間の比較を可能とするためにも、全刺激語に共通の観点から分析を行うことが望ましい。また、調査研究と臨床実践、様々な目的や対象に用いるため、できる限り多角的に特徴を抽出できるような反応内容と反応形式それぞれの分析法が必要である。さらに、それぞれの分析に複数の観点を設定すれば、反応の特徴を不足なく抽出できるのではないかと推察される。

それらをうけて、本論文は調査研究と臨床実践で共通して用いることのできる定式的なSCT反応分析法の立案に向けて、新たな分析方法を提示することを目的とする。また、その分析法がその後の発展として、臨床的アセスメントにつながる可能性があるか（臨床的アセスメントへの適用可能性）を検証することとする。

まず、研究1では、SCT反応を可能な限り不足なく分類できるよう、複数の観点から反応を分類する方法を提示する。

研究2では、研究1で取り上げた複数の観点（分類軸）のうち、SCTの反応内容にあたる分類軸を統合した分類項目を作成し、低頻出な反応、つまり特異反応の抽出を行う反応内容分析法の試案を提示する。研究3では、研究1で取り上げた分類項目のうち、反応の形式的側面である構成の観点と、さらに別の形式的側面を分析の観点に加え、特異反応の抽出を行う反応形式分析法の試案を提示する。

それら研究2・3から修正点や疑問点を明確にし、それらを考慮したうえで、改めて研究4では反応内容分析法、研究5では反応形式分析法を実施し、両分析法の特徴について考察を行う。また、今後の臨床的アセスメントへの適用可能性を探るため、精神的健康との関連をそれぞれ調査する。

これら一連の研究は、調査研究や臨床実践に広く使用可能な、かつ共通言語として定式化したSCT反応の分析法の立案を目指し、個々のSCT反応の特徴を浮かび上がらせるための系統的な手法を示すものである。SCTの系統的分析法によって、これまでのSCT解釈で問題となっていた、心理検査らしからぬ使用法の蔓延、被検査者の回答歪曲による誤った所見となる可能性、独断的・恣意的解釈であるという批判を解消できる、ひいては調査研究と臨床実践の成果をつなぎやすくなり、SCTが臨床心理学の発展により一層寄与するものになることが期待されるのである。

## 第2章 反応分類による分析の試み——家族・家庭に関する刺激語を例として——

SCTに限らず、有用な反応分析法となるためには、反応の特徴を可能な限り不足なく組み取り、かつ簡便で明解な方法であることが求められる。先行研究から、SCT反応の分析には、反応分類が適していると考えられるが、分析に反応分類を用いるためには、(1)複数の観点から分類を行うこと、(2)分類の観点は刺激語間に共通とすること、(3)分類項目は体系的に設定することが必要であろう。

本章では、上記の点を考慮したSCTの反応分析法の試案を提示する。まず研究1では、複数の観点(分類軸)から分類項目を設定し、反応の分類を試みる。続いて、研究2では反応内容分析、研究3では反応形式分析の試案を提示する。その際、研究2に関しては、研究1で取り上げる反応内容に関する分類軸を統合し、包括的に反応内容を捉える分析法を試みる。また、研究3に関しては、研究1で取り上げる分類軸の他に、新たに分析側面を加え、複数の観点から形式面の特徴を捉える分析法を試みる。

試案の提示にあたって、本章の研究では<家族・家庭>領域の刺激語を分析の対象とする。「1-3-4 精研式SCTを用いた研究」をみると、SCTは<家族・家庭>領域の刺激語のみを用いた研究が目立つ(e.g.,青野 et al., 1983; 古屋, 1993; 武内, 1986)。それは家族・家庭に関するアセスメントが臨床上重要であるためと考えられる。よって、たとえ試案であったとしても、<家族・家庭>に関する刺激語に、本章で試みる分析法の適用が可能となれば、臨床実践・調査研究ともに共通した一連の手順に則って分析することができ、調査研究間、さらに臨床実践の知見との統合に貢献することができると考えられる。

<家族・家庭>領域を分析対象とするにあたり、依存と自立の葛藤の対象として家族・家庭イメージが最も重視される発達段階と考えられるため、青年期を本研究の対象とする。

### 第1節 研究1：反応分類による出現率の算出<sup>4</sup>

#### 1 目的

SCTには定式化した分析的手続きがなく、検査所見の妥当性を保証しづらい、臨床実践や調査研究それぞれの知見を比較しづらいという問題がある。心理検査としてのSCTには、妥当性と信頼性を兼ねそろえた、少なくともそれらを検証できるような定式化した分析法が必要である。そして、SCTを用いた先行研究から、定式化した分析法には反応分類による方法が適していると考えられる。

研究1では、定式化した反応分析法作成への前段階として、SCT反応の分類を試み、出現率の算出を行う。その際、可能な限り不足なく反応の特徴を捉えられるように分類の観点を複数設けることとする。出現率を算出するのは、各分類項目の出現率に差が生じるかをみるためである。ロールシャッハ・テストの数量分析や鈴木(1997)によるTATは、多くの人が表示一般的傾向との比較によってある個人の特徴を浮かび上がらせようとしている。つまり、

<sup>4</sup> 研究1の内容は、石井 明子 (2013). 文章完成法(SCT). 八尋華那雄 監修, 臨床心理学の実践アセスメント・支援・研究 (pp.111-133) 金子書房. を加筆修正したものである。

ある人の反応が一般的なものならば、多くの人と同じように反応する傾向がある、いい換えれば、その人の個性的なものが反映されているとはいえない。しかし、特異な反応であるならば、多くの人とは異なる反応をする、つまりその人の個性が反映されているといえるのである。鈴木(2012)はTAT反応について、「他の人々のものから多少とも目立っている、際立っているからこそ、特徴的(p.25)」であり、「どこまでもありふれた類型に属するものか、(中略)希少類型に属するものか、そもそも類型化を拒絶するような、全体として特異なものか(p.26)」を問題とする分析法を提唱している。さらに、片口(1974)は、ロールシャッハ法の数量分析にある独創反応(O反応)について「その“固有性(稀有性)”の程度が高ければ高いほど、O反応を与えた被験者にとって、個人的な意味合いを持っているはずである(p.103)」と述べている。これらの視点を受けて、本研究は投射法の分析手法として以下の観点から反応分類を行うこととする。まず、高頻度でみられる一般的な反応と比較することによってわかる特異な反応を「その人の個性が反映されているもの」とみなして取り上げる。次にその反応がどのように特異なのかを一般的な反応と比較検討し、そこからその人の個性的な内的世界を推察する。この分析手法を実現するためには、高頻度でみられる一般的な反応と低頻度でしか出現しない特異な反応を区別できるか否か、出現率に差が生じるか否かが非常に重要になる。

本研究は、反応分類と出現率の算出により、一般的反応と特異反応を区別する分析法の適用可能性を検討する。

## 2 方法

### 分析対象

精研式SCT全60の刺激語のうち、11の刺激語を対象とした。刺激語はPart Iから「家の暮し(3)」、「家の人は私を(5)」、「私の父(9)」、「もし私の母が(17)」、「夫(21)」、「私の兄弟(姉妹)(25)」、Part IIから「家では(1)」、「私の母(6)」、「もし私の父が(12)」、「妻(18)」、「家の人は(26)」であった。

### 参加者

参加者は、石井・鈴木(2010)と同一であり、同一のデータを使用した。石井・鈴木(2010)での参加者は20歳のA大学学部生及びその知人である。実施期間は1994年～1999年であり、集団及び個別で施行した。石井・鈴木(2010)では、その中から20歳の未婚の男女377名のSCTより、無作為に抽出した200名(男性100名、女性100名)のSCTを使用した。

本研究は筆者の共同研究者である鈴木よりデータの提供を受け、筆者が独自に分類を行った。

### 分類軸及び分類項目

分類項目は、時制(いつのことを記述したのか)、対象(何について記述したのか)、評価(対象についてどのように記述したのか)、構成(どのように反応を構成したのか)の4軸

の観点から設定することとした。分類軸を採用する際、まず、すべての反応に共通してみられる観点であることを採用条件とした。また、反応内容の側面と反応形式の側面からそれぞれ分類軸を設定することとした。佐藤ら(1991)や池田ら(1982)などの反応分類を行った先行研究も参考に、各反応を特徴づける観点として、反応内容から時制、対象、評価、反応形式から構成をそれぞれ分類軸とした。各観点から、心理学教員1名、心理学を専攻する大学院生3名で本研究の参加者の反応を分類したところ、時制4項目・対象5項目・評価6項目・構成8項目の下位分類が抽出され、それぞれの分類軸の分類項目に採用した。各分類項目の定義をTable4に示す。

#### 1) 時制

時制はSCTの反応部分がいつのことであるのかについての分類軸とした。分類項目は“過去”，“現在”，“未来”，“時制なし”の4項目であった。

#### 2) 対象

対象は何について記述したのか、つまり内容様式についての分類軸とした。分類項目は“家庭環境”，“家族集団”，“家族成員間”，“家族成員個人”，“その他”の5項目であった。

#### 3) 評価

評価は対象をどのように記述したのかについての分類軸とした。分類項目は“肯定”，“中立”，“否定”，“両価”，“不明”，“評価なし”の6項目であった。

#### 4) 構成

構成は、一刺激語に対する反応がどのような構成になっているのかについての分類軸とした。分類項目は“単一構成”，“補足”，“部分否定”，“転換”，“並列”，“対比”，“展開”，“その他”の8項目であった。

Table4 家族・家庭領域における分類項目の定義  
Definition of categories in a field of family and home

分類軸	分類項目	定義	例
時制	過去	過去の状態や願望の記述	～だった／～してほしかった／～だったら
	現在	現在の状態や現状への願望， 過去からの継続，現在と仮定しての記述	～している／～してきた／～してほしい 「夫」：はいない
	未来	未来への想像やこれから起こりうる出来事， これからの願望・理想の記述	～していきたい／～になりたい 「もし私の父が」：いなくなったら／悲しい
	なし	一般論やそれに対する意見 未記入・連想不能	「家の暮し」：が楽しくないのは嫌だ 「妻」：は家を守らなくてはならない
対象	家庭環境	物理的・経済的状況などの特徴や 家族(きょうだい) 構成についての記述	自営業／快適／貧しい／5人家族 「夫」：になりたい／なれないかも／ほしい 「もし私の父が」：いなくなったら(家族構成)
	家族集団	家族集団内における役割や雰囲気， 価値観など家族集団の特徴の記述	離婚／再婚するなら／夫になったら～／ 「家では」：くつろげる／家事をやる
	家族成員間	ある成員からある成員への，または お互いの関係や思い，類似点や相違点， 比較などの記述	尊敬している／すごい／好き／嫌い／ かわいがる／不安に思う／心配している／ よく似ている／Aと呼ぶ
	家族成員個人	被検者自身やある家族成員の特徴，属性 出来事など成員個人についての記述	いい人／まじめ／やさしい／怖い／厳しい／働 いている／なまけものという 「もし私の母が」：死んだら，悲しい 「夫」：年上がいい？どんな人だろう
	その他	一般論やそれに対する意見， 未記入，その他分類が困難なもの	「家の暮し」：が恋しい 「夫」：はよくわからない／と妻
評価	肯定	ポジティブな評価の記述	よい／好き／満足／快適／裕福／尊敬／ 心配してくれる／～ができる
	中立	何かしらの評価の記述だが，中立なもの 肯定・否定的な判別が困難なもの 肯定・否定を否定したもの	普通／平凡／単純／まあまあ／楽でない／嫌 じゃない／不満はない／何も思わない／変わっ ている
	否定	ネガティブな評価の記述	悪い／貧しい／心配／困る／子ども扱い／ 甘やかす／～(肯定的記述)しすぎる
	両価	同時制かつ同対象に 肯定・否定ともに記述しているもの	満足しているけれど～が少し不満／ 「家の人は私を」：かまひ過ぎなくらい かまってくれる
	不明	「わからない」，あるいは疑問形での記述	わからない／知らない／～だろうか
評価なし	評価自体を行っていない記述 一般論や事実，願望・仮定の記述 未記入	テレビを見ている／Aと呼ぶ 「もし私の母が」：死んだら，悲しい 「夫」：は強くなくてはならない 「私の父」：には長生きしてほしい	
構成	単一構成	反応が単一の構成であるもの	「家の暮し」：には満足している
	補足	内容を補う表現が入っているもの	～だから～／～が原因だ
	部分否定	ある評価を行った後，同一対象の一部に 別の評価を行ったもの	満足しているけれど～が少し不満／ 好きだけど嫌なところもある
	転換	性質や傾向の全く異なる記述が なされているもの	「家の人は私を」：Aと呼ぶ。妹も中3になっ た
	並列	ある対象に同じ評価を繰り返したもの	面白くて優しい／好き。尊敬している
	対比	複数の対象に同一時制，または同一対象に 複数時制で，逆の評価であるもの	兄とは仲が悪いが，弟とは仲がいい／ 昔は嫌だったけれど今は好き
	展開	前の内容を踏まえて，発展した内容や その感想を後に記述したもの	「家の人は私を」：Aと呼ぶ。気に入っている
	その他	上記の分類項目に入らないもの 無反応	反復／並列が難しいもの(無口だが，厳しい)／ 融合(「私の兄弟」：はやさしい兄が1人いる)

### 出現数のカウント方法及び出現率の算出

各分類項目へのカウントは、文章形式を問わず、1つの刺激語への反応を出現数1とした(Table5)。その際、意味を成す最小単位で、仮定文の場合は条件節と主節で、それぞれ区切りカウントした。カウントする反応成分が複数となる場合は、合計が1となるように等分した。時制を例にとると、「家の暮し『は快適だ』」は1成分であり、“現在”に1とした。「家の暮し『は快適だ。昔はあまりそう思わなかった』」は2成分であり、『は快適だ』が“現在”に0.5、『昔はあまりそう思わなかった』が“過去”に0.5とした。3成分ならば各項目に0.3ずつとした。対象、評価、構成についても同様にカウントした。

刺激語別に、全参加者の反応を該当項目へカウントし、項目ごとのカウント数合計と全参加者・男性・女性の出現率を求めた。例えば、ある刺激語で“現在”が全参加者200名で計12.8とすると、出現率は6.4%となる。

このカウント方法を採用したのは、反応の細分化により、内容を網羅的に分類できるため、また、該当する分類項目の比率を考慮することにより、反応の構造を捉えやすくするためである。ただし、このカウント方法は統計処理を行うことができず、各項目の出現率の男女差を統計的に比較検討することはできない。よって本研究では、男女の出現率を記載することとどめることとする。

Table5 家族・家庭領域における各分類のカウント例  
An example of counting of each category in a field of family and home

刺激語	反応例	分類	カウント			
			時制	対象	評価	
家の暮し	は快適だ	現在・環境・肯定・単一	現在：1.0	環境：1.0	肯定：1.0	単一：1.0
もし私の母が	違う人だったら・・・	現在・個人・なし・単一	現在：1.0	個人：1.0	なし：1.0	単一：1.0
夫	になったら， どんな夫になっているだろう	未来・環境・なし・展開/ 未来・個人・不明	未来：1.0	環境：0.5 個人：0.5	不明：0.5 なし：0.5	展開：1.0
私の母	は働いている。 昔は家事もしていたが， 今は家族で分担している	現在・個人・なし・展開/ 過去・集団・なし・対比/ 現在・集団・なし	過去：0.3 現在：0.6	集団：0.6 個人：0.3	なし：0.9	展開：0.5 対比：0.5
もし私の父が	死んだら， 私は悲しむだろう。 ずっと元気でいてほしい	未来・個人・なし・展開/ 未来・個人・なし・展開/ 現在・間・なし	現在：0.3 未来：0.6	間：0.3 個人：0.6	なし：0.9	展開：1.0
家の人は	自分勝手なところもあるが， 個性的で元気ではある	現在・個人・両価・その他/ 現在・個人・中立・その他	現在：1.0	個人：1.0	両価：0.5 中立：0.5	その他：1.0

注) 下線部はカウント対象部分。  
分類・カウントにある集団は“家族集団”，環境は“家庭環境”，間は“家族成員間”，個人は“家族成員個人”，  
なしは“評価なし”，単一は“単一構成”の略である。

## 倫理的配慮

検査データは個人が特定できないよう、研究参加者の氏名を削除し、番号を付与することで連結可能匿名化を行い、秘密保護に十分に配慮した。また、入手した検査データは本研究以外の用途には使用せず、被検査者が不利益を被ることのないよう十分に留意した。

## 3 結果

### 最頻出項目・最低頻出項目の傾向

各刺激語の出現率を算出し、最も出現率の高い項目と、0.0%を除いた最も低い項目を調べた。なお、0.0%の項目も、実際の臨床群や他の集団では出現する可能性があるため、分析においては重要であるが、本研究では、各分類項目の出現率に差があり、高頻出な反応、低頻出な反応がみられるのかを確認することが目的であること、また0.0%の項目が多数となり、記述が煩雑になること、出現していない項目については議論が困難であることから、出現率のある項目のみ記述することとした。

#### 1) 時制 (Table6)

11 刺激語中、最も出現率が高かった分類項目は、全体では「夫(I-21)」と「妻(II-18)」を除く9つの刺激語で“現在”であった。男性では「夫(I-21)」，女性は「妻(II-18)」をそれぞれ除く10の刺激語で“現在”が最も出現率が高かった。“現在”以外が最頻出となった刺激語では、全体の「夫(I-21)」・「妻(II-18)」共に“なし”が最も高かった。また、男性の「夫(I-21)」，女性の「妻(II-18)」も共に“なし”が最も高かった。

最も出現率が低かったのは、全体では5つの刺激語で“なし”，「家の暮し(I-3)」，「夫(I-21)」，「家では(II-1)」の3つで“未来”，「家の人(II-26)」で“過去”，「妻(II-18)」で“現在”，「家の人(II-1)」で“未来”・“なし”が同率で最低頻出項目であった。男性は7つの刺激語で“なし”，「家の暮し(I-3)」，「家では(II-1)」，「妻(II-18)」の3つで“未来”，「夫(I-21)」で“現在”が最低頻出項目であった。女性は5つの刺激語で“未来”，「もし私の母が(I-17)」，「夫(I-21)」，「私の母(II-6)」，「もし私の父が(II-12)」の4つで“なし”，「家の暮し(I-3)」で“過去”，「妻(II-18)」で“現在”が該当した。

Table6 家族・家庭領域における時制の出現率  
Appearance rate of "tense" in a field of family and home

	過去	現在	未来	なし
I-3 家の暮し	3.5 6.2 : 0.8	<u>87.6</u> <u>85.8 : 89.3</u>	2.7 1.5 : 3.8	6.3 6.5 : 6.0
I-5 家の人を私を	3.8 5.3 : 2.3	<u>95.4</u> <u>93.9 : 96.8</u>	0.4 0.0 : 0.8	0.4 0.8 : 0.0
I-9 私の父	5.4 4.5 : 6.4	<u>92.2</u> <u>91.8 : 92.5</u>	1.4 2.3 : 0.5	1.1 1.5 : 0.6
I-17 もし私の母が	8.6 7.3 : 9.8	<u>45.3</u> <u>45.7 : 44.8</u>	39.5 40.6 : 38.4	6.7 6.3 : 7.0
I-21 夫	0.0 0.0 : 0.0	36.7 14.3 : <u>59.0</u>	24.3 27.1 : 21.5	<u>39.0</u> <u>58.5 : 19.5</u>
I-25 私の兄弟（姉妹）	3.5 2.6 : 4.5	<u>93.9</u> <u>93.7 : 94.0</u>	2.1 2.8 : 1.5	0.5 1.0 : 0.0
II-1 家では	3.3 4.7 : 2.0	<u>94.3</u> <u>90.8 : 97.7</u>	1.2 2.0 : 0.3	1.3 2.5 : 0.0
II-6 私の母	4.2 7.0 : 1.5	<u>93.2</u> <u>90.7 : 95.8</u>	1.8 1.8 : 1.8	0.8 0.6 : 1.0
II-12 もし私の父が	6.4 6.0 : 6.7	<u>65.7</u> <u>64.0 : 67.3</u>	24.3 26.0 : 22.7	3.6 4.0 : 3.3
II-18 妻	0.0 0.0 : 0.0	26.4 <u>39.9 : 12.8</u>	27.1 24.6 : 29.7	<u>46.5</u> <u>35.5 : 57.5</u>
II-26 家の人を	0.7 1.3 : 0.0	<u>95.2</u> <u>96.3 : 94.0</u>	1.7 1.3 : 2.0	2.5 1.0 : 4.0
全体	3.6 4.1 : 3.1	<u>75.1</u> <u>73.4 : 76.7</u>	11.5 11.8 : 11.2	9.9 10.8 : 9.0

注) 上段は全体(%), 下段は男性(%):女性(%)である。  
下線は各刺激語の出現率第1位の最頻出項目である。

## 2) 対象 (Table7)

最も出現率が高かったのは、全体では6つの刺激語で“家族成員個人”であった。他に、「家の暮し(I-3)」で“家庭環境”，「家の人を私を(I-5)」，「私の兄弟（姉妹）(I-25)」の2つで“家族成員間”，「夫(I-21)」，「妻(II-18)」の2つで“その他”が最頻出項目となった。男性は全体とすべて同様の結果であったが、女性は「夫(I-21)」のみ全体と異なり，“家族成員間”が最頻出項目となった。

最も低かったのは、全体では、「夫(I-21)」，「私の兄弟（姉妹）(I-25)」，「私の母(II-6)」，「妻(II-18)」の4つで“家族集団”，「家の人を私を(I-5)」，「家では(II-1)」，「もし私の父が(II-12)」，「家の人を(II-26)」の4つで“その他”，「私の父(I-9)」，「もし私の母が(I-17)」の2つで“家庭環境”，「家の暮し(I-3)」で“家族成員間”であった。男性

では、5つの刺激語で“その他”，「夫(I-21)」，「私の兄弟（姉妹）(I-25)」，「妻(II-18)」の3つで“家族集団”，「私の父(I-9)」，「もし私の父が(II-12)」の2つで“家庭環境”，「家の暮し(I-3)」で“家族成員間”が該当した。女性では、5つの刺激語で“家族集団”，「もし私の母が(I-17)」，「家では(II-1)」，「家の人(II-26)」の3つで“その他”，「家の暮し(I-3)」，「妻(II-18)」の2つで“家族成員間”，「私の父(I-9)」で“家庭環境”が該当した。

Table7 家族・家庭領域における対象の出現率  
Appearance rate of “object” in a field of family and home

	家庭環境	家族集団	家族成員間	成員個人	その他
I-3 家の暮し	<u>61.8</u> 64.0 : 59.6	16.1 12.7 : 19.2	4.2 3.8 : 4.7	9.3 10.0 : 8.6	8.7 9.5 : 7.9
I-5 家の人(私)	4.1 3.8 : 4.3	1.1 0.0 : 2.2	<u>67.8</u> 75.5 : 60.2	26.6 19.8 : 33.3	0.4 0.8 : 0.0
I-9 私の父	0.7 1.0 : 0.3	1.0 1.3 : 0.8	42.6 38.5 : 46.8	<u>54.2</u> 57.7 : 50.6	1.5 1.5 : 1.4
I-17 もし私の母が	0.6 0.0 : 1.3	5.7 3.8 : 7.7	32.3 31.6 : 33.0	<u>59.7</u> 62.2 : 57.3	1.7 2.5 : 0.8
I-21 夫	20.5 23.7 : 17.3	5.2 2.2 : 8.3	16.1 4.8 : <u>27.4</u>	13.1 4.8 : 21.4	<u>45.0</u> 64.5 : 25.5
I-25 私の兄弟（姉妹）	23.1 23.6 : 22.6	0.5 0.7 : 0.3	<u>46.1</u> 41.5 : 50.7	28.5 33.1 : 23.9	1.9 1.2 : 2.5
II-1 家では	5.9 7.8 : 4.0	6.7 6.2 : 7.1	9.0 7.8 : 10.1	<u>74.8</u> 73.3 : 76.3	3.8 5.0 : 2.5
II-6 私の母	0.0 0.0 : 0.0	1.5 1.8 : 1.1	37.5 32.2 : 42.7	<u>59.4</u> 64.7 : 54.2	1.7 1.3 : 2.0
II-12 もし私の父が	4.1 2.2 : 6.0	3.9 4.7 : 3.2	25.4 20.6 : 30.2	<u>63.2</u> 68.9 : 57.4	3.5 3.7 : 3.3
II-18 妻	19.1 18.1 : 20.0	3.3 1.0 : 5.6	12.8 21.6 : 4.0	10.6 10.5 : 10.7	<u>54.3</u> 48.8 : 59.7
II-26 家の人(私)	4.2 4.8 : 3.5	8.3 8.3 : 8.4	40.6 40.5 : 40.8	<u>45.3</u> 45.2 : 45.3	1.6 1.3 : 2.0
全体	13.1 13.6 : 12.6	4.8 3.9 : 5.8	30.4 28.9 : 31.9	<u>40.4</u> 40.9 : 39.9	11.3 12.7 : 9.8

注) 上段は全体(%)，下段は男性(%)：女性(%)である。  
下線は各刺激語の出現率第1位の最頻出項目である。

### 3) 評価 (Table8)

最も出現率が高かったのは、全体では、6つの刺激語で“評価なし”，「家の暮し(I-3)」，「私の父(I-9)」，「私の母(II-6)」，「家の人(II-26)」の4つで“肯定”，「家の人(私)

を(I-5)」で“否定”であった。男性では、「家の人は私を(I-5)」で“肯定”，「家の人は(II-26)」で“評価なし”が最頻出項目となった以外は，全体と同様であった。女性は「私の父(I-9)」で“評価なし”が最頻出項目となった以外は，全体と同様であった。

最も低かったのは，全体では，「家の人は私を(I-5)」，「もし私の母が(I-17)」，「夫(I-21)」，「もし私の父が(II-12)」，「家の人は(II-26)」の5つの刺激語で“両価”，「家の暮らし(I-3)」，「私の父(I-9)」，「私の兄弟(姉妹)(I-25)」，「家では(II-1)」，「私の母(II-6)」の5つで“不明”，「妻(II-18)」で“中立”であった。男性では，「家では(II-1)」で“両価”・“不明”が同率で最低頻出項目であった以外は全体と同様であった。女性では，5つの刺激語で“不明”，「家の人は私を(I-5)」，「家では(II-1)」，「家の人は(II-26)」の3つで“両価”，「もし私の母が(I-17)」で“肯定”が最低頻出項目であった。さらに「夫(I-21)」で“中立”・“両価”，「妻(II-18)」で“肯定”・“中立”が同率で最低頻出項目であった。

Table8 家族・家庭領域における評価の出現率  
Appearance rate of "evaluation" in a field of family and home

	肯定	中立	否定	両価	不明	評価なし
I-3 家の暮し	<u>34.0</u> 26.7 : 41.4	21.8 22.3 : 21.4	15.7 20.3 : 11.0	4.7 7.0 : 2.3	2.1 2.5 : 1.7	21.7 21.2 : 22.2
I-5 家の人は私を	29.2 <u>29.3</u> : 29.0	9.3 10.7 : 7.9	<u>33.6</u> 27.9 : <u>39.3</u>	5.3 4.5 : 6.0	10.7 14.6 : 6.8	12.0 13.1 : 10.9
I-9 私の父	<u>29.8</u> <u>33.5</u> : 26.2	10.5 6.5 : 14.4	16.8 17.3 : 16.4	11.6 13.9 : 9.4	3.5 3.5 : 3.5	27.8 25.4 : <u>30.2</u>
I-17 もし私の母が	6.7 4.8 : 8.6	8.6 5.0 : 12.2	6.0 2.1 : 10.0	0.6 1.2 : 0.0	7.9 5.9 : 9.8	<u>70.3</u> <u>81.1</u> : <u>59.5</u>
I-21 夫	2.1 2.0 : 2.2	1.0 1.5 : 0.5	6.8 7.7 : 6.0	0.8 1.0 : 0.5	15.1 15.3 : 14.8	<u>74.3</u> <u>72.5</u> : <u>76.0</u>
I-25 私の兄弟（姉妹）	25.4 27.0 : 23.8	14.0 14.3 : 13.8	9.5 7.9 : 11.1	7.2 5.3 : 9.2	3.7 3.4 : 4.0	<u>40.1</u> <u>42.1</u> : <u>38.2</u>
II-1 家では	12.7 15.1 : 10.2	10.0 10.7 : 9.4	10.1 4.1 : 16.0	0.8 0.5 : 1.5	0.3 0.5 : 0.0	<u>66.3</u> <u>69.2</u> : <u>63.4</u>
II-6 私の母	<u>30.5</u> <u>27.3</u> : <u>33.9</u>	13.1 12.2 : 14.1	18.5 22.3 : 14.7	14.3 15.0 : 13.5	2.7 3.4 : 1.9	21.0 19.9 : 22.1
II-12 もし私の父が	8.2 8.2 : 8.2	15.7 16.7 : 14.6	6.0 6.2 : 5.5	0.3 0.5 : 0.0	6.9 8.7 : 5.2	<u>63.0</u> <u>59.4</u> : <u>66.5</u>
II-18 妻	5.7 5.5 : 5.8	3.7 1.5 : 5.8	10.1 5.8 : 14.3	0.0 0.0 : 0.0	12.1 10.2 : 14.0	<u>68.5</u> <u>77.0</u> : <u>60.0</u>
II-26 家の人は	<u>37.4</u> 30.9 : <u>44.0</u>	8.7 6.4 : 11.0	12.6 16.0 : 9.2	2.5 3.0 : 2.0	8.9 11.6 : 6.2	29.9 <u>32.1</u> : 27.6
全体	20.2 <u>19.1</u> : 21.2	10.6 9.8 : 11.4	13.2 12.5 : 13.9	4.3 4.7 : 4.0	6.7 7.2 : 6.2	<u>45.0</u> <u>46.6</u> : <u>43.4</u>

注) 上段は全体(%), 下段は男性(%):女性(%)である。  
下線は各刺激語の出現率第1位の最頻出項目である。

#### 4) 構成 (Table9)

最も出現率が高かったのは、全体では、9つの刺激語で“単一構成”，「私の父(I-9)」，「私の兄弟（姉妹）(I-25)」の2つで“展開”であった。男性では、11刺激語すべて“単一構成”が最頻出項目であった。女性は「家の人は私を(I-5)」，「私の母(II-6)」の2つの刺激語で“展開”が最頻出項目であった以外は、全体と同様であった。

最も低かったのは、全体では、「家の人は私を(I-5)」，「私の父(I-9)」，「私の兄弟（姉妹）(I-25)」，「家では(II-1)」，「もし私の父が(II-12)」の5つの刺激語で“部分否定”，「家の暮し(I-3)」，「もし私の母が(I-17)」，「私の母(II-6)」，「妻(II-18)」，「家の人は(II-26)」の5つで“対比”，「夫(I-21)」で“補足”であった。男性では、6つの刺激語で“部分否定”，「家の人は私を(I-5)」，「夫(I-21)」，「私の母(II-6)」，「妻(II-18)」

の4つで“対比”，「もし私の母が(I-17)」で“補足”が該当した。女性では，「家の人は私を(I-5)」，「私の父(I-9)」，「私の兄弟(姉妹)(I-25)」の3つの刺激語で“部分否定”，「家の暮し(I-3)」，「もし私の母が(I-17)」，「家では(II-1)」の3つで“対比”，「私の母(II-6)」，「もし私の父が(II-12)」の2つで“転換”，「妻(II-18)」で“補足”，さらに「夫(I-21)」で“補足”・“対比”，「家の人は(II-26)」で“部分否定”・“対比”・“その他”が同率で最低頻出項目であった。

Table9 家族・家庭領域における構成の出現率  
Appearance rate of “construction” in a field of family and home

	単一構成	補足	部分否定	転換	並列	対比	展開	その他
I-3 家の暮し	<u>32.5</u> 39.0 : 26.0	4.9 6.0 : 3.8	3.3 2.0 : 4.5	19.5 18.5 : 20.5	8.3 6.5 : 10.0	2.4 3.5 : 1.3	21.6 20.5 : 22.7	7.6 4.0 : 11.2
I-5 家の人は私を	<u>38.5</u> 49.0 : 28.0	7.5 5.0 : 10.1	0.3 0.0 : 0.5	5.4 6.7 : 4.2	5.4 3.0 : 7.7	1.5 1.3 : 1.7	35.1 30.7 : <u>39.5</u>	6.3 4.3 : 8.3
I-9 私の父	26.8 <u>32.5</u> : 21.1	3.1 2.4 : 3.8	1.0 0.3 : 1.8	11.1 8.6 : 13.7	13.2 14.3 : 12.1	2.2 1.8 : 2.5	<u>29.6</u> 23.7 : <u>35.6</u>	12.9 16.5 : 9.4
I-17 もし私の母が	<u>66.5</u> 74.0 : 59.0	2.9 1.5 : 4.3	0.0 0.0 : 0.0	4.2 3.0 : 5.3	5.1 2.8 : 7.5	0.3 0.0 : 0.5	19.1 16.2 : 21.9	2.0 2.5 : 1.5
I-21 夫	<u>56.5</u> 66.0 : 47.0	0.8 0.0 : 1.5	0.0 0.0 : 0.0	8.1 7.5 : 8.7	9.1 3.8 : 14.5	1.0 0.5 : 1.5	21.8 20.7 : 22.9	2.7 1.5 : 4.0
I-25 私の兄弟(姉妹)	28.1 <u>36.2</u> : 20.0	4.0 4.7 : 3.3	0.3 0.3 : 0.3	18.8 20.1 : 17.5	4.7 3.9 : 5.5	5.0 3.4 : 6.5	<u>31.5</u> 25.8 : <u>37.2</u>	7.7 5.7 : 9.7
II-1 家では	<u>42.4</u> 49.5 : 35.2	4.4 2.3 : 6.6	1.0 0.5 : 1.5	5.1 5.9 : 4.3	13.5 11.8 : 15.1	3.0 5.5 : 0.5	28.4 22.8 : 34.2	2.2 1.8 : 2.6
II-6 私の母	<u>34.5</u> 37.0 : 32.0	4.3 2.5 : 6.0	0.9 1.8 : 0.0	5.5 7.1 : 3.8	10.0 5.5 : 14.4	0.5 1.0 : 0.0	31.4 30.2 : <u>32.6</u>	13.1 15.0 : 11.2
II-12 もし私の父が	<u>71.5</u> 75.0 : 68.0	1.9 1.5 : 2.3	0.5 1.0 : 0.0	1.4 2.0 : 0.8	5.0 3.0 : 7.0	0.0 0.0 : 0.0	16.3 16.0 : 16.5	3.4 1.5 : 5.3
II-18 妻	<u>59.0</u> 63.0 : 55.0	3.3 3.5 : 3.0	0.0 0.0 : 0.0	5.0 4.0 : 6.0	7.3 11.0 : 3.6	0.3 0.5 : 0.0	21.9 14.5 : 29.3	3.3 3.5 : 3.2
II-26 家の人は	<u>56.5</u> 58.0 : 55.0	3.4 3.0 : 3.8	1.0 1.0 : 1.0	3.7 3.3 : 4.0	7.9 6.5 : 9.3	0.5 0.0 : 1.0	23.2 21.7 : 24.8	3.8 6.5 : 1.0
全体	<u>46.6</u> 52.7 : 40.6	3.7 2.9 : 4.4	0.8 0.6 : 0.9	8.0 7.9 : 8.1	8.1 6.6 : 9.7	1.5 1.6 : 1.4	25.4 22.1 : 28.8	5.9 5.7 : 6.1

注) 上段は全体(%), 下段は男性(%):女性(%)である。

下線は各刺激語の出現率第1位の最頻出項目である。

#### 4 考察

本研究では，反応分類によって一般的な反応と特異な反応を区別する，つまり分類項目の出現率に違いがみられるかを検証することを目的とした。その際，反応の特徴を不足なく汲

み取るため、時制・対象・評価・構成の複数の観点（分類軸）からそれぞれ反応を分類し、出現率を算出した。

各観点から反応を分類したところ、手続きについては、対象とした 200 名すべての反応を分類することができた。また、たとえ複雑な文章構成であっても、成分数によって等分してカウントすることにより、その反応をもれなくカウントすることができた。一刺激語に対して一つの分類項目にのみカウントするといった他のカウント方法も考えられるが、本研究で採用した方法によって、それぞれの観点から反応を分類、及び出現率を算出することが可能であり、SCT の分析法として採用できると考えられる。また、現れた成分すべてを等しく分類することから、評定者による主観的偏りが生じない方法といえる。

出現率については、刺激語によって現れ方に違いがみられ、ある一つの分類項目が突出して高頻出である刺激語もあれば、同じような出現率の分類項目が複数ある刺激語もあった。例えば、時制をみると、「家の暮し(I-3)」は圧倒的に“現在”が高頻出、つまり一般的反応といえる。しかし、「夫(I-21)」の全体をみると、“現在”・“未来”・“なし”に反応が分散し、3項目が同じような出現率であった。前者の場合は、多くの被検査者が共通に同じような反応を示しており、その大勢に抗って別の反応を表出するというのは、その人の強い個性を表していると考えられる。そのような刺激語は、一般的反応と特異反応の弁別力が高いといえるであろう。後者の場合は、どのように反応するのか被検査者の自由度が高く、どの分類項目に当てはまる反応を表出したかは被検査者の個性である。しかし、その個性には弱いものも含まれていると考えられる。そういった刺激語は弁別力が弱いといえる。ただし、“家族成員間”と“家族成員個人”は同じような出現率であるが、それら以外の項目の出現率が極端に低い「私の父(I-9)」の対象のような場合、やはり出現率の極端に低い項目にあてはまる反応は強い個性を表していると考えられる。つまり、それぞれの分類項目の出現率は、その被検査者の個性の程度を表しており、出現率が低い項目にあてはまる反応ほど、一般的反応からかけ離れた、つまり個性が強く反映されていると解釈できるのではないかと考えられる。

各刺激語の出現率の現れ方から、特異反応を抽出する方法は、出現率の高い項目を基準とするのではなく、出現率の低い項目に焦点を当てる方法がよいと考えられる。つまり、高頻出項目に当てはまる反応か否かではなく、低頻出項目に当てはまったかで、被検査者の個性が反映された反応を見出すのである。そうすれば、先に挙げた刺激語による出現率の現れ方の違いを考慮する必要がなくなると考えられる。さらに、低頻出項目に焦点を当てるのには、もう一つ理由がある。例えば、女性の「妻(II-18)」の評価は、最高頻出項目が“評価なし”で 60.0%である。出現率の高い項目を基準として、“評価なし”に当てはまる反応以外を特異反応と定義すると、40.0%の被検査者が特異反応を表出したこととなり、特異というには多すぎる被検査者が特異反応を表出するということになってしまう。そこで、分析においては、まずは全体に対する特異項目の割合を設定し、それに当てはまる項目に分類される反応を特異反応とするのがよいと考えられる。

## 第2節 研究2：反応内容分析<sup>5</sup>

### 1 目的

研究1では、SCTによる反応を不足なく分類できるよう、複数の観点から反応を分類する方法を提示した。その結果、個々の反応は4つの観点から分類することができた。さらに、分類項目の出現率を算出した結果、出現率の低い項目に焦点を当てた分析法が適当であることを示した。

一方で、SCT反応はこれらの分類軸のかけ合わせによって構成されており、複数の観点を独立に扱うのではなく、その組み合わせから反応の特徴を捉えることが適切と考えられる。また、研究1は、反応内容や反応形式の区別をせずに分類軸を設定しているため、時制・対象・評価が反応内容、構成が反応形式にあたり、整理がなされていない。この点も、反応内容と反応形式は質が異なるため、それぞれ別の分析として明確に分析手順を示すべきである。

そこで研究2は反応内容分析法として、研究1で扱った分類軸のうち、反応内容に関する時制・対象・評価の3軸を組み合わせた項目によりSCT反応の特徴を捉える分析法を提示する。構成を除くのは、構成が一刺激語への反応内容が単一なのか、複数あるとすれば展開しているのか、対比しているのかといった、一反応全体の成り立ちに関する軸であり、反応内容そのものに着目している3軸と異なるためである。この分析法は、3軸の分類項目を組み合わせた項目の出現率からどのような反応が特異であるのかを明確化するものである。SCTはその人のパーソナリティをトータルにアセスメントするものであり、すべての反応がその人らしさを表しており、解釈の対象である。本研究はその中でも、その人を特に特徴づける反応をその他大勢の他者との比較によって浮かび上がらせるため、出現率を算出し、その出現率の低い反応を同定するのである。その分析により、ある被検査者群に共通した特徴の把握や集団内でのある特徴を有する者の選別、特異反応を表出する個別事例の解釈が可能になると考えられる。本研究では、反応内容をより包括的に分析する方法の試案を提示し、より精緻化した分析法となるための提起を示すことを目的とする。

なお、研究1のデータはデータ数が豊富であるが、実施時期が古いこと、筆者の共同研究者により収集されたもので、研究1の目的に影響はないものの、各データの実施方法や収集方法を完全に把握しきれていない惧れがあったため、研究2以降は筆者により新たに収集されたデータを用いることとした。

### 2 方法

#### 分析対象

精研式SCT全60の刺激語のうち、研究1と同じ11の刺激語を対象とした。

#### 参加者

---

<sup>5</sup> 研究2の内容は、石井 明子 (2016a). SCTの反応内容分析法の試み——時制・対象・評価に着目して—— ロールシャッハ法研究, 20, 42-49. を加筆修正したものである。

参加者は、18～19歳の未婚の大学生52名（男性14名(平均年齢=18.6,  $SD=0.51$ ), 女性38名(平均年齢=18.6,  $SD=0.50$ ), 全体(平均年齢18.6歳,  $SD=.50$ ))とした。学部授業内で参加を募り、後日個別に実施した。

## 実施方法

実施にあたって参加者に検査主旨を説明し、書面にて同意を得た。各参加者は面接室を模した個室で個別にSCT一式の記入を行った。その後、検査者が家族構成・成員の属性(年齢・参加者との続柄・職業)、成員がどのような人であるか、半構造化面接にて聴取した。実施期間は2010年3月～2012年12月であった。

## 分類軸及び分類項目

分類項目は、研究1の分類軸及び分類項目のうち、SCT反応の内容にあたる時制4項目・対象5項目・評価6項目の組み合わせにより、計120項目となった。

## 倫理的配慮

実施にあたって参加者に口頭および書面にて研究目的と意義、調査方法、任意協力、資料の取り扱いについて説明し、自由意志での参加と、匿名性の保持について保証し、書面にて同意を得た参加者のみに実施した。

得られたデータは、参加者の秘密保護に十分配慮し、参加者が特定されないことがないように、氏名を削除し、それぞれ番号を付与することで連結可能匿名化を行った。

## 出現数のカウント方法

研究1に準じ、1つの刺激語につき、文章形式を問わず、出現数を1とした(Table10)。その際、意味を成す最小単位で、仮定文の場合は条件節と主節で、それぞれ区切りカウントした。カウントする反応成分が複数となる場合は、合計が1となるように等分した。たとえば、「家の暮し『は快適だ』」は1成分であり、“現在-家庭環境-肯定”に1とした。「夫『になったら、どんな夫になっているだろう』」は2成分であり、『になったら』が“未来-家庭環境-なし”に0.5、『どんな夫になっているだろう』が“未来-成員個人-不明”に0.5とした。3成分ならば各項目に0.3ずつとした。

研究1同様、出現内容項目のカウント方法は統計処理を行うことができないため、本研究も男女の違いについて統計的な検討は行わないこととする。

Table10 家族・家庭領域における内容的側面のカウント例  
An example of counting of content aspects in a field of family and home

刺激語	反応例	該当項目	カウント
家の暮し	は快適だ	現在・家庭環境・肯定	1.0
もし私の母が	<u>違う人だったら</u> ・・・	現在・個人・なし	1.0
夫	になったら、 <u>どんな夫になっているの</u> <u>だろう</u>	未来・家庭環境・なし/ 未来・成員個人・不明	0.5/0.5
私の母	は働いている。 <u>昔は家事もしていたが、</u> <u>今は家族で分担している</u>	現在・成員個人・なし/ 過去・家族集団・なし/ 現在・家族集団・なし	0.3/0.3/0.3
もし私の父が	<u>死んだら、私は悲しむだろう。</u> <u>ずっと元気でいてほしい</u>	未来・成員個人・なし/ 未来・成員個人・なし/ 現在・成員間・なし	0.3/0.3/0.3
家の人は	<u>自分勝手なところもあるが、</u> <u>個性的で元気ではある</u>	現在・成員個人・両価/ 現在・成員個人・中立/	0.5/0.5

注) 下線部はカウント対象部分を表す。

### 特異内容項目の抽出

刺激語別に算出した各項目の出現率を上位から加算し、累計パーセントが90%を越えた時点で加算されなかった項目すべてを特異内容項目とし、それに当てはまる反応を特異反応とした。特異内容項目及び特異反応とは、一般的な反応に対して、出現率の低い反応である。出現率の高い反応は多くの人が出しやす反応であり、そのように反応するということは大勢の人と同じ振舞いをするを表す。一方、出現率の低い反応は、表しやす反応が別にあるにも関わらず、それに抗って出現した反応であり、その人独特の振舞いを意味している。そのような出現率の低い、つまり特異な反応こそ、その人の個性、その人らしさを表しているといえる。特異反応の出現率の低さの基準を累計10%未満としたのは操作的定義ではあるが、パーソナリティ障害の有病率を参考にした。パーソナリティ障害はパーソナリティの偏りによる障害であり、パーソナリティの偏りとはいい換えれば個性のことである。個性的なパーソナリティの割合は、個性的な反応の割合の基準の一つになると考えられる。最も有病率の高い強迫性パーソナリティ障害が7.9%である(American Psychiatric association, 2013)こと、しかし診断ツールではなくパーソナリティ検査として、より基準を穏やかにすべきであることから、本研究では特異反応の出現を10%未満と設定した。

## 3 結果

### (1) 出現内容項目の傾向

反応分類の結果、1刺激語あたり全120項目中、全体で13~23項目(平均18.6項目)に反応が出現した。出現項目数が最多(23項目)となったのは「私の父(I-9)」, 最少(13項目)は「もし私の母が(I-17)」であった。男女別では1刺激語あたり、男性で8~16項目(平均10.6項目), 女性で12~20項目(平均16.3項目)が該当した。男性での最多(16項目)は「私の父(I-9)」, 女性での最多(20項目)は「私の兄弟(姉妹)(I-25)」であった。また、男性の最少(8項

目)は「家の人は私を(I-5)」,「もし私の父が(II-12)」の2つの刺激語,女性の最少(12項目)は「もし私の母が(I-17)」であった。

次に項目別にみると,11の刺激語を通して,全120項目のうち57項目(47.5%)に反応が出現し,1項目につき0~11の刺激語(平均1.6語)で出現が認められた。最多出現内容項目(11刺激語)は“現在-家族成員間-評価なし”と“現在-家族成員個人-評価なし”の2項目であった。男女別にみると,男性で37項目(30.8%),女性で54項目(45.0%)が11の刺激語のいずれかで出現し,1項目につき,男性は0~10の刺激語(平均1.0語),女性は0~11の刺激語(平均1.5語)で出現が認められた。最多出現項目は男女共に“現在-家族成員個人-評価なし”(男性:10語,女性:11語)であった。

## (2) 特異内容項目の傾向

本研究も研究1と同様,0.0%も特異内容項目となるが,0.0%の項目が非常に多く,結果の記述が煩雑になること,出現していない項目について議論することが難しいこと,さらに今後の展開として特異内容項目に解釈仮説を設定する際は0.0%の項目ではなく,低頻出だが出現率のある項目に設定するであろうことから,本研究は出現率のある特異内容項目の傾向を示し,そのうえで今後の提起を考えることとする。

刺激語別に特異内容項目の出現傾向を調べたところ,1刺激語あたり2~13項目(平均7.7項目)が特異内容項目と認められた。特異内容項目数が最多(13項目)となったのは「私の兄弟(姉妹)(I-25)」であり,最少(2項目)は「家の人は私を(I-25)」であった。男女別では1刺激語あたり,男性で0~4項目(平均1.2項目),女性で3~10項目(平均6.3項目)が該当した。男性での最多(4項目)は「私の父(I-9)」,女性での最多(10項目)は「私の兄弟(姉妹)(I-25)」であった。一方,男性は「夫(I-21)」,「私の母(II-6)」,「もし私の父が(II-12)」,「家の人は(II-26)」で特異内容項目が認められず,女性の最少3項目は「夫(I-21)」,「家の人は(II-26)」であった。

次に項目別に出現傾向を調べた。全120項目中46項目(38.3%)が11の刺激語のいずれかで特異内容項目と認められ,1項目につき1~6つの刺激語(平均1.8語)で該当した。11の刺激語を通して,“現在-家族集団-評価なし”(例えば,「家の暮し『は,父で成り立っている』」)が最多(6語)の特異内容項目であった。男女別では,男性で12項目(10.0%),女性で41項目(34.2%)が11刺激語のいずれかで特異内容項目と認められ,1項目につき,男性は1~2つの刺激語(平均1.2語),女性は1~6つの刺激語(平均1.7語)で該当した。男性は“未来-家庭環境-評価なし”(例えば,「家の暮し『はいいが,いつか一人暮らしがしたい』(該当箇所下線部)」)が最多(2語),女性は“現在-家族集団-評価なし”(例えば,「私の母『が主に家事をしている』」)が最多(6語)の特異内容項目となった。

## (3) 各参加者の特異反応出現の様態

本分析は反応成分の出現率によって特異反応を特定したが,実際に特異反応を表出したとする人数が多すぎるとは,“個性的・特徴的な人物”ということとはできない。また,11の刺激

語を通して、どれほど特異反応を表出するものなのかを知ることは、その人が“個性的・特徴的な人物”であるのかを判定する材料となりうる。そこで、各参加者の特異反応の有無を刺激語別に調べた(Table11)。なお、特異反応は男女別に抽出し、Table11は、各参加者の特異反応を表出した刺激語を○で表した。なお、ここでも、特異反応を表出した人数だけを取り上げると、対象者数が少なくなり、統計処理は不適と考えられるため、統計処理は行わないこととした。

Table11 刺激語別にみた各参加者の特異反応の有無  
Specific responses for individual subjects

	Sub	I-3	I-5	I-9	I-17	I-21	I-25	II-1	II-6	II-12	II-18	II-26	特異総数
男性	1				○			○					2
	2				○								1
	4			○							○		2
	9		○										1
	11	○	○	○			○				○		5
	14			○			○						2
女性	15	○		○	○			○					4
	16					○	○			○			3
	17	○	○				○		○			○	5
	18						○						1
	20									○			1
	22	○	○	○			○		○				5
	23			○							○	○	3
	24	○	○	○			○		○				5
	26	○						○					2
	28				○								1
	29						○		○	○			3
	31					○							1
	32							○	○				2
	33			○									1
	34							○					1
	35			○									1
	36	○	○			○	○		○	○			6
	37								○				1
	38									○			1
	39							○	○	○		○	4
	40	○							○				2
	41				○								1
	43			○								○	2
	44						○			○			2
	45							○					1
	48										○		1
49	○					○						2	
50										○		1	
51		○							○			2	
52	○	○	○	○			○					5	
計		10(1)	8(2)	11(3)	6(2)	4(0)	11(2)	7(1)	9(0)	8(0)	6(2)	3(0)	

注) 括弧内は男性人数である。  
特異反応数0の参加者は記載していない。

刺激語別にみると、男性は特異内容項目が認められなかった4つの刺激語(先述)を除いて、1刺激語あたり1~3人(平均1.9人)、女性は、1刺激語あたり3~9人(平均6.4人)に認められた。最も特異反応を表出した人数が多かった刺激語は、男性で「私の父(I-9)」(3人、

21.4%), 女性で「家の暮し(I-3)」, 「私の兄弟(姉妹)(I-25)」, 「私の母(II-6)」の3つの刺激語(各9人, 23.7%)であった。最も表出した人数が少なかったのは、男性は先述の4つの刺激語(0人), 女性は「家の人(II-26)」(3人, 7.9%)であった。

また、参加者別にみると、男性では6人(42.9%), 女性では30人(78.9%)に11の刺激語のいずれかで特異反応がみられた。特異反応がみられた刺激語数(以下、特異反応総数)は男性で1人あたり0~5つの刺激語(平均0.9語), 女性で1人あたり0~6つの刺激語(平均1.8語)であった。特異反応を表出した者に限定すると、男性は平均2.2, 女性は2.3の刺激語で特異反応がみられた。

#### 4 考察

本研究では、特異な反応内容を捉える分析法として、時制・対象・評価を組み合わせた120項目に反応を分類したのち、それぞれの出現率を算出し、相対的に値の小さいものを特異内容項目、それにあてはまる反応を特異反応と定義した。ここでは、特異内容項目や各参加者の特異反応出現の様態について、考察を行う。男女別に各刺激語の特徴をTable12にまとめた。なお、本研究では男女の異同について統計処理を行うことができなかったため、以下の考察による男女や刺激語間の違いはすべて測定値そのものや平均値そのものの比較によるものである。「差がある可能性, 差がない可能性」として以下は論じ、それぞれの異同が何を表す可能性があるのかを示すこととする。

Table12 反応内容分析から見た家族・家庭領域の各刺激語の特徴  
 Characteristics of each stimulus word on family/home by content analysis

		反応内容					
		出現項目数		特異項目数		特異人数	
		男性	女性	男性	女性	男性	女性
I-3	家の暮し	13	19	1	9	1	9
I-5	家の人は私を	8	16	1	4	2	6
I-9	私の父	16	19	4	8	3	8
I-17	もし私の母が	9	12	2	4	2	4
I-21	夫	11	16	0	3	0	4
I-25	私の兄弟(姉妹)	9	20	2	10	2	9
II-1	家では	9	13	1	6	1	6
II-6	私の母	14	18	0	8	0	9
II-12	もし私の父が	8	13	0	6	0	8
II-18	妻	10	17	2	8	2	8
II-26	家の人は	10	16	0	3	0	3
平均		10.6	16.3	1.2	6.3	1.9	6.4

注) 「特異人数」はその刺激語で特異反応を表出した人数。  
 赤いセルはその分析で最多項目数となった刺激語、  
 青いセルは最少となった刺激語である。

### (1) 全体傾向と特異内容項目

1 刺激語あたり，女性は男性より出現内容項目が 1.5 倍多く，特異内容項目も約 5 倍の項目が該当した。つまり，女性の方が男性より出現する内容が多様であり，出現率が分散したことで，特異反応の内容も多様になったのではないかと考えられる。ただし，最も出現する内容項目は男女共に“現在 - 家族成員個人 - 評価なし”であり，＜家族・家庭＞領域で最も連想されやすい内容に性差はない可能性がある。一方，最も特異となる反応内容は男女で異なり，特異反応に関しては何らかの性差があると推察される。例えば，＜家族・家庭＞領域から抽出されやすい特異性が男女で異なる，あるいは抽出される特異性は男女で同じだが，表現内容が異なる，などが考えられる。

また，男性は「私の父(I-9)」，女性は「私の兄弟(姉妹)(I-25)」で最も特異内容項目数が多く，共に成員に関する刺激語であった。特異内容項目の多さは，特異となる内容が多様であることを意味する。これらの刺激語の特異内容が多様であった要因は，それぞれ出現項目数も最多であることから，反応内容にバリエーションがあるため，特異内容項目もバリエーションがみられたと考えられる。実際，「私の兄弟(姉妹)(I-25)」では，参加者家族のきょうだい構成の違いが，記述にバリエーションをもたらし，出現率が分散したと考えられる。一方，父親の場合はなぜ記述にバリエーションがみられるのか，きょうだいとは別の要因に

よるものと考えなくてはならない。

特異内容項目がみられなかったのは、男性で「夫(I-21)」, 「私の母(II-6)」, 「もし私の父が(II-12)」, 「家の人は(II-26)」の4つの刺激語, 女性でそのような刺激語はなかった。男性で挙げられた4つのうち「夫(I-21)」, 「家の人は(II-26)」では、女性でも最も特異内容項目数が少なかった。また、これら2つの刺激語の出現項目数は、男女共に最少ではない。つまり、反応内容のバリエーションが少ない為に、特異反応のバリエーションも少ないのではなく、刺激語の特性として、検出される特異性がかなり限定的であると考えられる。さらに、他の刺激語より特異性を検出しづらいゆえに、場合によってはより強い特異性を検出する可能性も考えられる。

## (2) 各参加者の特異反応出現の様態

次に、各参加者の特異反応の有無を調査した結果、男性では「私の父(I-9)」, 女性では「家の暮し(I-3)」, 「私の兄弟(姉妹)(I-25)」, 「私の母(II-6)」で最も特異反応を記述する者が多かった。これらの刺激語は特異性を検出しやすく、ゆえに特異反応が認められた場合は、特異性の比較的弱いものも拾い上げられていると考えるべきであろう。また、これらの刺激語で特異反応を記述する者は1刺激語あたり男女共に約20%であった。つまり、1刺激語あたり特異反応を記述する者は、<家族・家庭>領域を通して、多くとも全体の20%程度であり、そこに男女の違いはみられない、と言い換えることができる。

11刺激語を通して特異反応を記述する者の比率は女性が男性の約1.8倍であった。さらに、それを記述する1人あたりの平均刺激語数も女性は男性の2倍であり、女性の方が特異反応を記述しやすいと推察される。もしそうであるなら、女性の方が家族に問題を抱きやすく(e.g., Harper & Marshall, 1991), 家族に対する問題意識が反映されているということの意味しているのかもしれない。実際、精研式ではないが、女子高校生の方が男子高校生よりも、家庭についてより積極的に表明する傾向にあるとの指摘もある(Smith, 1963)。このような背景から、女性に個人的な反応が多くなるのかもしれない。また、男性は女性より簡潔な反応となりやすく、個々の被検査者の特徴が反応に表れにくいとも考えられる。女性の方が特異反応を記述しやすく、それが<家族・家庭>領域のみにみられるか否かは、他領域の刺激語への分析結果により明らかになると考えられる。

仮に全参加者52名の10%程度の者、つまり5~6名が強い特異性を持つとする。特異反応出現の様態から、特異反応を多く表出した上位6人は11の刺激語のうち5つ以上で特異反応を記述するといえる。興味深いことに、その6名は「家の暮し(I-3)」, 「家の人は私を(I-5)」, 「私の兄弟(姉妹)(I-25)」の3つの刺激語で共通して特異反応を表出した。これらの刺激語は<家族・家庭>領域で測っている家族イメージや個人特性全体の特異性を反映しやすい特性をもつと考えられる。

たとえば6名の「家の暮し(I-3)」は、2~4項目(平均3.2項目)の複数項目にわたる反応であり、その一部が特異反応に該当した。また、その内容は、時制が“現在”以外か、対象が“家庭環境”・“家族集団”以外であった。よって、6名は反応の中で現在から離れたか、家

族をミクロに捉えたという 2 パターンにより、特異反応を表出したと推察される。

本研究から、男女や刺激語間の異同について考察を試みたところ (1) 男女で〈家族・家庭〉領域を通して最も特異となりやすかった内容項目が異なるということは、〈家族・家庭〉領域によってとらえられる特異性が異なる、あるいは同じ特異性が異なる形で現れることを意味する、(2) 出現内容項目と特異内容項目の数が比例する刺激語とそうでない刺激語がある場合、刺激語によって検出する特異性の程度には違いがあると考えられる、(3) ある刺激語で特異反応を表出する割合が男女で同じであれば、そこで検出される特異性の程度に男女差はみられないと考えられ、特異反応表出者の割合が異なる場合は検出する特異性の程度には男女差がみられると考えられる、(4) 〈家族・家庭〉領域を通して特異反応を記述した者の比率や 1 人あたりの特異反応総数から、男女どちらが特異反応を検出しやすいかが推察される、(5) ある同じ特徴をもった集団に共通して特異反応を表出した刺激語があるならば、その特徴を反映する刺激語といえるのかもしれない、といったことがいえるのではないかと考えられる。

### 第 3 節 研究 3 : 反応形式分析<sup>6</sup>

#### 1 目的

研究 2 では反応内容について取り上げたが、SCT 反応の分析には、反応形式についての視点も必要である。実際の SCT 反応は、その内容だけでなく、内容量が豊富であったり、反対に無反応であったり、SCT 反応の形式的側面にも、被検査者の特性が反映されていると考えられるためである。

反応形式に着目した研究には、例えば、加藤(1967)や熊野(2006)などがあり、これらの所見は、SCT 反応の形式的側面が被検査者の特性を反映する可能性を示すものである。しかし、ある形式的特徴をどれほど有すれば、その被検査者が特徴的であるといえるのか、その観点については論じられておらず、分析法とするまでに至っていない。また、研究 1 では形式的側面である構成を取り上げたが、反応の形式面は構成だけでなく、別の側面からも分析が可能であり、包括的な反応形式分析法とするには文章体で表現される検査に適切な分析側面を加えることが必要と考えられる。

研究 3 では、SCT 反応の形式的側面への分析法の確立に向けた試案として、分析の観点となる形式的側面の設定および特異反応の抽出を試みる。それをうけて、反応形式分析の精緻化に向けた提起を示すことを目的とする。

#### 2 方法

##### 分析対象

---

<sup>6</sup>研究 3 の内容は、石井 明子 (2017). SCT 反応の形式分析法の試み—ロールシャッハ法研究, 21, 10-17. の内容を加筆修正したものである。

研究 1 と同一の家族・家庭に関する 11 の刺激語を対象とした。

## 参加者

参加者は、研究 2 と同一の 18～19 歳の 52 名（男性 14 名(平均年齢=18.6,  $SD=0.51$ ), 女性 38 名(平均年齢=18.6,  $SD=0.50$ ), 全体(平均年齢 18.6 歳,  $SD=.50$ )) に、20～23 歳の 62 名（男性 23 名(平均年齢 20.4,  $SD=.72$ ), 女性 39 名(平均年齢 20.3,  $SD=.52$ ), 全体(平均年齢 20.3 歳,  $SD=.60$ )) を加え、計 114 名（男性 37 名(平均年齢 19.7,  $SD=1.10$ ), 女性 77 名(平均年齢 19.4,  $SD=1.02$ ), 全体(平均年齢 19.5 歳,  $SD=1.05$ )) であった。前者は個別実施、後者は集団実施であり、書面にて参加同意を得た。

研究 2 の個別実施サンプルに、集団実施サンプルを追加したのは、実施法の違いを検証するためである。集団実施と個別実施では、検査環境が決定的に異なり、投映法はそのような影響を受けやすい繊細な検査であると考えられる。研究 1 では、集団実施と個別実施が混在しているものの、データがそれぞれ集団・個別であるのか筆者が把握していなかったため、分析は行わなかった。研究 2 では、統計処理を行うほどのサンプル数がそろわなかった。研究 3 では、改めて実施法の違いについても検討を行うため、集団実施のサンプルを加えた。

## 実施方法

個別実施による参加者は面接室を模した個室で個別に SCT 一式の記入を行った。その後、検査者が家族構成・成員の属性（年齢・参加者との続柄・職業）、成員がどのような人であるか、半構造化面接にて聴取した。実施期間は 2010 年 3 月～2012 年 12 月であった。

集団実施による参加者は学部授業内に集団実施で SCT 一式の記入を行った。SCT 記入終了後、家族構成・成員の属性（年齢・参加者との続柄・職業）について別紙にて記入を求めた。実施期間は 2009 年 7 月～2010 年 7 月であった。

## 分析側面

分析の観点とする反応の形式的特徴として、反応の長さ（文字数）・情報量（成分数）・情報の種類（内容項目数）・反応構成（構成）の 4 つを設定した。これら 4 側面ごとに、各刺激語の特異反応を男女別に抽出した。構成は研究 1 で扱ったものである。構成以外の側面は片口(1974)によるロールシャッハ法の **summary scoring table** を参考にした。ロールシャッハ法の形式面は発表から長く使用され続け、多くの研究者や臨床家からコンセンサスを得ていると思われるためである。ロールシャッハ法の形式面には、反応の量（反応数）、時間（反応時間、初発反応時間）、また反応の種類（**Content Range**, **Determinant Range**）がある。それらを SCT に当てはめると、反応の量は文字数、反応の種類が内容項目数となる。本研究の成分数はロールシャッハ法でいう、1 枚のカードに対する反応数であったり、**main** と **additional** による記号の数となる。時間は集団実施のデータもあり、正確な測定が困難であるため、採用しなかった。

### 1) 文字数

反応部分の文字数をカウントした。その際、読点以外の記号は除外した。特異文字数は、平均文字数との差の絶対値が大きなもの上位 10%未満（最大で男性 3 名・女性 7 名）の文字数とした。その際、平均文字数より少ない方の特異文字を過少、多い方を過多文字とする。

## 2) 成分数

1 刺激語への反応が単文・複文に関わらず、独立に情報となりうる最小単位を成分とした。例えば、「家の暮し」への反応が『は快適だ』は成分数 1、『は快適だ。TV を見たり、寝ていることが多い』は 3 となる。仮定文の場合、条件節と主節をそれぞれ 1 とした。特異成分数は、各成分数に該当する合計人数の割合を上位から加算し、累計 90%を越えた時点で加算されなかった成分数すべてとした。

## 3) 内容項目数

研究 2 では、各成分を反応内容に関する 120 項目に分類した。内容項目数は、1 刺激語への反応成分が該当した項目数をカウントした。特異項目数も、各項目数に該当した合計人数の割合を上位から加算し、累計 90%を越えた時点で未加算の項目数すべてとした。

## 4) 構成

構成は、1 刺激語への反応の成り立ち、つまり成分のつながりを表す。構成 8 項目は、研究 1 で用いたものを使用した。カウント方法も研究 1 に準じた。特異構成項目は、各項目の合計カウント数の割合を上位から加算し、累計 90%を越えた時点で未加算の項目すべてとした。出現率 0.0%のものは議論が困難であるため、本研究では出現率のある項目を扱った。

例えば、「家の暮し『は快適だが、いつか一人暮らしがしたい。』」であれば、文字数が 18、成分数が『快適だ』『いつか一人暮らしがしたい』で 2 となる。また、内容項目は、前者が“現在 - 家庭環境 - 肯定”，後者が“未来 - 家庭環境 - 評価なし”の 2 種類で、項目数 2 となる。さらに、それらをつなぐ構成は“展開”に 1 となる。また、「夫『になったら…』」は文字数 5、成分数 1、項目数 1，“単一構成”に 1、「夫『になったら、どうなるだろう？』」は文字数 13、成分数 2、項目数 2，“展開”に 1 となる。カウント例を Table13 に示す。

Table13 家族・家庭領域における形式的側面のカウント例  
An example of counting of formal aspects in a field of family and home

刺激語	反応例	文字数	成分数	項目数	構成	
					分類項目	カウント数
家の暮し	は快適だ	4	1	1	単一構成	1
もし私の母が	<u>違う人だったら</u> ・・・	7	1	1	単一構成	1
夫	になったら、 <u>どんな夫になっているのだろう</u>	20	2	2	展開	1
私の母	は働いている。 <u>昔は家事もしていたが、今は家族で分担している</u>	28	3	3	展開 展開	0.5 0.5
もし私の父が	<u>死んだら、私は悲しむだろう。</u> <u>ずっと元気でいてほしい</u>	23	3	2	展開 展開	0.5 0.5
家の人は	<u>自分勝手なところもあるが、</u> <u>個性的で元気ではある</u>	23	3	2	その他 その他	0.5 0.5

注) 下線部は反応成分を表す。

なお、本研究も研究 1・研究 2 同様、構成はそのカウント方法により統計処理を行わなかった。また、文字数・成分数・内容項目数については、全体平均の比較のみ統計処理を行った。各側面の特異反応の比較については、全体の 10%未満というサンプル数の少なさから、統計処理は不適と考え、行わないこととした。

### 倫理的配慮

実施にあたって参加者に口頭および書面にて研究目的と意義、調査方法、任意協力、資料の取り扱いについて説明し、自由意志での参加と、匿名性の保持について保証し、書面にて同意を得た参加者のみに実施した。

得られたデータは、参加者の秘密保護に十分配慮し、参加者が特定されないことがないよう、氏名を削除し、それぞれ番号を付与することで連結可能匿名化を行った。

### 3 結果

まず、個別・集団実施の違い、男女差の有無を検討するため、統計処理の可能な文字数・成分数・内容項目数の 3 側面の全体平均に対して、実施法と性別を独立変数とした二要因の分散分析を行った。その結果、3 側面いずれも交互作用は認められなかった。

実施法の違いについて、文字数( $F_{(1,110)}=3.428, p=.067$ )、成分数( $F_{(1,110)}=3.188, p=.077$ )ともに主効果は認められなかった。内容項目数( $F_{(1,110)}=8.853, p=.004$ )は個別実施の方が有意に多かったが、Bonferroni 補正を行い、刺激語別にみると有意差が認められた刺激語はなかった。よって、本研究では、個別・集団を分けずに、特異反応を抽出することとした。

性差は、文字数( $F_{(1,110)}=9.714, p=.002$ )、成分数( $F_{(1,110)}=11.166, p=.001$ )、項目数( $F_{(1,110)}=9.412, p=.003$ )の全てで有意な主効果が認められたため、本研究では男女別に分析す

ることとした。

文字数・成分数・項目数の各刺激語の平均を Table14 に示す。

Table14 家族・家庭領域における平均文字数・成分数・項目数  
Mean number of letters, components and categories in a field of family and home

	文字数		成分数		項目数	
	男性	女性	男性	女性	男性	女性
I-3 家の暮し	21.2	22.8	2.1	2.3	1.8	1.9
I-5 家の人を私を	18.0	23.1	1.5	2.0	1.3	1.7
I-9 私の父	20.9	25.8	1.9	2.6	1.5	2.0
I-17 もし私の母が	19.4	27.6	2.0	2.5	1.5	1.6
I-21 夫	17.8	21.9	1.5	1.9	1.2	1.5
I-25 私の兄弟(姉妹)	17.0	25.8	1.8	2.7	1.5	2.1
II-1 家では	15.7	21.6	1.6	2.2	1.3	1.5
II-6 私の母	16.6	23.1	1.7	2.3	1.4	1.8
II-12 もし私の父が	17.9	24.2	1.9	2.2	1.3	1.5
II-18 妻	14.8	21.2	1.4	1.7	1.3	1.4
II-26 家の人	11.9	18.5	1.2	1.7	1.2	1.4
平均	17.4	23.2 *	1.7	2.2 *	1.4	1.7 *
SD	2.7	2.5	0.3	0.3	0.2	0.2

\* :  $p < .05$

注) 統計結果は男女の全体平均に対する結果である。

### (1) 各形式的側面の全体傾向と特異形式の傾向

#### 1) 文字数(Figure3・4)

平均文字数は1刺激語あたり、男性で11.9～21.2文字(全体平均17.4文字)、女性は18.5～27.6文字(全体平均23.2文字)であった(Figure4の①)。最も平均文字数が多かったのは、男性で「家の暮し(I-3)」(21.2文字)、女性で「もし私の母が(I-17)」(27.6文字)であった。最少は、男女共に「家の人(II-26)」(男性：11.9文字、女性：18.5文字)であった。

特異文字数については、11の刺激語を通して、過少文字が男性で3つの刺激語、女性で6つの刺激語、過多文字が男女共に11の刺激語全てにみられた。平均と平均から最も近い特異文字数までの文字数(特異文字数と平均値の最小絶対値)は1刺激語あたり、男性で15.1～29.1文字(全体平均20.1文字)、女性で16.5～26.9文字(全体平均21.3文字)であった(②)。その文字数が最大だったのは、男性で「私の父(I-9)」(29.1文字)、女性で「家の人を私を(I-5)」(26.9文字)、最小は、男女共に「家の人(II-26)」(男性：15.1文字、女性：16.5文字)であった。

過少文字(③)は1刺激語あたり、男性で平均0.0～2.0文字(全体平均0.7文字)、女性で

平均 0.0~8.7 文字(全体平均 2.9 文字)であり、平均過少文字数が最大だったのは、男性で「家の暮し(I-3)」(2.0 文字)、女性で「もし私の母が(I-17)」(8.7 文字)、最小は、男性で「もし私の母が(I-17)」, 「もし私の父が(II-12)」の 2 つの刺激語(各 0.0 文字)、女性で「夫(I-21)」, 「もし私の父が(II-12)」の 2 つ(各 0.0 文字)であった。過多文字(④)は 1 刺激語あたり、男性で平均 27.3~54.0 文字(全体平均 42.0 文字)、女性で平均 38.3~63.0 文字(全体平均 50.4 文字)であった。平均過多文字数が最大だったのは、男性で「家の暮し(I-3)」(54.0 文字)、女性で「私の父(I-9)」(63.0 文字)、最小は男女共に「家の人は(II-26)」(男性: 27.3 文字、女性: 38.3 文字)であった。

過少文字の範囲(⑤)は、男性で 0 文字(平均 0.0 文字)、女性で 0~2 文字(平均 0.5 文字)であり、男性は過少文字のみられた 3 つの刺激語すべてで 1 文字数のみが過少文字であり、範囲がなかった。女性は「もし私の母が(I-17)」で最大範囲(2 文字)、「私の父(I-9)」, 「夫(I-21)」, 「家では(II-1)」, 「もし私の父が(II-12)」の 4 つの刺激語で 1 文字数のみが過少文字であり、範囲がなかった。過多文字の範囲(⑥)は、男性で 0~22 文字(平均 7.6 文字)、女性で 3~39 文字(平均 13.5 文字)であった。最大範囲だった刺激語は、男性で「家では(II-1)」(22 文字)、女性で「私の父(I-9)」(39 文字)、最小範囲だった刺激語は、男性で「もし私の父が(II-12)」(0 文字)、女性で「夫(I-21)」(3 文字)であった。過少・過多文字それぞれの最小・最大文字数の平均から算出した範囲は、過少文字では、男性が 0.7 文字(範囲なし)、女性が 2.5~3.0 文字、過多文字では、男性が 38.4~46.0 文字、女性が 45.0~58.5 文字であった。

各特異文字と非特異文字間の差を検討したところ、過少 - 非特異文字間は、男性で 2~4 文字差(平均 3.0 文字差)、女性で 1~7 文字差(平均 3.3 文字差)であった(⑦)。その差が最大となったのは、男性で「もし私の母が(I-17)」(4 文字差)、女性で「もし私の父が(II-12)」(7 文字差)であり、最小となったのは、男性で「家の暮し(I-3)」(2 文字差)、女性で「私の兄弟(姉妹)(I-25)」と「家では(II-1)」の 2 つの刺激語(各 1 文字差)であった。非特異 - 過多文字間は、男性で 1~16 文字差(平均 5.5 文字差)、女性で 1~4 文字差(平均 2.0 文字差)であった(⑧)。最大差となったのは、男性で「妻(II-18)」(16 文字差)、女性で「私の母(II-6)」(4 文字差)であった。最小は、男性で「夫(I-21)」と「私の母(II-6)」の 2 つの刺激語(各 1 文字差)、女性で「家の暮し(I-3)」, 「家の人は私を(I-5)」, 「家では(II-1)」, 「妻(II-18)」, 「家の人は(II-26)」の 5 つの刺激語(各 1 文字差)であった。

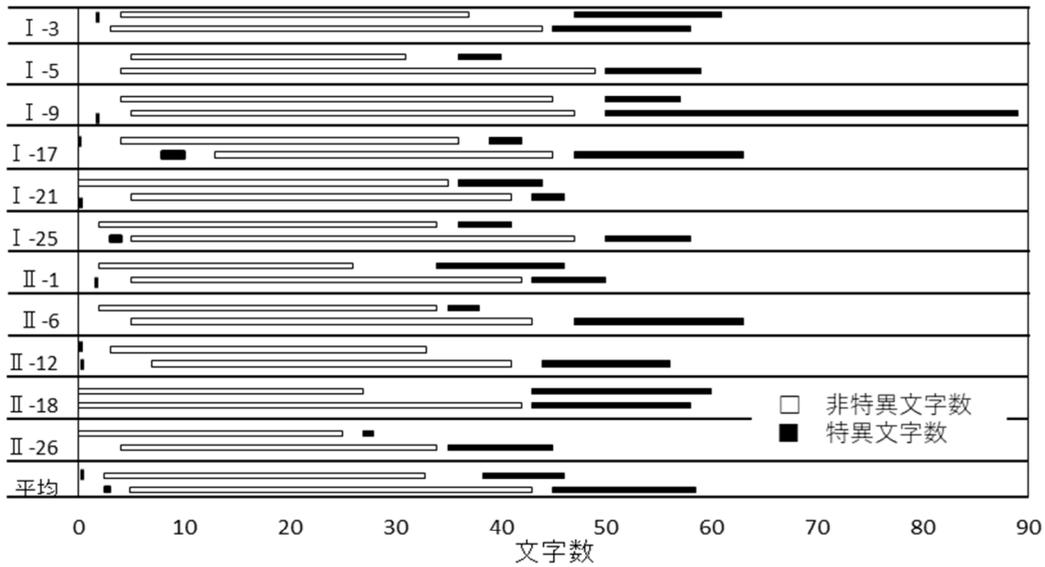


Figure3 各文字数の範囲  
Range of each number of letter

注) 上段は男性( $n=37$ ), 下段は女性( $n=77$ )。  
特異文字数は平均からの差の大きい過少文字数・過多文字数を指す。  
非特異文字数は過少・過多文字に該当しない文字数を指す。

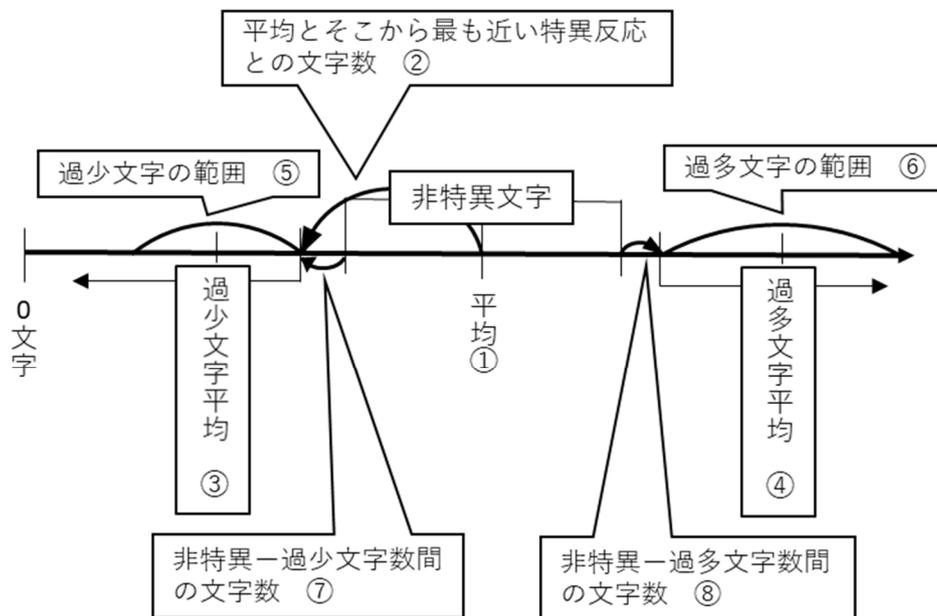


Figure4 文字数の特徴を示す各指標  
Each index expressing characters of letters

## 2) 成分数(Table15)

11 の刺激語を通して, 男女共に成分数 0~7 に反応が出現し, 1 刺激語あたりの平均成分

数は、男性が 1.2~2.1(全体平均 1.7), 女性が 1.7~2.7(全体平均 2.2)であった。平均出現成分数が最も大きかったのは、男性で「家の暮し(I-3)」(平均 2.1), 女性で「私の兄弟(姉妹)(I-25)」(平均 2.7)であった。最も小さかったのは、男性で「家の人(II-26)」(平均 1.2), 女性で「妻(II-18)」と「家の人(II-26)」の 2 つの刺激語(平均 1.7)であった。最も多くの成分数に反応が出現したのは、男性で「家の暮し(I-3)」, 「私の父(I-9)」, 「妻(II-18)」の 3 つの刺激語で 6 つの成分数, 女性で「私の父(I-9)」, 「家では(II-1)」, 「家の人(II-26)」の 3 つの刺激語で 7 つの成分数であった。最も少なかったのは、男性で「家の人(II-26)」の 3 つの刺激語で 3 つ, 女性で「家の人(II-26)」, 「もし私の母が(I-17)」, 「夫(I-21)」の 3 つの刺激語で 5 つであった。

成分数ごとにみると, 1 つの成分数は, 男性で 1~11 の刺激語(平均 6.3 語), 女性で 2~11 の刺激語(平均 8.3 語)で出現した。最も多くの刺激語でみられた成分数は, 男性で成分数 1・2(11 語), 女性で成分数 1・2・3・4(11 語)であった。最も少なかったのは, 男性で成分数 6・7(1 語), 女性で成分数 7(2 語)であった。

特異成分数は, 刺激語別にみると, 男性で 8 つの刺激語, 女性で 11 の刺激語全てに認められた。特異成分数は 1 刺激語あたり, 男性で 0~3 つ, 女性で 1~3 つの成分数にみられた。最も多くの成分数が特異成分数となったのは, 男性で「家の暮し(I-3)」(3 つ), 女性で「私の父(I-9)」と「家では(II-1)」の 2 つの刺激語(各 3 つ)であった。最も少なかったのは, 男性で「家の人(II-26)」, 「私の兄弟(姉妹)(I-25)」, 「家の人(II-26)」の 3 つの刺激語で該当成分数なし, 女性で「もし私の母が(I-17)」, 「夫(I-21)」, 「私の兄弟(姉妹)(I-25)」, 「妻(II-18)」の 4 つの刺激語で 1 つであった。

成分数別にみると, 男性は成分数 0・3~7, 女性は成分数 0・4~7 が 11 刺激語のいずれかで特異成分数に該当した。最も特異成分数に該当したのは, 男性で成分数 4(7 刺激語), 女性で成分数 5(8 刺激語)であった。特異成分数がみられた中では, 男性は成分数 6・7(1 刺激語), 女性は成分数 7(2 刺激語)が最も特異となる刺激語が少なかった。

Table15 各成分数の出現率  
Appearance rate of the number of components

	成分数(男性 n=37)							成分数(女性 n=77)								
	0	1	2	3	4	5	6	7	0	1	2	3	4	5	6	7
I-3 家の暮し	32.4	40.5	18.9	2.7	2.7	2.7	2.7		22.1	45.5	19.5	9.1	2.6	1.3		
I-5 家の人は私を	59.5	29.7	10.8						42.9	27.3	20.8	7.8	1.3			
I-9 私の父	45.9	37.8	5.4	2.7	5.4		2.7		24.7	23.4	29.9	13.0	6.5	1.3	1.3	
I-17 もし私の母が	2.7	8.1	81.1	5.4	2.7				5.2	54.5	32.5	5.2	2.6			
I-21 夫	5.4	45.9	43.2	2.7	2.7			3.9	35.1	36.4	18.2	6.5				
I-25 私の兄弟(姉妹)	48.6	27.0	24.3						24.7	24.7	24.7	9.1	14.3	2.6		
II-1 家では	48.6	43.2	2.7	5.4					35.1	32.5	18.2	7.8	3.9	1.3	1.3	
II-6 私の母	56.8	27.0	8.1	2.7	5.4				33.8	31.2	16.9	9.1	7.8	1.3		
II-12 もし私の父が	5.4	10.8	73.0	10.8				3.9	6.5	61.0	22.1	5.2	1.3			
II-18 妻	13.5	48.6	27.0	5.4	2.7	2.7		3.9	45.5	31.2	13.0	6.5				
II-26 家の人は	10.8	62.2	27.0						51.9	31.2	11.7	3.9	1.3			
該当語数	2	0	0	2	7	3	1	1	3	0	0	0	2	8	5	2

注) 表中の数値は%である。  
下線のある数値は特異成分数である。

### 3) 内容項目数(Table16)

11の刺激語を通して、男性で項目数1~4、女性で項目数1~5に反応が出現した。1刺激語あたりの平均出現項目数は、男性が1.2~1.8(全体平均1.4)、女性が1.4~2.1(全体平均1.7)であった。平均出現項目数が最も大きかったのは、男性で「家の暮し(I-3)」(平均1.8)、女性で「私の兄弟(姉妹)(I-25)」(平均2.1)であった。最も小さかったのは、男性で「夫(I-21)」, 「家の人(II-26)」の2つの刺激語(平均1.2)、女性で「妻(II-18)」と「家の人(II-26)」の2つの刺激語(平均1.4)であった。最も多くの項目数に反応が出現したのは、男性で「家の暮し(I-3)」, 「私の父(I-9)」の2つの刺激語で4つの項目数、女性で「私の父(I-9)」, 「私の兄弟(姉妹)(I-25)」, 「私の母(II-6)」の3つの刺激語で5つの項目数に反応がみられた。最も少なかったのは、男性で「夫(I-21)」, 「もし私の父が(II-12)」, 「妻(II-18)」, 「家の人(II-26)」の4つの刺激語で2つ、女性で「もし私の母が(I-17)」, 「夫(I-21)」, 「家では(II-1)」, 「もし私の父が(II-12)」, 「家の人(II-26)」の5つの刺激語で3つであった。

項目数ごとにみると、1つの項目数は、男性で2~11の刺激語(平均6.2語)、女性で3~11の刺激語(平均8.4語)で出現した。最も多くの刺激語でみられた項目数は、男性で項目数1・2(11刺激語)、女性で項目数1・2・3(11刺激語)であった。最も少なかったのは、男性で項目数4(2刺激語)、女性で項目数5(3刺激語)であった。

特異項目数は刺激語別にみると、男性で7つの刺激語、女性で11つの刺激語全てに認められた。1刺激語あたり、男性で1つ、女性で1~2つの項目数が特異となった。

項目数別にみると、男性は項目数3・4、女性は項目数3・4・5が特異項目数に該当した。男性は項目数3が5つの刺激語、項目数4が2つ刺激語にみられた。女性は項目数3が5つの刺激語、項目数4が6つの刺激語、項目数5が3つの刺激語でみられた。

Table16 各項目数の出現率

Appearance rate of the number of categories

	項目数(男性 $n=37$ )				項目数(女性 $n=77$ )				
	1	2	3	4	1	2	3	4	5
I-3 家の暮し	43.2	43.2	8.1	<u>5.4</u>	39.0	41.6	14.3	<u>5.2</u>	
I-5 家の人は私を	70.3	27.0	<u>2.7</u>		49.4	36.4	11.7	<u>2.6</u>	
I-9 私の父	59.5	29.7	8.1	<u>2.7</u>	36.4	35.1	23.4	<u>3.9</u>	<u>1.3</u>
I-17 もし私の母が	56.8	35.1	<u>8.1</u>		49.4	45.5	<u>5.2</u>		
I-21 夫	75.7	24.3			63.6	27.3	<u>9.1</u>		
I-25 私の兄弟(姉妹)	54.1	40.5	<u>5.4</u>		36.4	29.9	28.6	<u>2.6</u>	<u>2.6</u>
II-1 家では	73.0	24.3	<u>2.7</u>		62.3	29.9	<u>7.8</u>		
II-6 私の母	62.2	32.4	<u>5.4</u>		45.5	32.5	16.9	<u>3.9</u>	<u>1.3</u>
II-12 もし私の父が	73.0	27.0			55.8	33.8	10.4		
II-18 妻	73.0	27.0			68.8	23.4	<u>6.5</u>	<u>1.3</u>	
II-26 家の人は	81.1	18.9			64.9	28.6	<u>6.5</u>		
該当語数	0	0	5	2	0	0	5	6	3

注) 表中の数値は%である。

下線のある数値は特異項目数である。

## 4) 構成(Table17)

1 刺激語あたり、男性は3~7項目(平均5.5項目)、女性は6~7項目(平均6.5項目)の構成がみられた。出現する構成項目の数(構成の種類)が最も多かった刺激語は男性で「家の暮し(I-3)」と「家では(II-1)」の2つの刺激語(各7項目)、女性で「家の暮し(I-3)」や「家では(II-1)」など6つの刺激語(各7項目)であった。最も少なかったのは、男性で「もし私の父が(II-12)」(3項目)、女性で「もし私の母が(I-17)」や「もし私の父が(II-12)」など5つの刺激語(各6項目)であった。

構成項目別にみると、1項目あたり、男性は0~11の刺激語(平均7.5語)、女性は2~11の刺激語(平均9.0語)で出現した。最も出現した項目は男性で“単一構成”・“展開”・“その他”の3項目、女性で“単一構成”・“補足”・“転換”・“並列”・“展開”・“その他”の6項目であり、男女共に11の刺激語全てでそれら項目に該当する反応がみられた。最も出現しなかったのは、男女共に“部分否定”(男性:0刺激語、女性:2刺激語)であった。

特異構成項目は、刺激語別にみると、1刺激語あたり、男性は1~3項目(平均1.9項目)、女性は1~4項目(平均2.2項目)が該当した。特異構成項目の数(特異構成の種類)が最も多かった刺激語は男性で「私の兄弟(姉妹)(I-25)」と「妻(II-18)」の2つの刺激語(各3項目)、女性で「もし私の母が(I-17)」(4項目)であった。最も少なかった刺激語は男性で「私の母(II-6)」と「もし私の父が(II-12)」の2つの刺激語(各1項目)、女性で「私の母(II-6)」(1項目)であった。

構成項目別にみると、11の刺激語を通して特異項目は、男性で5項目、女性で6項目にみられた。最も多くの刺激語で特異となったのは、男性で“並列”(7刺激語)、女性で“補足”(10刺激語)であった。最も少なかったのは、11の刺激語を通して特異構成項目にならなかった項目(男性:“単一構成”・“展開”・“部分否定”,女性:“単一構成”・“展開”)を除いて、男性“対比”(2刺激語)、女性で“その他”(1刺激語)であった。

Table17 各刺激語に対する構成の分類項目の出現率  
Appearance rate of construction's category.items

	男性 (n=37)				女性 (n=77)											
	単一	補足	否定	転換	並列	対比	展開	他	単一	補足	否定	転換	並列	対比	展開	他
I-3 家の暮し	32.4	10.1	16.8	4.2	4.1	27.4	4.9	22.1	8.4	0.6	15.1	9.6	31.8	12.2		
I-5 家の人は私を	59.5	4.1	2.7	4.1	25.7	4.1	42.9	4.5	5.4	12.4	3.0	26.2	5.5			
I-9 私の父	45.9	2.7	8.8	5.2	31.2	6.1	24.7	5.5	8.4	15.7	2.1	31.8	11.7			
I-17 もし私の母が	8.1		0.9	4.1	86.9	4.1	5.2	1.1	2.6	3.4	87.1	0.6				
I-21 夫	45.9		13.5	4.1	31.1	5.4	39.0	2.6	3.7	22.1	29.8	5.4				
I-25 私の兄弟(姉妹)	48.6		2.7	4.1	2.7	32.4	9.5	24.7	4.5	11.9	10.0	3.5	34.2	11.1		
II-1 家では	48.6	3.6	3.6	16.2	6.3	17.5	4.1	35.4	4.3	7.8	20.4	2.6	24.4	5.0		
II-6 私の母	56.8	5.4	7.4		24.3	6.1	33.8	6.4	4.4	15.6	33.0	6.7				
II-12 もし私の父が	10.8				82.4	6.8	6.5	1.4	1.1	2.4	83.4	5.2				
II-18 妻	50.0	2.7	2.7	3.6	27.5	13.5	45.5	0.4	6.9	9.1	23.8	14.3				
II-26 家の人は	62.2	5.4	2.7		13.5	16.2	50.6	2.6	1.3	6.1	8.5	20.8	10.1			
全体	42.6	3.1	4.6	4.8	1.2	36.4	7.3	29.8	3.8	0.2	6.7	11.7	1.0	38.7	8.0	
該当語数	0	5	4	7	2	0	3	0	10	2	5	2	4	0	1	

注) 「単一」は「単一構成」, 「否定」は「部分否定」, 「他」は「その他」の略。  
数値は%, 下線のある数値は特異項目である。

## (2) 各参加者の特異反応出現の様態

11の刺激語を通して、各参加者の反応が4側面のいずれかで特異反応となった刺激語および特異となった形式的側面の数を調査した(Table18・19)。なお、Table18・19は、それぞれの参加者が各刺激語で特異反応を表出した側面数(最大4側面)を表した。

刺激語別にみると、1刺激語あたり、男性は4~8人(平均5.5人)、女性は13~19人(平均16.4人)が特異反応を表出した。特異反応を表出した人数が最も多かった刺激語は、男性で「家の暮し(I-3)」(8人, 21.6%)、女性で「家では(II-1)」(19人, 24.7%)であり、最も少なかったのは、男性で「家の人を私を(I-5)」, 「もし私の母が(I-17)」, 「もし私の父が(II-12)」の3つの刺激語(各4人, 10.8%)、女性は「もし私の父が(II-12)」(13人, 16.9%)であった。

個々の参加者をみると、男性の27人(72.9%)、女性の59人(76.6%)が11の刺激語のいずれかで特異反応を表出し、1人あたり男性で0~6つの刺激語(平均1.6語)、女性で0~8つの刺激語(平均2.3語)にみられた(特異反応総数)。特異反応を表出した参加者に限定すると、男性は平均2.2刺激語、女性は平均3.1刺激語で特異反応を表出した。1刺激語あたりの平均特異側面数は、4側面中、男性で1.6側面、女性で1.2側面であった。

Table18 男性参加者の特異反応  
Specific responses for individual male subjects

Sub	I-3	I-5	I-9	I-17	I-21	I-25	II-1	II-6	II-12	II-18	II-26	特異反応 総数
1				2			4					2
3	1											1
4			2	4			2		1	1	1	6
5	1											1
6				3	1		2					3
7								1		1		2
8			1									1
9		1			1			1	1		1	5
10											1	1
11		2	2			3		3		3		5
12					1							1
13	1								3			2
14						1						1
15	3		4			1		2				4
16						1						1
17						1	1					2
19											1	1
21					2							1
22	2	1				3						3
24									3			1
25	4							3				2
26		1									2	2
28										1		1
31	1		1	2						2		4
34			1		2							2
36	1											1
37					1		1			1	1	4
計(人)	8	4	6	4	6	6	5	5	4	6	6	

注) 特異反応数0の参加者は記載していない。

Table19 女性参加者の特異反応  
Specific responses for individual female subjects

Sub	I-3	I-5	I-9	I-17	I-21	I-25	II-1	II-6	II-12	II-18	II-26	特異反応 総数
38						1	1			1		3
39	2	1	2		1	2	2	2		1		8
40	3	3	1	2	1				1	1	1	8
41		1		1		3	1		1			5
43	1						1					2
44	1											1
45	3			1	1	3		1				5
46								1				1
47		2				1	1	3				4
48						1	1					2
49							1				1	2
50			1	1	1						1	4
52					2			1			1	3
53					2					1		2
54	1								2	1		3
55											1	1
57				1								1
58	3	1	1	1			1	1		1		7
59		3	3	3	1	1	3	2	2			8
61		3			1						1	3
62							1				3	2
63								1				1
64							1		2			2
65					2					1		2
66					1			1				2
67	1	3		1		2	1	2		1		7
68					1							1
69								1		1		2
70			1	1								2
71					1	1			2			3
72	1			1		1						3
73							2			1		2
74	1								1			2
75	2		3	2			2	2		2	3	7
76							1					1
78	1		1			1						3
79						1	1					2
80	1		3		2	1	1			1	1	7
83					1							1
84				1								1
85		1										1
86											1	1
87						1						1
88		1							1			2
89		1		1	1						1	4
90			2	1	1		1	2				5
96			1						1			2
99					1							1
100			1					4	1			3

101						1				1	2	3
102	1	3	2	3	1				3	3	1	8
103	1	1	1	1			1		1	1		7
104									1			1
105	1	1	1	1		1				1		6
107			1			1	1					3
110			1							1	1	3
111	1											1
112						1						1
113		1										1
計(人)	17	15	17	17	18	18	19	15	13	17	14	

注) 特異反応数0の参加者は記載していない。

#### 4 考察

本研究は、SCT 反応の文字数・成分数・内容項目数・構成の観点から、特異な反応形式を抽出する分析方法を試みた。文字数では平均からの差の大きいもの、その他 3 側面では出現率の低いものを特異反応とした。ここでは、各形式の全体傾向、特異形式項目や各参加者の特異反応出現の様態について考察を行う。本研究では文字数・成分数・内容項目数の全体平均に男女で有意差がみられ、男女別に分析を行ったため、男女別に各形式側面の分析による刺激語の特徴を Table20-1, 20-2 にまとめた。Table20-2 にある各形式的側面の「出現項目数」と「特異項目数」はそれぞれの側面での分析によって出現した反応の種類を表す。例えば、成分数で「出現項目数」が 6 とすると、その刺激語では 6 つ (6 種類) の成分数がみられたということになる。その刺激語の「特異項目数」が 3 とすると、その 6 つのうち、3 つの成分数が特異項目であったということになる。

Table20-1 反応形式分析から見た家族・家庭領域の各刺激語の特徴  
 Characteristics of each stimulus word on family/home by formal analysis

	文字数											
	平均文字数		平均-特異最小絶対値		過少文字範囲		過多文字範囲		非特異・過少文字数差		非特異・過多文字数差	
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
I-3	21.2	22.8	19.2	22.2	0	-	14	13	2	-	10	1
I-5	18.0	23.1	18.0	26.9	-	-	4	9	-	-	5	1
I-9	20.9	25.8	29.1	23.8	-	0	7	39	-	3	5	3
I-17	19.4	27.6	19.4	17.6	0	2	3	16	4	3	3	2
I-21	17.8	21.9	18.2	21.1	-	0	8	3	-	5	1	2
I-25	17.0	25.8	19.0	21.8	-	1	5	8	-	1	2	3
II-1	15.7	21.6	18.3	19.4	-	0	22	7	-	1	8	1
II-6	16.6	23.1	18.4	23.9	-	-	3	16	-	-	1	4
II-12	17.9	24.2	17.9	19.8	0	0	0	12	3	7	7	3
II-18	14.8	21.2	28.2	21.8	-	-	17	15	-	-	16	1
II-26	11.9	18.5	15.1	16.5	-	-	1	10	-	-	2	1
平均	17.4	23.2	20.1	21.3	0.0	0.5	7.6	13.5	3.0	3.3	5.5	2.0

注) 赤いセルはその分析で最多文字数となった刺激語, 青いセルは最少となった刺激語である。  
 過少文字範囲の男性は, すべて「0」であったため, 最多とも最少ともしなかった。

Table20-2 反応形式分析から見た家族・家庭領域の各刺激語の特徴  
 Characteristics of each stimulus word on family/home by formal analysis

	成分数				項目数				構成				形式分析	
	出現項目数		特異項目数		出現項目数		特異項目数		出現項目数		特異項目数		特異人数	
	男性	女性	男性	女性										
I-3	6	6	3	2	4	4	1	1	7	7	2	2	8	17
I-5	3	5	0	2	3	4	1	1	6	7	1	2	4	15
I-9	6	7	2	3	4	5	1	2	6	7	2	2	6	17
I-17	5	5	2	1	3	3	1	1	4	6	2	4	4	17
I-21	5	5	2	1	2	3	0	1	5	6	2	2	6	18
I-25	3	6	0	1	3	5	1	2	6	7	3	2	6	18
II-1	4	7	2	3	3	3	1	1	7	7	2	2	5	19
II-6	5	6	2	2	3	5	1	2	5	6	1	1	5	15
II-12	4	6	1	2	2	3	0	0	3	6	1	3	4	13
II-18	6	6	2	1	2	4	0	2	6	6	3	2	6	17
II-26	3	7	0	2	2	3	0	1	5	7	2	2	6	14
平均	4.5	6.6	1.5	1.8	2.8	3.8	0.6	1.3	5.5	6.5	1.9	2.2	5.5	16.4

注) 「出現項目数」・「特異項目数」は成分数・項目数・構成それぞれの反応の種類を指す。

「特異人数」はその刺激語において4側面のいずれかで特異反応を表出した人数。

赤いセルはその分析で最多項目数となった刺激語, 青いセルは最少となった刺激語である。

### (1) 全体傾向と特異形式

文字数について、11の刺激語全体の平均文字数は男性の方が女性より少なく、男性は簡潔な反応になりやすいといえる。

特異文字数について、平均文字数とそれに最も近い特異反応間の文字数(Figure4 ②)は、男性では「私の父(I-9)」, 女性では「家の人は私を(I-5)」が最も文字数が多く、男女共に「家の人は(II-26)」で最も少なくなった。これらの文字数の違いは、平均からのずれの大きさの違いを示しており、特異性の強弱を表していると考えられる。この文字数が多い刺激語、つまり平均からのずれが大きい刺激語は検出する特異性が強いと推察される。過少文字の範囲(⑤)は、男性で刺激語による違いがなく、女性で「もし私の母が(I-17)」で最も広く、「私の父(I-9)」をはじめ4つの刺激語で狭くなった。また、過多文字の範囲(⑥)については、男女それぞれ最も広い、狭い刺激語が特定された。これら範囲の違いは、特異反応となりうる範囲の違いである。範囲が広ければ、その刺激語で特異反応を表出したといっても、特異性の強弱に違いがみられるので、特異反応の範囲の中のどこに位置したのかが問題となるであろう。また、範囲が広いということは、それだけ特異反応を拾いやすい、特異反応となる可能性が大きいと推察されるため、特異性を検出しやすいがその特異性は弱いものも含まれている可能性があるとも考えられる。非特異文字数と過少文字数間の文字数差(⑦)、非特異文字数と過多文字数間の文字数差(⑧)も男女それぞれ最大となる刺激語、最少となる刺激語が特定された。これは、非特異反応と特異反応の間にどれほどの隔りがあるか、ということである。この隔りが大きいかほど、特異反応と非特異反応の違いが大きいかとなり、それは特異反応か否かの弁別力が高いと考えられる。Figure4で示した特異文字数の特徴として挙げた各指標がどのような意味づけになるのかをTable21にまとめた。

Table21 特異文字数に関する各指標の意味づけ  
Meaning of each index about specific responses of word count

Figure4 番号	指標	意味づけ	例
②	平均と最も近い特異 反応との文字数	平均からどれほどずれた反応を 検出するのか = 特異性の強弱	文字数が増えれば 特異性は強い
⑤・⑥	過少・過多文字の 範囲	特異反応の範囲はどれほどか = 特異性の強さのバラエティー 特異反応になりやすいか	範囲が広ければ検出する特異性に 幅がある また、多くの反応を特異としやすく、 特異性が弱い
⑦・⑧	非特異 - 過少・過多 文字数間の文字数	特異と非特異の間に どれほどの違いがあるのか = 弁別力	文字数が増えれば 特異と非特異の差が大きく、 弁別力が強い

成分数について、11の刺激語全体の平均成分数は男性の方が女性より少なく、男性は女性より情報量が少ないといえる。

成分数の分析では、いくつかの成分数に反応がみられたかを表す出現項目数が男女それぞれ特定された。その際にみられた刺激語による出現項目数の違いは、反応のバリエーションの違いを反映している。つまり、それぞれその刺激語にみられる情報量にどれほど幅があるかを表しているといえる。また、いくつかの成分数が特異となったのかを表す特異項目数も特定された。特異項目数も、その刺激語にみられる特異な情報量にはどれほどの幅があるかを表しているといえる。その幅の違いはその刺激語が検出する特異性の強さの違いを示していると推察される。特異項目数が多ければ、個々の反応が特異反応に該当する可能性は高まり、検出された特異性は多様であるが、その特異性の程度が弱いものも含まれる可能性があると考えられる。

内容項目数について、11の刺激語全体の平均項目数は男性の方が女性より少なく、男性は女性より情報の種類が少ないといえる。項目数は、全体で出現する項目数・特異項目数ともに少なく、各刺激語の違いや男女の違いが浮かび上がりにくい側面と推察される。しかし、そのような状況でもなお特異反応を表出するならば、その特異性の程度は強いと考えられる。

構成では、出現項目数と特異項目数が男女それぞれ特定された。出現項目数はその刺激語で現れる連想の流れ方の種類である。特異項目数は特異な連想の流れ方の種類であり、その種類が多いほど、様々な特異性を検出しやすい、一方でその特異性は弱いと推察される。

## (2) 各参加者の特異反応出現の様態

各参加者の特異反応について、1刺激語あたりの特異反応を1側面でも表出した者の人数が、男女それぞれ調査され、その人数が最も多かった刺激語、少なかった刺激語が特定された。この刺激語による特異反応表出者の人数の違いは、特異反応を表出しやすいか否か、つまり特異性の検出しやすさを表していると推察される。特異反応表出者が多い刺激語は、何かしらの特異性を検出しやすいと考えられる。

また、1人あたりの特異反応総数が調査され、その数が多いほど、＜家族・家庭＞領域の広範囲、さらにいえばその人のパーソナリティの広域が特異であるとか、個性的であると考えられる。さらに、1刺激語あたりの特異側面数は、その刺激語に対して、どれほど特異であるのかを表していると推察される。ある刺激語について、4側面すべてで特異反応であるならば、その刺激語に対して相当に特異な反応であるとみなすことができるし、1側面であるならば、比較的特異性は弱い（限定的）と考えられる。つまり特異反応総数は特異性の広がり、特異側面数は特異性の深さを示すのではないかと推察されるのである。

本研究では、(1)男性は女性より反応形式が簡潔であること、(2)それぞれの分析側面で特異性の多様さ、その特異性の検出力、またその特異性の程度の弱さが推察できる可能性があること、(3)文字数に関して、各刺激語の特異反応と非特異反応の弁別力を推察できる可能性があること、(4)内容項目数に関して、男女差や刺激語間の差が表れづらく、特異性を検出しづらいが、それゆえ強い特異性を検出するのではないかと考えられること、(5)各個人の特異反応の表出の様態からは、その人の11の刺激語にみられる特異反応の現れ方によって、特異性

の広さと深さを推測できる可能性があること、が示唆された。

#### 第4節 研究1・2・3の考察

##### 1 研究1・2・3のまとめ

研究1では、SCTの〈家族・家庭〉領域に関する刺激語への反応を時制・対象・評価・構成の4軸の観点から分類し、各分類項目の出現率を求めた。その結果、反応を漏れなく分類し、出現率を算出することが可能であった。また、刺激語によって出現率の現れ方に違いがあり、すべての刺激語に共通して適用できる分析法として、低頻出な項目に焦点を当てる方法が適当であると考えられた。

続いて研究2・3でSCTの〈家族・家庭〉領域の刺激語への反応に反応内容分析・形式分析を適用したところ、全体の傾向として、反応形式では男性の方が女性より反応量や情報量、情報の種類が少なかった。その結果を受けて、統計処理は行わなかったが、反応内容での考察で述べた「男性は女性より簡潔な反応となりやすく、個々の被検査者の特徴が反応に表れにくい」ことも支持される可能性がある。これは、男女の参加者数の違いもあると考えられるが、もしその点が影響していないのなら、〈家族・家庭〉領域では反応の質量ともに男女に違いがみられることになる。例えば、女性の方がもっている家族・家庭イメージが豊富であったり、男性の方が簡潔に表現する傾向にあったり、そのような男女の違いが反応の多様性や量の違いに表れているのではないかと考えられる。精研式ではないが、文章完成法検査の反応は女性の方が有意に文章が長いとの指摘もなされている(Lah, 1989)。SCT分析解釈には男女の違いを考慮したほうがよいことが示唆される。

反応内容分析・形式分析によって抽出された特異反応についてみていくと、反応内容分析では、男女間や刺激語間で想定される特異内容項目に該当する項目の異同から、検出する特異性の異同を、また出現内容項目と特異内容項目のそれぞれの数の関係から、検出する特異性の程度の違いを推察できるのではないかと考えられた。反応形式分析では、特異文字数となりうる範囲であったり、成分数・反応項目数・構成の特異項目の数などから特異性の多様さ、特異性の検出力、また特異性の程度の強弱が推察できるのではないかと考えられた。

特異反応出現の様態からは、〈家族・家庭〉領域全体または1刺激語にみられる特異反応表出者の割合から、その領域全体あるいはその刺激語のもつ特異性の検出力や検出する特異性の程度が推察できると考えられた。また、特異反応を表出する刺激語が同じであるということは、同じ特性をもつ被検査者であるかもしれないこと、反応形式分析では、その被検査者の特異性の広さと深さを推定できる可能性があると考えられた。

##### 2 反応内容分析・反応形式分析の可能性

###### (1) 研究2・3に基づく今後の分析法開発への提案

両分析を用いて反応を分析し、特異反応を抽出した結果、それぞれの特異反応が何を表しているのかを示すことはできない。しかし、それぞれの特異反応が何かしらの特異性を表す

として、特異性の多様さや検出力、特異性の強弱などその刺激語のもつ特徴を推察することが可能であると考えられる。また、非特異反応との比較により、その特異反応がどのように特異であるのかを検討することは、その人のパーソナリティを推測する手掛かりとなりうる。今後は、反応内容・反応形式分析に基づいて標準データを示し、特異反応を示すことが必要となる。

研究 2・3 とともに、カウント方法の特殊さ、男女のサンプル数の少なさや偏りにより、男女の違いについて統計処理をほとんど行わなかった。しかし、反応形式分析の 3 側面の全体平均に統計処理を行ったところ、男女差が認められ、統計処理を行っていない指標にも、性差が存在する可能性が示唆される。全体傾向や特異反応にみられる男女の異同を明らかにすることは、家族・家庭イメージのあり様や SCT 反応分析によって表れる個人特性の男女差、SCT の性質を解明することにつながり、分析・解釈に役立つと考えられる。例えば、男女で共通の特徴を有する場合は、それは刺激語の特性によるものと考えられ、男女で異なる特徴であるならば、それは性差によるものと考えられる。さらに他の刺激語領域を分析し、男女の共通点・相違点が<家族・家庭>領域のみにみられるのか、SCT 全体に通じるものなのかを明確にすることも必要である。よって、反応内容・反応形式共に分析は男女別に行うべきである。

## (2) 今後の課題と展望

研究 2・3 では、参加者数、特に男性の参加者数が少なく、それが特異反応の特定に影響を与えている可能性がある。また、男女の参加者数の違いは、その特異反応の違いが性差によるものか、標本数によるものかを特定しづらくさせている。本章では、特異反応の特定よりも、その抽出や適用の過程を提示することに重きを置いた。今後は、参加者数を増やし、被検査者の反応が特異か否か判断するための、各分析からみた特異反応の標準的特徴を示す必要がある。

特異反応の標準的特徴が明らかになれば、その特異反応が何を表すのかという解釈仮説を検討することができる。さらにいえば、特異反応が何か臨床的な兆候や症状を表すのか、本分析法が臨床実践でのアセスメントにおいて有用なものであるかを検討することにも通じる。その点を検証することは、本分析で用いた反応内容や反応形式の分析手法や特異 - 非特異を弁別する基準が妥当であるのか、といった点にも示唆を与えるものと思われる。

研究 2・3 から、SCT 反応内容分析・形式分析が可能であることは示された。これら分析法が有用となるためには、分析法の精緻化が必要であり、(1)参加者数を増やすこと、(2)男女別に分析を行うこと、の 2 点が求められる。さらに、(3)特異反応が臨床的兆候を表すのかを検証し、臨床的アセスメントとしての適用可能性を探ることも必要である。次章では、これらを考慮した研究を展開する。

### 第3章 自己領域の分析と臨床的アセスメントへの適用可能性の検討

研究2・3から、系統的な反応内容分析・形式分析が可能であることが示された。本研究の目的は、分析対象を〈家族・家庭〉領域から〈自己〉領域の刺激語に対する反応へ移行し、改めて特異反応に着目した系統的な反応分析法を示し、分析方法や特異反応の特徴について考察することである。第3章はさらに、そこで特定された特異反応が臨床的アセスメントにつながる可能性があるのかを検証する。臨床的アセスメントへの適用可能性が示されれば、反応分析法によりアセスメントできる対象が広がり、SCT使用の意義も大きくなると考えられる。

SCTはパーソナリティ検査であり、精神病理を査定することが第一義の検査ではない。しかし、本分析により表出した出現率の低い特異な反応は特異なパーソナリティの表れと推察される。特異なパーソナリティは決して精神的健康の問題とイコールではないが、パーソナリティが特異であるほど、その人の社会適応が難しくなる可能性はある。つまり、精神的健康の問題の一要因に特異なパーソナリティが考えられるのである。また、臨床実践で行う心理アセスメントでは、その人のパーソナリティや知能などの把握と同時に、その人の社会適応や病理性の程度を把握することも必要であり、心理検査にもそれらを推察できることが少なからず求められる。よって、本研究は、臨床的アセスメントへの適用に「精神的健康の問題を検出できること」が必要と考え、特異反応の有無と精神的健康の関連を検証する。

本章で〈自己〉領域を取り上げるのは、その刺激語が60の刺激語のうち約半数を占めているためである。SCT反応の分析にとって、〈自己〉領域が分析可能となることの寄与は大きく、また他領域への指針にもなると考えられる。

まず、それぞれの反応分析法により、特異反応の抽出を行う。その際、研究2・3の所見から、参加者数を増やし、男女別に分析を行い、抽出される特異反応の整理を目指す。研究2・3では、男女の異同だけでなく、刺激語間の違いも解釈に重要な示唆を与えると推察されたが、性別と28の刺激語両方に統計処理を行うと、相当煩雑な結果となり、重要な所見について十分な議論が難しくなる惧れがある。よって、本章の研究では、まずは男女の異同を明確にすることに焦点を当てることとする。そこで得られた所見から、改めて、男女別の分析が必要であるのか、また男女の異同を考慮した各特異反応表出の意味を考察することとする。さらに、特異反応と精神的健康の関連を検証し、反応分析法の今後の発展として、臨床的アセスメントへの適応可能性についても考察を行う。

なお、研究1～3の知見を援用しやすいと考えられるため、引き続き青年期を対象とする。

#### 第1節 研究4：反応内容分析とGHQ28の関連<sup>7</sup>

##### 1 目的

研究4の目的は、〈自己〉領域の刺激語への反応に対し、反応内容分析法を適用し、特異

<sup>7</sup>研究4の内容は、石井 明子 (2016b). SCTの自己に関する反応内容分析の試み 日本ロ

反応がどのようなものか、また改めて男女別の分析が必要であるのかを明確にすることである。さらに、特異反応と精神的健康の関連を調査し、本分析法の臨床的アセスメントとしての適用可能性を検証することである。

まず、SCTの〈自己〉領域への反応に対して、研究2で示された反応内容分析を行い、特異反応の抽出を行う。そして、〈自己〉領域全体を通じた特異反応を表出した刺激語数と精神的健康との関係を検討する。

## 2 方法

### 分析対象

精研式SCT全60の刺激語のうち、〈自己〉に関する28の刺激語を対象とした。

Part Iからは「子供の頃、私は(1)」、「私はよく人から(2)」、「私の失敗(4)」、「私が得意になるのは(6)」、「私が知りたいことは(8)」、「私がきらいなのは(10)」、「私の服(11)」、「私ができないことは(14)」、「私がひそかに(19)」、「時々私は(22)」、「私が心をひかれるのは(23)」、「私の不平は(24)」、「私の顔(27)」、「私が思いだすのは(30)」の14の刺激語を用いた。Part IIからは「私を不安にするのは(2)」、「私はよく(4)」、「もし私が(5)」、「私の眠り(9)」、「私が好きなのは(14)」、「私の頭脳(15)」、「私の野心(17)」、「私の気持(19)」、「私の健康(20)」、「私が残念なのは(21)」、「どうしても私は(25)」、「私が羨ましいのは(27)」、「私が努力しているのは(29)」、「私が忘れられないのは(30)」の14の刺激語を用いた。

### 臨床実践へのアセスメントの適用可能性の検証

本研究では、反応内容分析法の臨床への適用可能性を日本語版精神健康調査票(The General Health Questionnaire) 28項目版(以下、GHQ28)によって検証することとした。GHQ28はGoldbergが1972年に開発したGHQの日本語短縮版(中川・大坊, 1985)であり、精神的健康の程度を測定するものとして、多くの研究で用いられている。質問項目は、“身体的症状”・“不安と不眠”・“社会的活動障害”・“うつ傾向”の4因子各7項目からなっており、1項目1点とし、各因子6点以上を臨床的問題を有する可能性があるとしている。

本研究では、GHQ28各因子で問題を有する可能性を指摘できる人数がかなり少なかったこと(Table 29)と、問題の種類を問わず、まずは精神的健康についての指標となりうるかを検討するため、GHQ28合計得点と28の刺激語で特異反応がみられた刺激語数の相関を検討することとした。

### 参加者

本研究の参加対象は、研究1~3と同様、青年期とした。参加者は18~22歳の男性91名

---

ールシャツハ学会第20回大会プログラム・抄録集, 47. ならびに、石井 明子 (2019). 文章完成法テスト反応内容分析法の有用性の検討—SCT自己領域とGHQ28の関連から— ロールシャツハ法研究, 23, 10-17. の内容を加筆修正したものである。

(平均年齢 19.5 歳,  $SD=1.09$ ), 女性 104 名(平均年齢 19.7 歳,  $SD=1.09$ )の大学生 195 名(平均年齢 19.6 歳,  $SD=1.10$ )であった。学部授業内で参加協力者を募り, 個別に日程を調整後, 集団で実施した。

## 実施方法

実施は, 参加者に検査主旨を説明し, 書面にて同意を得た後, SCT 一式, GHQ28 の順に回答を求めた。最後に, 年齢, 性別, 自宅か下宿か, 家族構成, 自分のこころのことで専門機関に相談をした経験の有無と最後に相談した時期が 2 年以内か以前かを問うシートに回答を求めた。実施期間は 2017 年 1 月~2017 年 7 月であった。

## 分類軸及び分類項目

反応内容分析の分類軸については, 研究 2 と同様とした。

### 1) 時制

時制は研究 2 で用いた<家族・家庭>領域と同様のものが使用可能と考えられ, “過去”, “現在”, “未来”, “時制なし” の 4 項目とした。

### 2) 対象

対象は<家族・家庭>領域とは異なる分類項目が必要であったため, 研究 2 で調査対象者とした 18~19 歳の男女計 52 名(男性 14 名, 女性 38 名, 平均年齢 18.56 歳,  $SD=.50$ )の<自己>領域 28 刺激語への反応を対象の観点から再分類した。分類は, 筆者 1 名で行った。その結果, “自己”, “他者”, “事象”, “その他” の 4 項目に分類され, それらを対象の項目に設定した。

### 3) 評価

評価は研究 2 で用いた<家族・家庭>領域と同様のものが使用可能と考えられ, “肯定”, “中立”, “否定”, “両価”, “不明”, “評価なし” の 6 項目とした。

本研究では, 時制 4 項目・対象 4 項目・評価 6 項目を組み合わせた 96 項目を最終的な分類項目とした。各項目の定義を Table22 に示す。

Table22 自己領域における内容的側面の分類項目の定義  
Definition of categories of content aspects in a field of self

分類軸	分類項目	定義	例
時制	過去	過去の状態や過去の仮定, 願望の記述	～だった／～していた／～だったら ／～したこと／～してほしかった
	現在	現在の状態や過去からの継続, 現在の仮定, 現状への願望の記述	～している／今は～だ／～してきた ／～なら／～してほしい
	未来	未来への想像やこれから起こりうる 出来事, これからの願望・理想の記述	～していきたい／～する(つもり) ／～になりたい／～しなければいけない
	なし	時制の指定のない単語や状況の記述 一般論やそれに対する意見の記述 未記入・連想不能	「私が好きなのは」：運動／読書の時間 「私が得意になるのは」：～している時 「私が知りたいことは」：私自身
対象	自己	自身の属性・内面(性格・思考・志向) ・外見やそれらに対する感想の記述	「子供の頃, 私は」：泣き虫だった。 「私の失敗」：はたくさんある。 「もし私が」：女性だったら, どんな人 だろう。
	他者	特定あるいは不特定の人の属性・内面 ・外見・行動やそれらに対する感想, 自分と他者, 他者同士のやりとりや 関係の記述	「私がきらいなのは」：うそをつく人 「私の眠り」：を邪魔するのはだれ? 「私の頭脳」：はあの人でいっぱい。
	事象	物事, 出来事や状況, 一般論についての 記述	「小さい頃, 私は」：徒競走で一番に なったことがある。 「もし私が」：生まれかわったら 「私が残念なのは」：辛そう人を見た時。
	その他	つなぎ言葉や記述拒否, 不明確な記述, 刺激語そのものへの記述 未記入	「私がひそかに」：思っている事は・・・。 「私の気持」：ち／はここではいえない 「私の野心」：はないが, 強いて言えば
評価	肯定	ポジティブな評価の記述	よい／好き／満足／快適／裕福／尊敬／ 楽しい／幸せ／おだやか
	中立	何かしらの評価の記述だが, 中立なもの 肯定・否定的の判別が困難なもの 肯定・否定を否定したもの	普通／平凡／単純／高い／多い ／楽でない／嫌じゃない／不満はない ／変わっている／大人っぽい
	否定	ネガティブな評価の記述	悪い／貧しい／怖い／心配／困る／不安 ／子ども扱い／痛い／悪いことが多い
	両価	同時制かつ同対象に 肯定・否定ともに記述しているもの	満足しているけれど～が少し不満 ／つらい事もあるけど楽しい
	不明	評価に関して不明や疑問とする記述	わからない／おかしいだろうか
	評価なし	評価自体を行っていない記述 事実, 願望・仮定の記述 未記入	「もし私が」：～になれば, 嬉しい。 「私の健康」：の秘訣は食事。 「私の不平は」：社会。

### 出現数のカウント方法

研究1・2に準じ, 1つの刺激語につき, 文章形式を問わず, 出現数を1とした(Table23)。

その際、意味を成す最小単位で、仮定文の場合は条件節と主節で、それぞれ区切りカウントした。カウントする反応成分が複数となる場合は、合計が1となるように等分した。例えば、「子供の頃、私は『よく外で遊んでいた』」は1成分であり、“過去-自己-評価なし”に1とした。「もし私が『社会人になったら、どんな風だろう』」は2成分であり、『社会人になったら』が“未来-自己-評価なし”に0.5、『どんな風だろう』が“未来-自己-不明”に0.5とした。その後『気になる』とあり、3成分ならば各項目に0.3ずつとした。

Table23 自己領域における内容分析のカウント例  
An example of counting of content analysis in a field of self

刺激語	反応例	該当項目	カウント
子供の頃、私は	<u>よく外で遊んでいた。</u>	過去・自己・評価なし	1.0
私の服	<u>は黒っぽいものが多いと思う</u>	現在・事象・評価なし	1.0
もし私が	<u>社会人になったら、 どんな風だろう。気になる。</u>	未来・自己・評価なし/ 未来・自己・不明/ 未来・自己・評価なし	0.3/0.3/0.3
私の野心	<u>は大した事ない。 野心って必要ないと思う。</u>	現在・事象・中立/ 時制なし・事象・評価なし	0.5/0.5
私が好きなのは	<u>運動。特に球技が好き。</u>	時制なし・事象・評価なし/ 時制なし・事象・肯定	0.5/0.5

注) 下線部はカウント対象部分である。

### 特異内容項目の抽出

刺激語別に算出した各項目の出現率を上位から加算し、累計パーセントが90%を越えた時点で加算されなかった項目すべてを特異内容項目とし、それに当てはまる反応を特異反応とした。本研究も、出現率0.0%の項目については、その項目が膨大になるため、記述が煩雑になること、出現していないものについて議論することが難しいことから、出現率のあるものを扱うこととした。

### 倫理的配慮

実施にあたって参加者に口頭および書面にて研究目的と意義、調査方法、任意協力、資料の取り扱いについて説明し、自由意志での参加と、匿名性の保持について保証し、書面にて同意を得た参加者のみに実施した。なお、本研究は東海学園大学研究倫理審査委員会の承認を経て行われた。

得られたデータは、参加者の秘密保護に十分配慮し、参加者が特定されないことがないよう、氏名を削除し、それぞれ番号を付与することで連結可能匿名化を行った。

## 3 結果

### (1) 出現内容項目の傾向

刺激語別にみると、全 96 項目中、1 刺激語あたり、男性で 9～22 項目(平均 15.2 項目)、女性で 10～26 項目(平均 15.7 項目)に反応が出現した。Table24 に「子供の頃、私は」(I-1)の出現項目数および非出現項目数を示す(その他の刺激語については付録 A 参照)。

Table24 I-1の出現内容項目数  
The number of appeared content items in I-1

		男性	女性
I-1	出現項目数	15	14
	非出現項目数	81	82

$\chi^2$  二乗検定ならびに Bonferroni 補正の結果、1 刺激語あたりの出現内容項目および非出現項目の数に男女差がみられた刺激語はなかった。最多出現項目は、男性で「私が残念なのは(II-21)」(22 項目)、女性で「私を不安にするのは(II-2)」(26 項目)であった。また、最少は、男性で「私が得意になるのは(I-6)」, 「私が努力しているのは(II-29)」の 2 つの刺激語(各 9 項目)、女性で「私が努力しているのは(II-29)」(10 項目)であった。

次に項目別にみると、全 96 項目のうち男女共に 52 項目(54.2%)が 28 の刺激語のいずれかで出現し、1 項目につき、男女共に 0～28 の刺激語(男性: 平均 4.4 語、女性平均: 4.6 語)で出現が認められた。男女共に“現在 - 自己 - 評価なし”, “現在 - 事象 - 評価なし”の 2 項目が最多(28 刺激語)の出現内容項目となった。

## (2) 特異内容項目の傾向

刺激語別にみると、特異内容項目は全 96 項目のうち、1 刺激語あたり、男性で 5～13 項目(平均 8.4 項目)、女性で 6～13 項目(平均 8.4 項目)にみられた。Table25 に「子供の頃、私は」(I-1)の出現特異内容項目の数および非出現特異内容項目の数を示す。(その他の刺激語については付録 B 参照)

Table25 I-1の出現特異内容項目数  
The number of appeared specific content items in I-1

		男性	女性
I-1	出現特異項目数	9	9
	出現非特異項目数	6	5

Fisher の直接確率検定ならびに Bonferroni 補正の結果、1 刺激語あたりの特異内容項目の数および特異とならなかった内容項目の数に男女差が認められた刺激語はなかった。特異内容項目が最も多かったのは、男性で「私が好きなのは(II-14)」(13 項目)、女性で「私を不安にするのは(II-2)」(13 項目)であった。また、最も少なかったのは、男性で「私はよく(II-4)」, 「私が努力しているのは(II-29)」の 2 つの刺激語(各 5 項目)、女性で「時々私は(I-22)」, 「どうしても私は(II-25)」, 「私が羨ましいのは(II-27)」, 「私が努力しているのは

(II-29)」の4つ(各6項目)であった。

項目別にみると、男性で96項目中50項目(52.1%)、女性で49項目(51.0%)が28の刺激語のいずれかで特異内容項目と認められた。男性で特異内容項目となった50項目は、1項目につき1~16の刺激語(平均4.5語)で該当した。女性の49項目は、1項目につき1~15の刺激語(平均4.8語)で該当した。28の刺激語を通して、特異内容項目に該当した刺激語が最も多かった項目は、男性で“現在 - 他者 - 評価なし”(16刺激語)、女性で“現在 - 事象 - 否定”(15刺激語)であった。

### (3) 各参加者の特異反応出現の様態

各参加者の特異反応の有無を刺激語別に調べた(Table27・28)。Table27・28は、各参加者の特異反応を表出した刺激語を○で表した。1刺激語あたり、男性は6~16人(平均11.1人)、女性は9~17人(平均12.8人)に特異反応が認められた。Table26に「子供の頃、私は」(I-1)の特異反応表出人数および非特異反応表出人数を示す。(その他の刺激語については付録C参照)

Table26 I-1の反応内容分析による特異反応表出人数  
The number of people having specific responses by  
content analysis in I-1

		男性	女性
I-1	特異反応表出人数	16	15
	非特異反応表出人数	75	89

$\chi^2$ 二乗検定ならびに Bonferroni 補正の結果、特異反応を表出する人数(および表出しなかった人数)に男女差が認められた刺激語はなかった。特異反応を表出した人数が最も多かった刺激語は、男性で「子供の頃、私は(I-1)」(16人, 17.6%)、女性で「私の服(I-11)」(17人, 16.3%)であった。最も少なかった刺激語は、男性で「私の頭脳(II-15)」(6人, 6.6%)、女性で「どうしても私は(II-25)」, 「私が忘れられないのは(II-30)」の2つ(各9人, 8.7%)であった。

また、参加者別にみると、男性では91人中85人(93.4%)、女性では104人中98人(94.2%)に28の刺激語のいずれかで特異反応がみられた。特異反応総数は、男性で0~14(平均3.4)、女性で0~13(平均3.5)であった。Mann-WhitneyのU検定を行った結果、特異反応総数に男女差は認められなかった( $U=4707.0$ ,  $p=.949$ )。特異反応を表出した参加者に限定すると、男女共に平均3.7の刺激語で特異反応がみられた。

Table27 男性参加者の特異反応  
Specific responses for individual male subjects

Sub	Part I														Part II														特異反応 総数
	1	2	4	6	8	10	11	14	19	22	23	24	27	30	2	4	5	9	14	15	17	19	20	21	25	27	29	30	
1								○				○																	2
2																										○			2
3																													2
4	○																												5
5				○																									1
6	○							○	○	○																			9
7	○	○	○					○	○	○																			10
8		○																											4
9																													2
10	○	○																											5
11			○																										7
12	○	○																											5
14																													2
15																													7
17	○																												4
18	○	○																											7
19		○																											5
20	○																												2
21																													1
22		○	○	○																									4
23																													4
24																													1
25																													2
26			○																										2
27																													6
28																													1
29			○																										4
30																													1
31																													2
32																													6
33																													3
34																													5
35																													5
36																													7
37	○																												3
38	○	○		○																									8
39																													1
40																													1
41																													2
42	○	○																											6
43		○	○																										3
44																													4
45																													2
46																													2
47																													1
48																													3
49		○																											3
50																													1







#### (4) GHQ28 との関連

GHQ28 の合計得点平均, “身体的症状”・“不安と不眠”・“社会的活動障害”・“うつ傾向”の各因子得点平均, 各因子得点が 6 点以上となった者の人数(以下, 高得点群)(Table29), および被検査者が 28 の刺激語を通して特異反応を表出した刺激語の数つまり, 特異反応総数と GHQ28 合計得点の関連を調べた。Mann-Whitney の  $U$  検定の結果, GHQ 合計得点に男女差が認められた( $U=5650.0, p=.019$ )。

Table29 GHQ28の平均得点および高得点群の人数  
Mean of GHQ28 each score and the number of high score groups

	GHQ28 平均得点( $SD$ )					高得点群人数(%)			
	合計	身体的 症状	不安と 不眠	社会的 活動障害	うつ傾向	身体的 症状	不安と 不眠	社会的 活動障害	うつ傾向
男性	7.07 (5.05)	2.66 (2.05)	2.23 (1.75)	1.30 (1.35)	0.88 (1.53)	9 (9.9)	3 (3.3)	2 (2.2)	4 (4.4)
女性	9.07 (5.88)	2.97 (1.98)	3.13 (2.22)	1.49 (1.45)	1.47 (1.91)	9 (8.7)	20 (19.2)	1 (1.0)	4 (3.8)

特異反応総数と GHQ28 合計得点の関連について Spearman の相関係数を求めたところ, 男性は関連がみられず( $r=.188, p=.074$ ), 女性は特異反応が多いほど, GHQ28 合計得点が高かった( $r=.226, p=.021$ )。

#### 4 考察

本研究は, SCT の<自己>に関する 28 の刺激語への反応を時制 4 項目, 対象 4 項目, 評価 6 項目を組み合わせた全 96 項目に分類し, その出現率から, 特異な反応を抽出した。そして, 抽出された特異反応と精神的健康との関連について調査した。

##### (1) 全体傾向と特異内容項目

全刺激語で 1 刺激語あたりの出現内容項目数および特異内容項目数に男女差はみられず, 刺激語によりそれらの数が異なるのは, 各刺激語の特性によるものといえる。本研究では各刺激語の特徴を捉えるため, “「私が努力しているのは(II-29)」は男女共に特異内容項目数が最少である”など, 出現内容項目数と特異内容項目数が最多・最少となった刺激語が特定された。今回は男女差の有無を確認することを優先したため, 刺激語間については統計処理を行っていないが, 「私が努力しているのは(II-29)」にみられるような出現内容項目も特異内容項目も共に少ない場合, その刺激語は被検査者に多様な連想をさせず, さらに多様な特異性を反映しない特性を持つと考えられる。いずれにせよ, 特異内容項目数の少ない刺激語で特異反応を表出することは, かなり強く限定的な特異性をもつと推察される。反対に, 特異内容項目数の多い刺激語は, 被検査者の多様な特異性を検出し, さらにいえば特異性を検出しやすい可能性もあり, 検出しやすいがゆえにそれぞれ検出される被検査者の特異性は相対的に強くないと推察される。

それぞれ最多, または最少出現内容項目数・特異項目数となったそれぞれの刺激語の関係

をみると、必ずしも出現項目が多い（少ない）からといって、特異項目も多い（少ない）わけではない、つまり出現項目と特異項目の数が比例しない場合もありうる と推察される。単純に出現する反応が多様であるため、それに比例して特異反応も多様となったと考えられる刺激語もある。しかし、反応は多様であるのに表出する特異反応は限定されている刺激語、表出する反応の種類は多くないのに特異反応は多様な刺激語があり、特異反応の多様性を決定する要因は単純に出現内容項目の数（多様性）だけではないことがわかる。

各刺激語の男女差がみられなかったので 28 語通した全体の統計処理は行わなかったが、28 の刺激語を通して分類項目全 96 項目中の出現内容項目数、および特異内容項目数を算出した。これらはそれぞれ＜自己＞領域が表す特性の多様さ、特異性の多様さと考えられる。また、＜自己＞領域を通して、最も出現した、あるいはしなかった項目は、それぞれ＜自己＞領域で最も現れやすい特性、現れにくい特性を反映するものと考えられる。特異反応についても、それぞれ最も特異反応に該当した項目、しなかった項目は、最も検出しやすい特異性、検出しにくい特異性を反映していると考えられる。項目は全 96 項目にわたるため、項目間の男女比較は結果も煩雑になると考え、本研究ではこの点について統計処理を行わなかったが、男女で最も出現する・しない項目、特異項目に該当する項目・しない項目が異なる場合、＜自己＞領域全体で検出しやすい（しづらい）特性、特異性が異なる、あるいは同じ特性や特異性が別の項目で表されると推察される。

## (2) 各参加者の特異反応出現の様態

1 刺激語あたりの特異反応を表出した人数をみると、男女差が認められた刺激語はなかった。また、各刺激語に差がみられなかったので 28 の刺激語全体には統計処理を行わなかったが、28 の刺激語を通して特異反応を 1 つでも表出した人数も男女でほぼ同じような比率であった。特異反応を表出した人数は、その人数が多ければ、特異性を検出しやすいが、その検出される特異性は弱く、人数が少なければ、特異性を検出しづらいが、その特異性は強いと考えられる。本研究の結果からは、各刺激語で検出される特異性の程度は男女で同等であると考えられ、＜自己＞領域を通して検出する特異性の程度も男女で同等なのではないかと推察される。

また、特異反応総数に男女差はみられなかった。特異反応総数とは、その人の特異反応の記述のしやすさ、つまり、特異性の表しやすさと考えられ、その点に男女差はないと考えられる。

## (3) GHQ28 との関連

＜自己＞領域全体の特異反応総数と GHQ28 合計得点の関係を調べたところ、男性では認められなかったが、女性は特異反応総数が多いほど、GHQ28 合計得点が高い、つまり精神的健康度が低かった。＜自己＞領域全体を通じた特異反応表出人数は男女で同比率であったため、特異反応は男女で同等の特異性を検出していると推察される。それにもかかわらず、特異反応の数は女性では広く精神的健康の程度を表すが、男性ではそのような所見がみられな

かった。GHQ28 合計得点に男女差があり、男性では精神的健康の水準が女性より高く、特異反応と精神的健康の関連が認められるほどの水準に至らなかったか、そもそも男女で特異反応総数の表すものが異なっている可能性が考えられる。

## 第2節 研究5：反応形式分析とGHQ28の関連<sup>8</sup>

研究5の目的は、＜自己＞領域の刺激語に対する反応を対象に、参加者数の増加と実施方法の統一の上で反応形式分析による特異反応抽出の過程を示し、より精緻化された特異反応をもってその特徴を考察することである。また、反応形式分析法の臨床的アセスメントへの適用可能性を探ることである。

なお、研究5で扱う形式的側面は4側面あるため、特異反応の抽出を研究5-1、GHQ28との関連を研究5-2に分けて記載する。

### 研究5-1 特異反応の抽出

#### 1 目的

本研究は、SCTの＜自己＞領域への反応に対して、研究3で示された反応形式分析を行い、特異反応の抽出を行う。その際、男女別に分析を行い、特異反応の特徴が男女で異なるのか、男女別の分析が必要か否かを検討する。

#### 2 方法

##### 分析対象

精研式SCT全60の刺激語のうち、研究4と同様、＜自己＞に関する28の刺激語を対象とした。

##### 参加者

本研究の参加対象は、これまでと同様、青年期とした。参加者は研究4と同一の、18～22歳の男性91名(平均年齢19.5歳、 $SD=1.09$ )、女性104名(平均年齢19.7歳、 $SD=1.09$ )の大学生195名(平均年齢19.6歳、 $SD=1.10$ )であった。学部授業内で参加協力者を募り、個別に日程を調整後、集団で実施した。

##### 実施方法

実施は、参加者に検査主旨を説明し、書面にて同意を得た後、SCT一式、GHQ28の順に回答を求めた。最後に、年齢、性別、自宅か下宿か、家族構成、自分のこころのことで専門機関に相談をした経験の有無と最後に相談した時期が2年以内か以前かを問うシートに回答を求めた。実施期間は2017年1月～2017年7月であった。

<sup>8</sup> 研究5の一部(文字数)に関しては、石井 明子(投稿中)文章完成法テスト文字数における分析法の有用性の検討を加筆修正したものである。

## 分析側面

研究3に準じ、反応形式として、反応の長さ（文字数）・情報量（成分数）・情報の種類（内容項目数）・反応構成（構成）の4側面ごとに、各刺激語の特異反応を男女別に抽出した。反応内容分析と異なり、形式分析は各側面を組み合わせることが困難であるため、また各側面を分析対象とすべきかを判断するため、それぞれの側面を独立に扱うこととした。各被検査者の反応によって、文字数や成分数、項目数、構成の各側面の特異反応の抽出方法も研究3に準じた。＜自己＞領域の反応例を記載した構成の定義をTable30に示す。

Table30 自己領域における「構成」の分類項目の定義  
The definition of "construction" in a field of self

分類項目	定義	例
単一構成	反応が単一の構成であるもの	「私の服」：は黒が多い
補足	内容を補う表現が入っているもの	～だから～／～が原因だ
部分否定	ある評価を行った後、同一対象の一部に別の評価を行ったもの	「私はよく人から」：楽しい人だけど、時々うるさいといわれる
転換	性質や傾向の全く異なる記述がなされているもの	「私はよく」：泣く。このテストで何がわかるんだろう
並列	ある対象に同じ評価を繰り返したもの	楽しいし、好き／悪くて、困る
対比	複数の対象に同一時制、または同一対象に複数時制で、逆の評価であるもの	「子供の頃、私は」：野菜が嫌いだったけど、今は好き
展開	前の内容を踏まえて、発展した内容やその感想を後に記述したもの	「もし私が」：女性だったら、どんな人だろう。
その他	上記の分類項目に入らないもの 無反応	反復(好き。とにかく好き)／並列が難しいもの(「私の失敗」：はいつも大きくて困る)／融合

例えば、「子どもの頃、私は『よく遊んでいた。』」であれば、文字数が9、成分数が『よく遊んでいた』で1となる。また、内容項目数は“過去 - 自己 - 評価なし”の1種類で1、構成は“単一構成”となる。「もし私が『社会人になったら、どんな風だろう。気になる。』」であれば、文字数が20、成分数が『社会人になったら』『どんな風だろう』『気になる』で3、内容項目数が“未来 - 自己 - 評価なし（『社会人になったら』『気になる』）”と“未来 - 自己 - 不明（『どんな風だろう』）”の2種類で2、構成はそれぞれの成分を“展開”“展開”とつないでいるので、“展開”に各0.5、計1となる。カウント例をTable31に示す。

Table31 自己領域における形式分析のカウント例  
An example of counting of formal analysis in a field of self

刺激語	反応例	文字数	成分数	項目数	構成	
					分類項目	カウント数
子供の頃、私はよく外で遊んでいた。		9	1	1	単一構成	1
私の眼	は黒っぽいものが多いと思う	13	1	1	単一構成	1
もし私が	社会人になったら、 どんな風だろう。気になる。	20	3	2	展開 展開	0.5 0.5
私の野心	は大した事ない。 野心って必要ないと思う。	18	2	2	展開	1
私が好きなのは	運動。特に球技が好き。 走るのも好き。	9	3	2	展開 並列	0.5 0.5

注) 下線部は反応成分である。

### 倫理的配慮

実施にあたって参加者に口頭および書面にて研究目的と意義、調査方法、任意協力、資料の取り扱いについて説明し、自由意志での参加と、匿名性の保持について保証し、書面にて同意を得た参加者のみに実施した。なお、本研究は東海学園大学研究倫理審査委員会の承認を経て行われた。

得られたデータは、参加者の秘密保護に十分配慮し、参加者が特定されないことがないように、氏名を削除し、それぞれ番号を付与することで連結可能匿名化を行った。

### 3 結果

文字数・成分数・内容項目数の平均を Table32 に示す。

Table32 平均文字数・成分数・項目数  
Mean number of letters, components and categories

	文字数		成分数		項目数	
	男性	女性	男性	女性	男性	女性
I-1 子供の頃, 私は	19.6	19.8	1.8	1.9	1.5	1.4
I-2 私はよく人から	18.6	19.4	1.6	1.8	1.4	1.5
I-4 私の失敗	21.5	21.8	1.6	1.7	1.3	1.3
I-6 私が得意になるのは	15.3	14.5	1.4	1.5	1.2	1.3
I-8 私が知りたいことは	16.8	17.1	1.5	1.6	1.2	1.3
I-10 私がきらいなのは	13.9	16.8	1.6	1.9	1.3	1.4
I-11 私の服	17.3	18.2	1.7	1.8	1.3	1.4
I-14 私ができないことは	14.8	15.1	1.6	1.7	1.4	1.4
I-19 私がひそかに	18.5	19.5	1.3	1.3	1.2	1.2
I-22 時々私は	15.7	17.2	1.4	1.6	1.2	1.2
I-23 私が心をひかれるのは	14.7	16.1	1.5	1.8	1.3	1.4
I-24 私の不平は	11.4	10.4	1.2	1.1	1.2	1.2
I-27 私の顔	14.6	14.3	1.5	1.6	1.3	1.4
I-30 私が思いだすのは	14.2	14.2	1.5	1.3	1.3	1.2
II-2 私を不安にするのは	13.0	13.5	1.4	1.5	1.2	1.3
II-4 私はよく	12.7	14.1	1.4	1.6	1.2	1.2
II-5 もし私が	20.3	21.1	2.0	2.2	1.5	1.6
II-9 私の眠り	12.7	14.3	1.5	1.8	1.3	1.5
II-14 私が好きなのは	12.9	14.7	1.7	1.9	1.3	1.3
II-15 私の頭脳	15.1	14.7	1.4	1.5	1.3	1.3
II-17 私の野心	12.0	11.3	1.3	1.2	1.1	1.1
II-19 私の気持	13.8	15.7	1.3	1.4	1.1	1.2
II-20 私の健康	14.4	15.1	1.5	1.4	1.2	1.3
II-21 私が残念なのは	16.4	14.1	1.3	1.2	1.1	1.1
II-25 どうしても私は	13.1	14.1	1.3	1.4	1.1	1.2
II-27 私が羨ましいのは	14.6	15.4	1.4	1.7	1.2	1.3
II-29 私が努力してるのは	12.1	12.4	1.3	1.4	1.2	1.2
II-30 私が忘れられないのは	13.0	14.3	1.3	1.3	1.1	1.1
平均	15.1	15.7n.s.	1.5	1.6n.s.	1.3	1.3n.s.
SD	2.2	2.2	0.2	0.3	0.1	0.1

注) 統計結果は男女の全体平均に対する結果である。

## (1) 各形式的側面の全体傾向と特異形式の傾向

### 1) 文字数(Figure5)

平均文字数は1刺激語あたり、男性で11.4~21.5文字(全体平均15.1文字)、女性は10.4~21.8文字(全体平均15.7文字)であった。Mann-WhitneyのU検定を行った結果、全体平均に男女で有意差は認められなかった( $U=4979.5, p=.529$ )。また、刺激語別でも、Bonferroni補正の結果、男女で有意差は認められなかった。最も平均文字数が多かったのは、男女共に「私の失敗(I-4)」(男性:21.5文字、女性:21.8文字)であった。最少は、男女共に「私の不平は(I-24)」(男性:11.4文字、女性:10.3文字)であった。

特異文字数については、28の刺激語を通して、過少文字は男性で18の刺激語、女性で12の刺激語、過多文字は男女共に28の刺激語全てにみられた。平均と平均から最も近い特異文

字数までは1刺激語あたり，男性で10.0～18.5文字(平均13.8文字)，女性で11.7～21.8文字(平均15.8文字)であった。その文字数が最多だったのは，男性で「私がひそかに(I-19)」(18.5文字)，女性で「私の失敗(I-4)」(21.8文字)，最少は男性で「私が忘れられないのは(II-30)」(10.0文字)，女性で「私の眠り(II-9)」(11.7文字)であった。

過少文字は1刺激語あたり，男性で0.0～4.5文字(全体平均0.8文字)，女性で0.0～2.5文字(全体平均0.4文字)，平均過少文字数が最大だったのは，男性で「私はよく人から(I-2)」(4.5文字)，女性で「もし私が(II-5)」と「私が羨ましいのは(II-27)」の2つの刺激語(各2.5文字)であった。最小は，男性で「私の失敗(I-4)」，「私の顔(I-27)」，「私を不安にするのは(II-2)」など11の刺激語(各0文字)，女性で「私の失敗(I-4)」，「私の顔(I-27)」，「私の眠り(II-9)」など10の刺激語(各0文字)であった。過多文字は1刺激語あたり，男性で25.9～47.6文字(全体平均35.3文字)，女性で32.1～50.4文字(全体平均38.8文字)であった。平均過多文字数が最大だったのは，男女共に「私の失敗(I-4)」(男性：47.6文字，女性：50.4文字)，最小は男女共に「私が努力しているのは(II-29)」(男性：25.9文字，女性：32.1文字)であった。

過少文字の範囲は男性で0～5文字(平均0.5文字)，女性で0～7文字(平均0.7文字)であり，範囲が最大となったのは，男女共に「もし私が(II-5)」(男性：5文字，女性7文字)であった。最小となったのは，男性で「私の失敗(I-4)」，「私の顔(I-27)」，「私を不安にするのは(II-2)」など14の刺激語で1文字のみが過少文字，女性で「子供の頃，私は(I-1)」，「私の顔(I-27)」，「私の眠り(II-9)」など10の刺激語で1文字数のみが過少文字であった。過多文字の範囲は男性で4～37文字(平均18.4文字)，女性で7～37文字(平均19.6文字)であった。最大範囲だったのは，男性で「私が好きなのは(II-14)」(37文字)，女性で「時々私は(I-22)」(37文字)，最小範囲だったのは，男性で「私が努力しているのは(II-29)」(4文字)，女性で「どうしても私は(II-25)」(7文字)であった。過少・過多文字それぞれの最小・最大文字数の平均から算出した範囲は，過少文字では，男性が0.6～1.1文字，女性が0.2～0.8文字，過多文字では，男性が29.1～47.5文字，女性が31.7～51.5文字であった。

各特異文字と非特異文字間の差を検討したところ，過少・非特異文字間は，男女共に1～6文字差(男性：平均2.5文字差，女性：平均2.8文字差)であり，差が最大となったのは男女共に「私の失敗(I-4)」(6文字差)であり，最小となったのは男性で「私はよく人から(I-2)」，「私を不安にするのは(II-2)」，「私の気持(II-19)」，「私が羨ましいのは(II-27)」，「私が努力しているのは(II-29)」の5つの刺激語(各1文字差)，女性で「私がきらいなのは(I-10)」，「もし私が(II-5)」，「私が羨ましいのは(II-27)」の3つの刺激語(各1文字差)であった。非特異・過多文字間は，男性は1～4文字差(平均1.5文字差)，女性は1～5文字差(平均1.7文字差)であった。最大差となったのは，男性で「私が好きなのは(II-14)」(4文字差)，女性で「私の失敗(I-4)」，「もし私が(II-5)」の2つの刺激語(各5文字差)であった。最小は男性で「子供の頃，私は(I-1)」，「私を不安にするのは(II-2)」など18の刺激語(各1文字差)，女性で「私はよく人から(I-2)」，「私を不安にするのは(II-2)」など15の刺激語(各1文字差)であった。

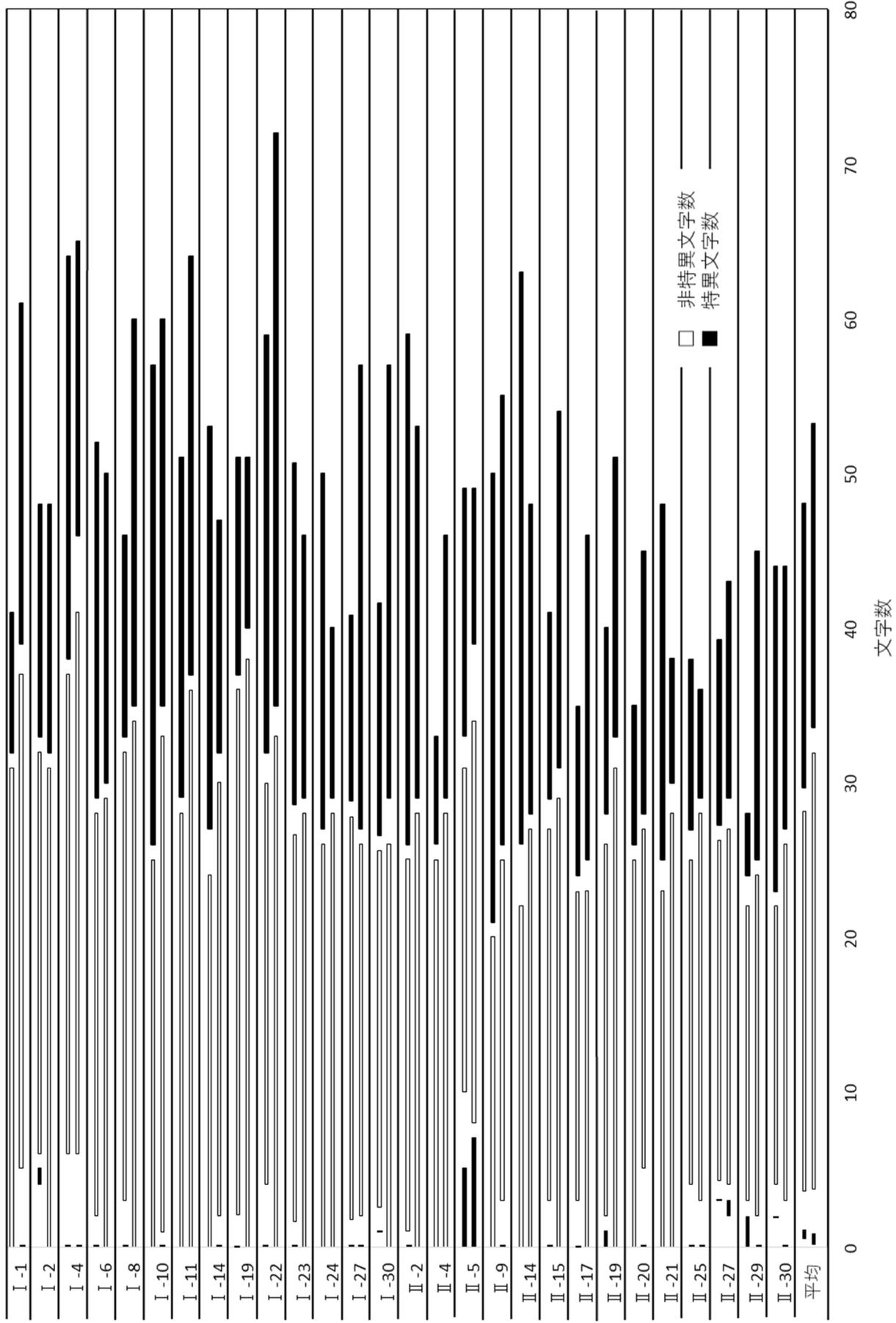


Figure5 各文字数の範囲  
Range of each number of letter

注) 上段は男性( $n=91$ ), 下段は女性( $n=104$ )。  
 特異文字数は平均からの差の大きい過少文字数・過多文字数を指す。  
 非特異文字数は過少・過多文字に該当しない文字数を指す。

## 2) 成分数(Table33・34)

28の刺激語を通して、男性は成分数0～6と8、女性は成分数0～7に反応が出現した。1刺激語あたりの平均成分数は、男性が1.2～2.0(全体平均1.5)、女性が1.1～2.2(全体平均1.6)であった。Mann-WhitneyのU検定を行った結果、全体平均に男女で有意差は認められなかった( $U=5283.0$ ,  $p=0.161$ )。刺激語別でも、Bonferroni補正の結果、男女で有意差が認められた刺激語はなかった。平均出現成分数が最も大きかったのは、男女共に「もし私が(Ⅱ-5)」(男性：平均2.0, 女性：平均2.2)であった。最も小さかったのは、男女共に「私の不平は(Ⅰ-24)」(男性：平均1.2, 女性：平均1.1)であった。最も多くの成分数に反応が出現したのは、男性で「私が心をひかれるのは(Ⅰ-23)」, 「私の顔(Ⅰ-27)」, 「私が好きなのは(Ⅱ-14)」の3つの刺激語で6つの成分数、女性で「私がきらいなのは(Ⅰ-10)」, 「私の服(Ⅰ-11)」, 「時々私は(Ⅰ-22)」, 「私の眠り(Ⅱ-9)」の4つの刺激語で7つの成分数に反応がみられた。最も少なかったのは、男性で「私が残念なのは(Ⅱ-21)」で3つ、女性で「子供の頃、私は(Ⅰ-1)」, 「私が残念なのは(Ⅱ-21)」など15の刺激語で5つであった。

成分数ごとにみると、それぞれの成分数は男性で1～28の刺激語(平均16.3語)、女性で3～28の刺激語(平均19.6語)で出現した。最も多くの刺激語でみられた成分数は男女共に成分数1・2・3(28刺激語), であった。最も少なかったのは男性で成分数8(1刺激語), 女性で成分数7(3刺激語)であった。

特異成分数は、刺激語別にみると、男女共に28の刺激語全てに認められた。特異成分数は1刺激語あたり、男性で1～3つ、女性で1～4つの成分数にみられた。最も多くの成分数が特異成分数となったのは、男性で「私がひそかに(Ⅰ-19)」, 「時々私は(Ⅰ-22)」, 「私が好きなのは(Ⅱ-14)」など8つの刺激語(各3つ), 女性で「私がきらいなのは(Ⅰ-10)」, 「私の服(Ⅰ-11)」, 「時々私は(Ⅰ-22)」, 「私の眠り(Ⅱ-9)」の4つの刺激語(各4つ)であった。最も少なかったのは男性で「子供の頃、私は(Ⅰ-1)」, 「私の野心(Ⅱ-17)」, 「私の健康(Ⅱ-20)」, 「私が残念なのは(Ⅱ-21)」の4つの刺激語, 女性で「私がひそかに(Ⅰ-19)」で、それぞれ1つであった。

成分数別にみると、男性は成分数1・2, 女性は成分数2をそれぞれ除いて、28の刺激語のいずれかで特異成分数に該当した。最も特異成分数に該当したのは、男女共に成分数4(男性：20刺激語, 女性：24刺激語)であった。特異成分数がみられた中では、男性は成分数8(1刺激語), 女性は成分数1(1刺激語)が最も特異となる刺激語が少なかった。

Table33 男性の各成分数の出現率  
Male appearance rate of the number of items

	0	1	2	3	4	5	6	7	8
I -1 子供の頃、私は		44.0	36.3	13.2	<u>6.6</u>				
I -2 私はよく人から		51.6	38.5	<u>7.7</u>	<u>2.2</u>				
I -4 私の失敗	<u>1.1</u>	51.6	30.8	15.4		<u>1.1</u>			
I -6 私が得意になるのは	<u>1.1</u>	67.0	20.9	8.8	<u>2.2</u>				
I -8 私が知りたいことは	<u>1.1</u>	64.8	23.1	9.9	<u>1.1</u>				
I -10私がきらいなのは		61.5	22.0	12.1	<u>3.3</u>	<u>1.1</u>			
I -11私の服		52.7	34.1	8.8	<u>3.3</u>		<u>1.1</u>		
I -14私ができないことは		57.1	29.7	11.0	<u>1.1</u>		<u>1.1</u>		
I -19私がひそかに	<u>3.3</u>	71.4	18.7	<u>3.3</u>	<u>3.3</u>				
I -22時々私は	<u>1.1</u>	64.8	29.7	<u>4.4</u>					
I -23私が心をひかれるのは	<u>1.1</u>	58.2	29.7	7.7	<u>2.2</u>	<u>1.1</u>			
I -24私の不平は	12.1	65.9	13.2	<u>6.6</u>	<u>2.2</u>				
I -27私の顔	<u>1.1</u>	62.6	22.0	12.1	<u>1.1</u>	<u>1.1</u>			
I -30私が思いだすのは		67.0	23.1	<u>6.6</u>	<u>3.3</u>				
II -2 私を不安にするのは	<u>1.1</u>	70.3	19.8	<u>7.7</u>					<u>1.1</u>
II -4 私はよく		68.1	23.1	<u>6.6</u>	<u>2.2</u>				
II -5 もし私が	<u>2.2</u>	11.0	71.4	13.2	<u>2.2</u>				
II -9 私の眠り		61.5	28.6	<u>7.7</u>	<u>1.1</u>	<u>1.1</u>			
II -14私が好きなのは	<u>1.1</u>	49.5	34.1	8.8	<u>5.5</u>	<u>1.1</u>			
II -15私の頭脳	<u>1.1</u>	60.4	34.1	<u>4.4</u>					
II -17私の野心	<u>2.2</u>	73.6	15.4	8.8					
II -19私の気持	<u>2.2</u>	74.7	18.7	<u>3.3</u>	<u>1.1</u>				
II -20私の健康		70.3	16.5	8.8	<u>4.4</u>				
II -21私が残念なのは		75.8	20.9	<u>3.3</u>					
II -25どうしても私は	<u>2.2</u>	73.6	16.5	<u>5.5</u>	<u>2.2</u>				
II -27私が羨ましいのは		69.2	20.9	<u>8.8</u>		<u>1.1</u>			
II -29私が努力してるのは	<u>1.1</u>	69.2	25.3	<u>4.4</u>					
II -30私が忘れられないのは		76.9	19.8	<u>2.2</u>	<u>1.1</u>				
特異成分数該当刺激語数	15	0	0	15	20	7	2	0	1

注) 表中の数値は%である。

下線のある数値は特異成分数である。

Table34 女性の各成分数の出現率  
Female appearance rate of the number of items

	0	1	2	3	4	5	6	7
I-1 子供の頃、私は	<u>1.0</u>	41.3	31.7	21.2	<u>4.8</u>			
I-2 私はよく人から		50.0	32.7	10.6	<u>5.8</u>	<u>1.0</u>		
I-4 私の失敗	<u>1.0</u>	54.8	24.0	15.4	<u>3.8</u>		<u>1.0</u>	
I-6 私が得意になるのは	<u>4.8</u>	60.6	19.2	12.5	<u>1.9</u>	<u>1.0</u>		
I-8 私が知りたいことは	<u>2.9</u>	51.9	28.8	14.4		<u>1.0</u>	<u>1.0</u>	
I-10私がきれいなのは	<u>1.0</u>	46.2	26.9	18.3	<u>4.8</u>	<u>1.9</u>	<u>1.0</u>	
I-11私の服	<u>1.0</u>	52.9	26.9	10.6	<u>5.8</u>	<u>1.9</u>		<u>1.0</u>
I-14私ができないことは	<u>1.0</u>	53.8	27.9	11.5	<u>3.8</u>	<u>1.9</u>		
I-19私がひそかに	5.8	65.4	22.1	5.8		<u>1.0</u>		
I-22時々私は	<u>4.8</u>	52.9	28.8	9.6	<u>1.9</u>	<u>1.0</u>		<u>1.0</u>
I-23私が心をひかれるのは		51.0	26.9	14.4	<u>4.8</u>	<u>1.9</u>	<u>1.0</u>	
I-24私の不平は	15.4	63.5	18.3	<u>1.9</u>	<u>1.0</u>			
I-27私の顔	<u>1.9</u>	59.6	26.9	5.8	<u>4.8</u>			<u>1.0</u>
I-30私が思いだすのは	<u>3.8</u>	70.2	17.3	4.8	<u>3.8</u>			
II-2 私を不安にするのは	<u>1.9</u>	64.4	21.2	10.6		<u>1.9</u>		
II-4 私はよく	<u>1.9</u>	53.8	27.9	14.4	<u>1.9</u>			
II-5 もし私が	<u>2.9</u>	<u>2.9</u>	74.0	16.3	<u>3.8</u>			
II-9 私の眠り	<u>1.0</u>	45.2	33.7	12.5	<u>3.8</u>	<u>2.9</u>	<u>1.0</u>	
II-14私が好きなのは		45.2	33.7	10.6	5.8	<u>2.9</u>	<u>1.9</u>	
II-15私の頭脳	<u>5.8</u>	58.7	22.1	10.6	<u>1.9</u>	<u>1.0</u>		
II-17私の野心	10.6	64.4	22.1	<u>1.9</u>	<u>1.0</u>			
II-19私の気持	<u>3.8</u>	62.5	26.0	6.7	<u>1.0</u>			
II-20私の健康	<u>1.9</u>	67.3	22.1	5.8	<u>2.9</u>			
II-21私が残念なのは	10.6	65.4	21.2	<u>1.0</u>	<u>1.9</u>			
II-25どうしても私は	<u>1.9</u>	66.3	21.2	9.6	<u>1.0</u>			
II-27私が羨ましいのは		57.7	21.2	19.2	<u>1.0</u>	<u>1.0</u>		
II-29私が努力してるのは	<u>1.9</u>	70.2	18.3	5.8	<u>2.9</u>	<u>1.0</u>		
II-30私が忘れられないのは	<u>1.0</u>	74.0	19.2	<u>4.8</u>	<u>1.0</u>			
特異成分数該当刺激語数	20	1	0	3	24	15	6	3

注) 表中の数値は%である。

下線のある数値は特異成分数である。

### 3) 内容項目数(Table35)

28の刺激語を通して、男性で項目数1~4、女性で項目数1~5に反応が出現した。1刺激語あたりの平均出現項目数は男性が1.1~1.5(全体平均1.3)、女性が1.1~1.6(全体平均1.3)であった。Mann-WhitneyのU検定を行った結果、全体平均に男女で有意差は認められなかった( $U=5250.0$ ,  $p=0.187$ )。刺激語別でも、Bonferroni補正の結果、男女で有意差が認められた刺激語はなかった。平均出現項目数が最も大きかったのは男女共に「もし私が(II-5)」(男性:1.5, 女性:1.6)であった。最も小さかったのは、男性で「私の野心(II-17)」, 「私の気持(II-19)」, 「私が残念なのは(II-21)」, 「どうしても私は(II-25)」, 「私が忘れられないのは(II-30)」の5つの刺激語(各1.1), 女性で「私の野心(II-17)」, 「私が残念なのは(II-21)」, 「私が忘れられないのは(II-30)」の3つの刺激語(各1.1)であった。最も多くの項目数に反応が出現したのは、男性で「子供の頃、私は(I-1)」, 「私の失敗(I-4)」, 「私がきらいなのは(I-10)」, 「私ができないことは(I-14)」, 「私を不安にするのは(II-2)」, 「私の気持(II-19)」の6つの刺激語, 女性で「子供の頃、私は(I-1)」, 「私はよく人から(I-2)」, 「私の失敗(I-4)」, 「私ができないことは(I-14)」, 「時々私は(I-22)」, 「私の顔(I-27)」, 「私が思いだすのは(I-30)」の7つの刺激語で、それぞれ4つの項目数に反応がみられた。反応の出現した項目数が最も少なかったのは、男性で「私が残念なのは(II-21)」, 女性で「私はよく(II-4)」, 「私が残念なのは(II-21)」の2つの刺激語で、それぞれ2つであった。

項目数ごとにみると、それぞれの項目数は男性で6~28の刺激語(平均22.3語), 女性で1~28の刺激語(平均17.8語)で出現した。最も多くの刺激語でみられた項目数は男女共に項目数1・2(28刺激語)であった。最も少なかったのは男性で項目数4(6刺激語), 女性で項目数5(1刺激語)であった。

特異項目数は刺激語別にみると、男性で27の刺激語, 女性で26の刺激語に認められ、男性は「私が残念なのは(II-21)」, 女性は「私はよく(II-4)」と「私が残念なのは(II-21)」で認められなかった。特異項目数が認められた刺激語に限定すると、1刺激語あたり、男性で1~3つ, 女性で1~2つの項目数が特異となった。

項目数別にみると、男性は項目数2・3・4, 女性は項目数3・4・5が特異項目数に該当した。男性は項目数2が2つの刺激語, 項目数3が27の刺激語, 項目数4が6つの刺激語で特異項目数であった。女性は項目数3が25の刺激語, 項目数4が7つの刺激語, 項目数5が1つの刺激語で特異項目数であった。

Table35 各項目数の出現率  
Appearance rate of the number of categories

	項目数(男性 $n=91$ )				項目数(女性 $n=104$ )				
	1	2	3	4	1	2	3	4	5
I-1 子供の頃, 私は	60.4	30.8	<u>7.7</u>	<u>1.1</u>	65.4	28.8	<u>4.8</u>	<u>1.0</u>	
I-2 私はよく人から	63.7	31.9	<u>4.4</u>		64.4	26.0	<u>7.7</u>	<u>1.9</u>	
I-4 私の失敗	76.9	19.8	<u>2.2</u>	<u>1.1</u>	75.0	18.3	<u>5.8</u>	<u>1.0</u>	
I-6 私が得意になるのは	84.6	12.1	<u>3.3</u>		77.9	19.2	<u>2.9</u>		
I-8 私が知りたいことは	79.1	18.7	<u>2.2</u>		77.9	19.2	<u>2.9</u>		
I-10 私がきらいなのは	74.7	17.6	<u>6.6</u>	<u>1.1</u>	64.4	30.8	<u>4.8</u>		
I-11 私の服	71.4	27.5	<u>1.1</u>		69.2	24.0	<u>6.7</u>		
I-14 私ができないことは	68.1	28.6	<u>1.1</u>	<u>2.2</u>	71.2	24.0	<u>3.8</u>		<u>1.0</u>
I-19 私がひそかに	83.5	15.4	<u>1.1</u>		86.5	11.5	<u>1.9</u>		
I-22 時々私は	82.4	16.5	<u>1.1</u>		82.7	14.4	<u>1.9</u>	<u>1.0</u>	
I-23 私が心をひかれるのは	72.5	26.4	<u>1.1</u>		64.4	31.7	<u>3.8</u>		
I-24 私の不平は	85.7	11.0	<u>3.3</u>		84.6	13.5	<u>1.9</u>		
I-27 私の顔	75.8	22.0	<u>2.2</u>		71.2	21.2	<u>6.7</u>	<u>1.0</u>	
I-30 私が思いだすのは	78.0	18.7	<u>3.3</u>		87.5	9.6	<u>1.9</u>	<u>1.0</u>	
II-2 私を不安にするのは	83.5	14.3	<u>1.1</u>	<u>1.1</u>	79.8	12.5	<u>7.7</u>		
II-4 私はよく	79.1	19.8	<u>1.1</u>		78.8	21.2			
II-5 もし私が	50.5	46.2	<u>3.3</u>		39.4	59.6	<u>1.0</u>		
II-9 私の眠り	73.6	22.0	<u>4.4</u>		55.8	41.3	<u>2.9</u>		
II-14 私が好きなのは	74.7	23.1	<u>2.2</u>		72.1	22.1	<u>5.8</u>		
II-15 私の頭脳	67.0	31.9	<u>1.1</u>		72.1	23.1	<u>4.8</u>		
II-17 私の野心	87.9	9.9	<u>2.2</u>		86.5	12.5	<u>1.0</u>		
II-19 私の気持	91.2	<u>6.6</u>	<u>1.1</u>	<u>1.1</u>	82.7	15.4	<u>1.9</u>		
II-20 私の健康	82.4	11.0	<u>6.6</u>		76.9	19.2	<u>3.8</u>		
II-21 私が残念なのは	85.7	14.3			86.5	13.5			
II-25 どうしても私は	91.2	<u>7.7</u>	<u>1.1</u>		83.7	15.4	<u>1.0</u>		
II-27 私が羨ましいのは	82.4	16.5	<u>1.1</u>		72.1	24.0	<u>3.8</u>		
II-29 私が努力してるのは	84.6	14.3	<u>1.1</u>		84.6	13.5			<u>1.9</u>
II-30 私が忘れられないのは	89.0	9.9	<u>1.1</u>		81.7	17.3	<u>1.0</u>		
特異項目数該当刺激語数	0	2	27	6	0	0	25	7	1

注) 表中の数値は%である。

下線のある数値は特異項目数である。

#### 4) 構成(Table37・38)

1 刺激語あたり，男性は3～6項目(平均4.8項目)，女性は4～7項目(平均5.1項目)の構成がみられた。「子供の頃，私は」(I-1)の出現構成項目の数および出現しなかった構成項目の数をTable36に示す。(その他の刺激語については付録D参照)

**Table36 I-1の出現構成項目の数**  
The number of appeared structure's items in I-1

		男性	女性
I-1	出現構成項目数	6	7
	非出現構成項目数	2	1

Fisherの直接確率検定ならびにBonferroni補正の結果，出現構成項目の数および非出現構成項目の数に男女差がみられた刺激語はなかった。出現する構成項目の数(構成の種類)が最も多かった刺激語は男性で「子供の頃，私は(I-1)」，「私の服(I-11)」，「私の顔(I-27)」，「私の眠り(II-9)」，「私が忘れられないのは(II-30)」の5つの刺激語(各6項目)，女性で「子供の頃，私は(I-1)」，「私が知りたいことは(I-8)」，「私の顔(I-27)」，「私の健康(II-20)」の4つ(各7項目)であった。最も少なかったのは，男性で「私が残念なのは(II-21)」(3項目)，女性で「私はよく人から(I-2)」や「私の眠り(II-9)」など11の刺激語(各4項目)であった。

構成項目別にみると，1項目あたり，男性で2～28の刺激語(平均16.9語)，女性で4～28の刺激語(平均17.9語)にみられた。最も出現した構成項目は男性で“単一構成”・“並列”・“展開”の3項目，女性で“単一構成”・“展開”の2項目であり，男女共に28の刺激語全てでそれら構成がみられた。最も出現しなかったのは，男女共に“部分否定”(男性：2刺激語，女性：4刺激語)であった。

特異構成は，男女共に28の刺激語全てに認められ，刺激語別にみると，男性は1刺激語あたり1～4項目(平均2.4項目)，女性は1～5項目(平均2.4項目)が該当した。特異構成項目の数(特異構成の種類)が最も多かった刺激語は，男性で「私の顔(I-27)」，「私の眠り(II-9)」，「私が忘れられないのは(II-30)」の3つ(各4構成)，女性で「私の顔(I-27)」，「私の健康(II-20)」の2つ(各5項目)であった。最も少なかったのは，男性で「私が知りたいことは(I-8)」，「私がきらいなのは(I-10)」，「私が心をひかれるのは(I-23)」，「私が残念なのは(II-21)」，「私が羨ましいのは(II-27)」の5つ(各1項目)，女性で「私はよく人から(I-2)」，「私の不平は(I-24)」，「私が残念なのは(II-21)」など7つ(各1項目)であった。

構成項目別にみると，28の刺激語を通して特異構成項目は，男性で6項目，女性で7項目にみられた。最も多くの刺激語で特異構成項目となったのは，男女共に“その他”(男性：20刺激語，女性22刺激語)であった。最も少なかったのは，28の刺激語を通して特異構成に該当しなかった構成項目(男性：“単一構成”・“展開”，女性：“展開”)を除くと，男性で“部分否定”(2刺激語)，女性で“単一構成”(1刺激語)であった。

Table37 男性の各刺激語に対する構成の分類項目の出現率  
Male appearance rate of "construction"

	単一	補足	否定	転換	並列	対比	展開	他
I-1 子供の頃, 私は	44.0	<u>1.1</u>		<u>3.3</u>	9.0	<u>1.6</u>	41.0	
I-2 私はよく人から	51.7	<u>1.1</u>			<u>6.4</u>	<u>1.1</u>	39.7	
I-4 私の失敗	51.6				6.9	<u>2.2</u>	38.2	<u>1.1</u>
I-6 私が得意になるのは	65.9	<u>1.1</u>			8.2		22.5	<u>2.2</u>
I-8 私が知りたいことは	63.7				10.6		24.5	<u>1.1</u>
I-10私がきらいなのは	61.6		<u>0.3</u>		15.0		23.2	
I-11私の服	52.8		<u>1.1</u>		9.0	<u>1.6</u>	33.4	<u>2.0</u>
I-14私ができないことは	57.1	<u>0.2</u>			<u>4.6</u>		38.0	
I-19私がひそかに	71.5	<u>0.5</u>			<u>1.5</u>		23.2	<u>3.3</u>
I-22時々私は	64.8	<u>1.1</u>			<u>1.1</u>		31.9	<u>1.1</u>
I-23私が心をひかれるのは	58.3				17.9		19.4	<u>4.4</u>
I-24私の不平は	65.9			<u>1.6</u>	<u>2.0</u>		17.8	12.6
I-27私の顔	62.6	<u>0.5</u>		<u>1.1</u>	<u>4.1</u>		29.4	<u>2.2</u>
I-30私が思いだすのは	67.1	<u>0.5</u>			9.0		21.2	<u>2.2</u>
II-2 私を不安にするのは	70.3			<u>0.5</u>	9.7		18.4	<u>1.1</u>
II-4 私はよく	68.1	<u>1.1</u>			<u>2.6</u>		28.2	
II-5 もし私が	11.0				<u>3.5</u>		83.0	<u>2.6</u>
II-9 私の眠り	61.5	<u>2.2</u>			<u>3.6</u>	<u>1.1</u>	31.2	<u>0.4</u>
II-14私が好きなのは	49.5	<u>0.5</u>			19.6		26.6	<u>3.8</u>
II-15私の頭脳	60.4				<u>6.0</u>	<u>0.5</u>	31.9	<u>1.1</u>
II-17私の野心	73.6			<u>0.5</u>	<u>4.4</u>		19.2	<u>2.2</u>
II-19私の気持	74.7	<u>2.2</u>			<u>1.6</u>		18.7	<u>2.7</u>
II-20私の健康	70.4			<u>0.4</u>	<u>7.1</u>	<u>0.4</u>	21.8	
II-21私が残念なのは	75.8				<u>4.4</u>		19.8	
II-25どうしても私は	73.6			<u>1.1</u>	<u>1.5</u>		21.6	<u>2.2</u>
II-27私が羨ましいのは	70.3				9.6		19.0	<u>1.1</u>
II-29私が努力してるのは	69.2				<u>6.6</u>		22.0	<u>2.2</u>
II-30私が忘れられないのは	76.9	<u>1.6</u>		<u>1.1</u>	<u>4.8</u>		14.5	<u>1.1</u>
全体	62.3	1.1	0.7	1.2	6.8	1.2	27.8	2.5
特異項目該当刺激語数	0	13	2	8	16	7	0	20

注) 表中の数値は%である。

下線のある数値は特異構成項目の出現率である。

Table38 女性の各刺激語に対する構成の分類項目の出現率  
Female appearance rate of "construction"

	単一	補足	否定	転換	並列	対比	展開	他
I-1 子供の頃, 私は	41.4	<u>0.5</u>		<u>1.3</u>	16.0	<u>0.5</u>	37.5	<u>2.9</u>
I-2 私はよく人から	50.0				11.8	<u>1.0</u>	37.2	
I-4 私の失敗	54.8	<u>0.2</u>	<u>0.5</u>		<u>1.4</u>		41.1	<u>1.9</u>
I-6 私が得意になるのは	60.6				10.6		23.1	<u>5.8</u>
I-8 私が知りたいことは	51.9	<u>0.2</u>		<u>0.2</u>	10.0	<u>1.0</u>	33.6	<u>3.1</u>
I-10 私がきれいなのは	46.2				22.2	<u>0.3</u>	28.5	<u>2.9</u>
I-11 私の服	52.9			<u>1.0</u>	10.6	<u>0.4</u>	32.8	<u>2.2</u>
I-14 私ができないことは	53.9	<u>0.5</u>			<u>8.3</u>	<u>0.2</u>	36.2	<u>1.0</u>
I-19 私がひそかに	65.4	<u>1.0</u>		<u>1.0</u>	<u>2.6</u>		24.3	5.8
I-22 時々私は	52.9	<u>1.9</u>			<u>5.1</u>		34.5	5.6
I-23 私が心をひかれるのは	51.0	<u>0.3</u>		<u>1.0</u>	25.6		21.1	<u>1.0</u>
I-24 私の不平は	62.5			<u>1.0</u>			20.2	16.3
I-27 私の顔	59.7		<u>0.5</u>	<u>1.3</u>	<u>3.3</u>	<u>0.2</u>	32.7	<u>2.4</u>
I-30 私が思いだすのは	70.2				10.1		15.5	<u>4.2</u>
II-2 私を不安にするのは	64.4	<u>1.0</u>			13.0		19.7	<u>1.9</u>
II-4 私はよく	53.9	<u>1.0</u>			8.0		34.8	<u>2.4</u>
II-5 もし私が	<u>2.9</u>				6.9		86.5	<u>3.7</u>
II-9 私の眠り	46.2				<u>2.6</u>		49.5	<u>1.8</u>
II-14 私が好きなのは	45.2	<u>0.5</u>			30.3		19.2	<u>4.8</u>
II-15 私の頭脳	58.7				5.9		29.6	<u>5.8</u>
II-17 私の野心	64.4	<u>1.0</u>			<u>1.3</u>		22.8	10.6
II-19 私の気持	62.5		<u>1.9</u>		<u>1.4</u>		28.8	<u>5.3</u>
II-20 私の健康	67.3	<u>1.0</u>	<u>1.0</u>		<u>5.4</u>	<u>0.5</u>	22.9	<u>1.9</u>
II-21 私が残念なのは	65.4				<u>7.4</u>		16.7	10.6
II-25 どうしても私は	66.4				<u>6.3</u>		25.5	<u>2.4</u>
II-27 私が羨ましいのは	57.7	<u>1.0</u>			25.6	<u>0.5</u>	13.8	<u>1.4</u>
II-29 私が努力してるのは	70.2				10.7		17.1	<u>1.9</u>
II-30 私が忘れられないのは	75.0				<u>6.1</u>		17.0	<u>1.9</u>
全体	56.2	0.4	0.1	0.2	9.6	0.2	29.4	4.0
特異項目該当刺激語数	1	13	4	7	12	9	0	22

注) 表中の数値は%である。

下線のある数値は特異構成項目の出現率である。

## (2) 各参加者の特異反応出現の様態

28 の刺激語を通して、各参加者の反応が 4 側面のいずれかで特異反応となった刺激語および特異となった形式的側面の数を調査した(Table40・41)。

刺激語別にみると、1 刺激語あたり、男性は 10~19 人(平均 14.0 人)、女性は 10~21 人(平均 15.6 人)に特異反応が認められた。「子供の頃、私は」(I-1)の特異反応を表出した人数および表出しなかった人数を Table39 に示す。(その他の刺激語については付録 E 参照)

Table39 I-1の反応形式分析による特異反応表出人数  
The number of people having specific responses by formal  
analysis in I-1

		男性	女性
I-1	特異反応表出人数	19	20
	非特異反応表出人数	72	84

$\chi^2$  二乗検定ならびに Bonferroni 補正の結果、特異反応を表出する人数および表出しなかった人数に男女差が認められた刺激語はなかった。特異反応を表出した人数が最も多かった刺激語は、男性で「子供の頃、私は(I-1)」, 「私の顔(I-27)」, 「私が好きなのは(II-14)」, 「私の頭脳(II-15)」の 4 つの刺激語(各 19 人, 20.9%), 女性で「時々私は(I-22)」(21 人, 20.2%)であった。最も少なかったのは、男性で「私が知りたいことは(I-8)」, 「私がきらいなのは(I-10)」の 2 つ(各 10 人, 11.0%), 女性で「私の不平は(I-24)」, 「私の野心(II-17)」の 2 つ(各 10 人, 9.6%)であった。

個々の参加者をみると、男性の 91 人中 81 人(89.0%), 女性の 104 人中 87 人(83.7%)が 28 の刺激語のいずれかで特異反応を表出し、男女共に 1 人あたり 0~24 の刺激語(男性: 平均 4.3 語, 女性: 平均 4.2 語)にみられた。Mann-Whitney の  $U$  検定を行った結果、特異反応総数に男女差は認められなかった( $U=4510.5$ ,  $p=.570$ )。

特異反応を表出した参加者に限定すると、男性は平均 4.8 刺激語、女性は平均 5.0 刺激語で特異反応を表出した。1 刺激語あたりの平均特異側面数は、4 側面中、男性で 1.4 側面、女性で 1.5 側面であった。Mann-Whitney の  $U$  検定ならびに Bonferroni 補正を行った結果、各刺激語の特異反応表出側面数に男女差がみられたものはなかった。

Table40 男性参加者の特異反応  
Specific responses for individual male subjects

Sub	Part I															Part II															特異反応 総数
	1	2	4	6	8	10	11	14	19	22	23	24	27	30	2	4	5	9	14	15	17	19	20	21	25	27	29	30			
1		1																											1		
2												1										1							2		
4																		1											1		
6	3		1	1		2		2				1			3								2					8			
7	1		3			2		1				1						1	1					3	1	2		10			
8	1				2										2			1	1	2	2	4	4	1	4	1	2	13			
9																			1									1			
10	1									1	1																	3			
11																	1	1										2			
12	1	2						2		1																		4			
14	2	1					1	1														1						5			
15										1	1	1	1				1	1										6			
16														1						1								2			
17									1										2		2	2			2	3	1	7			
18	2	3	1	2	1	3	2	1	3	4	3	3	1	3	1	3	3	3	1	1			1	1	3		1	24			
19			1				1			1			1					1		1	1	2						8			
20	1																	1							2			3			
21																				1								2			
22		3		1																								2			
23	1						1					1							1						2			5			
24													1										1					2			
25																		1	1				1	1				4			
26		1			1																							2			
27				1				1				2					2	2						3				6			
28																										1		1			
29			1		1																					1		3			
30																			1									1			
31							1	1	1		1		1					2	1						1		8				
32							1				3	1						1	3			1			1			7			
33																					1							1			
35		2														3								1	2			4			
36			3	2	3		1	3		3	1							3	3	3			3	1	3		13				
37	2		1	1	1													1		2				1	2		8				
38				3			1		1									3		2	2							6			
39		1									1												2					3			
40		1																										1			
41																											1	1			
42	2					4	2										1	1	1		3	3	1	2		3	11				
43																							1					1			
44		3			1	1		1		1							2	2	2	1		1	1	2	1	1		14			
45							1		1											3								3			
47									3																			1			
48											1	1	2				2	2			2	1	1					8			
49		1							3	1	1	2					2		3									7			
51		4	1	1		2		1	2				2				1	2	2	1		1	3	4		1	1	16			
52				1																								1			
53									2		4	1					3	2	2	1	1			3	2	3	3	12			
54											2								1							1		3			
55												2															1		2		

56	1			3		1		2	1		1	2			2	2	2				1	2	1	1	1	15	
57		1																								1	
58	2	2														1								1		4	
59				1		1																				2	
60																									1	1	
61	1												1													2	
62						1			1		1													2		4	
63								1	2					2		1	1					1		3		7	
64								2																		1	
65									2														1			2	
66	1											1														2	
67			1				3				3				2	1	3	3				3				8	
69		1				1				1	1				1		1									6	
70			1			1	1																			3	
71								3									1									2	
74																									1	1	
75																	2									1	
76		1			2					2	1	1		1	2	2		1					1	1		11	
77		2				1			1							1	2									5	
78									1														2		1	3	
79	2		1	2	1	2	2	4	1		1											1		1		12	
80	1																									2	
81	2									2													3	1	1		6
82										1																1	
83			1			3	3																			3	
84						1																				1	
85																									1	1	
86			2	1								2					1							1		5	
87		2															1		1					1		4	
88					1						2	1		1			1		1		1	2	1	2		11	
89	2																1						1			3	
90											1													1		2	

計 19 18 11 13 10 10 15 14 12 12 12 13 19 14 12 11 11 19 19 15 12 16 16 11 14 15 14 14

注) 特異反応数0の参加者は記載していない。

Table41 女性参加者の特異反応  
Specific responses for individual female subjects

Sub	Part I															Part II															特異反応 総数
	1	2	4	6	8	10	11	14	19	22	23	24	27	30	2	4	5	9	14	15	17	19	20	21	25	27	29	30			
1	2		1	1			1		2	1		1			1	2		1	1					1	1			13			
4	1		1		1		2					1			1													6			
5									1				3										2	1			1	5			
6		2	1				1	1	1						2	1	1		1		2			2		1		12			
7	1																				1		1					3			
10										1																1	1	3			
11																2												1			
12					1																							1			
13	1																											1			
16	1				1																							2			
17	3	3		1			3	2	1									2						1	1	2		10			
18	1	1											1										1					4			
19					1	2			1			3			1	1												6			
21	2	1				1	1		1			1	2				2				1		1		1			10			
22					1		1	4	1	1								1										6			
23													1										1			1		3			
24												1	1	1	1			1						1				6			
25						1																						1			
26					1				1			1			1			1										5			
27	2									1													3					3			
28					2					1							1											3			
29		1									1						3											3			
30								1			1	2					3											4			
31		2	1				2								1			1				3			1			7			
32							2	2				4	2					2						1	1			7			
33	1						1	2								1					3							5			
34			1	1																	1		1					4			
36	1				1	1					1						2						2	1		1		8			
37			1			2	1		2	1	1				1			1	1			1	1			1		12			
38	1	2	2	3	4	2	3	4	2	4	1	1	2		3	2	2	2	2	1		3	4	1	2	2		24			
39								1		1			1														1		4		
40		1	1			3	4															1						5			
41									2													1				1		3			
42	1	1	1								1							1	1				1		1			8			
43																3						2						2			
44									1	1		4						2		2		2		3				6			
46																											1	1			
47						4	1			1	2	3			1		2	2	1	2					1	1		12			
48	1										1									1		1						4			
49					2																							1			
50							1	1			3					1		2	2			3				1		8			
51		2		2			2	3		2	2	1	4	2		2	1	3	2	3	3	3	1	3		1	3	2	21		
52											1																		1		
53								1											1										2		
55																		1											1		
56																							3						1		
57					2											1		1				2	1	2			2		7		
58				2						1																	1		3		
59							1					1								1	1								4		



激語の特異反応人数は付録 F 参照)。特異反応を表出した人数が最も多かった刺激語は、男性で「子供の頃、私は(I-1)」, 「私を不安にするのは(II-2)」など 19 の刺激語(各 9 人, 9.9%), 女性で「私はよく人から(I-2)」, 「私を不安にするのは(II-2)」など 13 の刺激語(各 10 人, 9.6%)であった。最も少なかったのは、男性で「私が思いたすのは(I-30)」, 「私はよく(II-4)」の 2 つ(各 7 人, 7.7%), 女性で「私がひそかに(I-19)」(5 人, 4.8%)であった。

個々の参加者をみると、男性の 91 人中 61 人(67.0%), 女性の 104 人中 66 人(63.5%)が 28 の刺激語のいずれかで特異反応を表出し、1 人あたり男性は 0~22 の刺激語(平均 2.6 語), 女性は 0~23 の刺激語(平均 2.4 語)にみられた。Mann-Whitney の  $U$  検定を行った結果、特異反応総数に男女差は認められなかった( $U=4467.5$ ,  $p=.488$ )。

特異反応を表出した参加者に限定すると、男性は平均 4.0 刺激語, 女性は平均 3.8 刺激語で特異反応を表出した。Mann-Whitney の  $U$  検定を行った結果、1 人あたりの特異反応総数に男女差は認められなかった( $U=1983.5$ ,  $p=.759$ )。

## 2) 成分数

男性は 1 刺激語あたり 2~9 人(平均 5.5 人), 女性は 1 刺激語あたり 1~10 人(平均 6.1 人)に特異反応が認められた。Fisher の直接確率検定ならびに Bonferroni 補正の結果、特異反応を表出する人数および表出しなかった人数に男女差が認められた刺激語はなかった(各刺激語の特異反応人数は付録 G 参照)。特異反応を表出した人数が最も多かった刺激語は、男性で「私はよく人から(I-2)」, 「私を不安にするのは(II-2)」など 7 つの刺激語(各 9 人, 9.9%), 女性で「私の服(I-11)」, 「もし私が(II-5)」の 2 つ(各 10 人, 9.6%)であった。最も少なかったのは、男性で「私の失敗(I-4)」, 「私が知りたいことは(I-8)」, 「私ができないことは(I-14)」, 「私の野心(II-17)」の 4 つ(各 2 人, 2.2%), 女性で「私がひそかに(I-19)」(1 人, 1.0%)であった。

個々の参加者をみると、男性の 91 人中 45 人(49.5%), 女性の 104 人中 51 人(49.0%)が 28 の刺激語のいずれかで特異反応を表出し、1 人あたり男性は 0~17 の刺激語(平均 1.7 語), 女性は 0~23 の刺激語(平均 1.6 語)にみられた。Mann-Whitney の  $U$  検定を行った結果、特異反応総数に男女差は認められなかった( $U=4601.0$ ,  $p=.720$ )。

特異反応を表出した参加者に限定すると、男性は平均 3.4 の刺激語, 女性は平均 3.3 の刺激語で特異反応を表出した。Mann-Whitney の  $U$  検定を行った結果、1 人あたりの特異反応総数に男女差は認められなかった( $U=1036.0$ ,  $p=.397$ )。

## 3) 内容項目数

男性は 1 刺激語あたり 0~8 人(平均 2.9 人), 女性は 1 刺激語あたり 0~10 人(平均 3.8 人)に特異反応が認められた。Fisher の直接確率検定ならびに Bonferroni 補正の結果、特異反応を表出する人数および表出しなかった人数に男女差が認められた刺激語はなかった(各刺激語の特異反応人数は付録 H 参照)。特異反応を表出した人数が最も多かった刺激語は、男性で「子供の頃、私は(I-1)」, 「私の気持(II-19)」, 「どうしても私は(II-25)」の 3 つ(各 8 人, 8.8%), 女性で「私はよく人から(I-2)」(10 人, 9.6%)であった。最も少なかったのは、男性で「私が残念なのは(II-21)」(0 人, 0.0%), 女性で「私はよく(II-4)」, 「私が残念なの

は(Ⅱ-21)」の2つ(各0人, 0.0%)であった。

個々の参加者をみると、男性の91人中38人(41.8%)、女性の104人中46人(44.2%)が28の刺激語のいずれかで特異反応を表出し、1人あたり男性は0~6の刺激語(平均0.9語)、女性は0~11の刺激語(平均1.0語)にみられた。Mann-WhitneyのU検定を行った結果、特異反応総数に男女差は認められなかった( $U=4788.5$ ,  $p=.757$ )。

特異反応を表出した参加者に限定すると、男性は平均2.2刺激語、女性は平均2.3刺激語で特異反応を表出した。Mann-WhitneyのU検定を行った結果、1人あたりの特異反応総数に男女差は認められなかった( $U=888.5$ ,  $p=.888$ )。

#### 4) 構成

男性は1刺激語あたり1~10人(平均5.5人)、女性は1刺激語あたり1~14人(平均6.6人)に特異反応が認められた。Fisherの直接確率検定ならびにBonferroni補正の結果、特異反応を表出する人数および表出しなかった人数に男女差が認められた刺激語はなかった(各刺激語の特異反応人数は付録I参照)。特異反応を表出した人数が最も多かった刺激語は、男性で「私はよく人から(I-2)」, 「私の顔(I-27)」の2つ(各10人, 11.0%)、女性で「私ができないことは(I-14)」(14人, 13.5%)であった。最も少なかったのは、男性で「私が知りたいことは(I-8)」, 「私がきらいなのは(I-10)」, 「私が羨ましいのは(Ⅱ-27)」の3つ(各1人, 0.0%)、女性で「私はよく人から(I-2)」, 「私の不平は(I-24)」の2つ(各1人, 0.0%)であった。

個々の参加者をみると、男性の91人中65人(71.4%)、女性の104人中71人(68.3%)が28の刺激語のいずれかで特異反応を表出し、1人あたり男性は0~9の刺激語(平均1.7語)、女性は0~16の刺激語(平均1.8語)にみられた。Mann-WhitneyのU検定を行った結果、特異反応総数に男女差は認められなかった( $U=4769.0$ ,  $p=.923$ )。

特異反応を表出した参加者に限定すると、男性は平均2.4刺激語、女性は平均2.6刺激語で特異反応を表出した。Mann-WhitneyのU検定を行った結果、1人あたりの特異反応総数に男女差は認められなかった( $U=2494.0$ ,  $p=.394$ )。

## 4 考察

本研究は、SCTの<自己>に関する28の刺激語への反応を文字数・成分数・内容項目数・構成の4つの反応形式の観点から分析し、特異な反応を抽出した。

### (1) 全体傾向と特異形式

文字数では、28語全体の平均文字数、また28の刺激語それぞれの文字数に男女差は認められず、反応の長さはほぼ刺激語の特性によって決まるといえる。

特異文字数については、それに該当する反応が男性9名以下、女性10名以下、さらに過少文字と過多文字にそれぞれ分かれるため、サンプル数が少なく、統計処理は行わなかった。よって、特異文字数に関する各指標については、男女差の有無を明確には示すことができない。しかし、男女で過少・過多文字の平均や範囲などに数値上の違いはほぼなく、特異反応

の特徴は男女であまり変わらないのではないかと推察される。研究 3 でも取り上げたが、平均と平均に最も近い特異反応との文字数差は検出される特異性の強さを表し、その文字数差が最大・最少となった刺激語は、検出される特異性が最も強い、あるいは弱い刺激語であると考えられる。過少・過多文字の範囲も特異性の強さ、ほかに特異性の強さのばらつきや特異反応の検出力を表していると推察される。つまり、範囲が最大・最少となった刺激語は、それぞれ特異性の強さのバラエティーが最も大きい、あるいは小さい刺激語と考えられる。さらに、バラエティーが大きいと、特異性の検出力は強いと推察される。また、検出力が強いと、検出された特異性は弱いと考えられる。各特異文字と非特異文字間の文字数差はその刺激語の特異か否かの弁別力を表し、その文字数差が最大・最少となった刺激語は、それぞれ弁別力が最も強い、あるいは弱い刺激語と考えられる。

成分数では、28 の刺激語全体を通した平均出現成分数、また 28 の刺激語それぞれの出現成分数に男女差はみられず、＜自己＞領域を通して、また各刺激語の情報量に男女差はみられないといえる。平均出現成分数の最も大きい、あるいは最も小さい刺激語は、それぞれ最も情報量の多い、少ない刺激語であり、平均出現成分数とはその刺激語の情報の引き出しやすさと考えられる。出現成分数の項目が最も多い、あるいは少ない刺激語は、それぞれ検出する情報量が最も多様、あるいは限定的な刺激語と考えられ、その刺激語の出現成分数のバリエーションとは、引き出す情報量の多様さと考えられる。

特異成分数では、それに該当する反応数が少ないため、統計処理を行わなかったが、成分数同様、特異となる成分数項目の多さ・少なさは検出する特異な情報量のバリエーションの多さ・少なさと考えられ、それは特異性の検出のしやすさ、あるいはしにくさ、検出される特異性の弱さ、強さを表すと考えられる。

内容項目数では、28 の刺激語全体を通した平均出現項目数、また 28 の刺激語それぞれの出現項目数に男女差はみられなかった。よって、＜自己＞領域を通して、また各刺激語が検出する情報の種類の数に男女差はみられないといえる。

特異項目数も、成分数同様、統計処理は行わなかったが、特異となる内容項目数の多さ・少なさは特異となる情報の種類の多様さと考えられ、やはり特異性の検出のしやすさ、あるいはしにくさ、検出される特異性の弱さ、強さを表すと考えられる。

他に、平均出現数が最も多い・少ない刺激語、最も出現しやすい項目数や、特異に該当しやすい項目数も特定したが、内容項目数は出現項目数自体にバリエーションが少ないため、量的な側面に刺激語間や男女の違いは認めづらいと考えられる。

構成では、各刺激語にみられた出現項目数に男女差はみられず、各刺激語にみられる構成のバリエーションに男女差はみられないといえる。出現構成項目の数は、それぞれ構成のバリエーションであり、その刺激語が引き出しうる連想の多様さを表していると考えられる。それぞれの連想が何かしらの特性を反映するものと考えれば、引き出す特性の多様さも考えられる。

特異構成項目も同様、28 の刺激語を通した平均や各刺激語の特異構成項目数も特異な連想の種類であり、引き出す特異性の多様さ、特異性の検出力の強さ、その検出された特異性の

弱さを表すと考えられる。特異構成では、男性は“単一構成”と“展開”，女性は“展開”を除いて、28の刺激語を通して特異反応に該当しなかった。これらの構成は、＜自己＞領域を通して必ず一定数出現する構成であり、その領域の普遍的な連想の形、＜自己＞領域で一定数の人が表す特性を反映しているといえる。一方、28の刺激語を通して、最も特異構成に該当した構成は、＜自己＞領域において、最も検出しやすい特異性と考えられる。

4 側面別に＜自己＞領域における参加者全体の傾向や特異反応の傾向をみると、統計処理を行った全体の平均文字数、出現項目数に男女差はみられず、それらの指標からみて各刺激語にみられる反応の長さ、情報量、情報の種類の多様さ、構成の種類の多様さ、つまりそれら形式的側面に男女差はみられないといえる。特異反応についても、出現特異項目数からは、特異反応のバリエーション、つまり特異性の多様さを推察することができると考えられる。また、各刺激語の出現特異項目数の違いは、特異反応のバリエーションの違い、引き出す特異性の多様さの違いを表すと考えられる。28の刺激語を通して特異項目に該当した刺激語数は、＜自己＞領域における、その項目が反映する特異性の検出のしやすさを表すと考えられる。他に、文字数の分析からは、特異文字数の範囲が特異性の検出のしやすさ、特異文字と非特異文字間の文字数差が特異か否かの弁別力を表すと考えられる。

## (2) 各参加者の特異反応出現の様態

4 側面全体の傾向として、1刺激語あたりの特異反応を表出した人数をみると、各刺激語に男女差はみられなかった。＜自己＞領域の各刺激語の検出する特異性の程度は男女で変わらないと推察される。特異反応の表出人数が最多、最少となった刺激語が特定されたが、これらは特異反応を最も表出しやすい、あるいは最も表出しづらい刺激語といえ、特異性の検出力の違いを表していると考えられる。また、検出力が強いということは、特異性を拾いやすいため、特異性が弱いものも検出する可能性がある。検出力が弱く、特異性を拾いづらい場合、その特異性は相対的に強いと考えられる。

全参加者や特異反応を表出した参加者別にみても、28の刺激語を通した1人あたりの特異反応総数（特異反応を表出した刺激語数）に男女差はみられず、この指標から特異反応の表出のしやすさに男女で違いはないと推察される。統計処理は行っていないが、28の刺激語を通して特異反応を表出した者の割合も数値上男女で同等とみうけられ、その指標も上記の推察を支持するものかもしれない。さらに、特異反応表出の側面数も男女差はみられず、それぞれの側面が異なる特異性を検出していると考えれば、1刺激語で現れる特異性の多様さにも男女差はないようである。

各側面別に特異反応出現の傾向をみると、4側面に共通して、それぞれの刺激語で特異反応を表出した者の数は男女で変わらず、また1人あたりの特異反応総数にも男女差はみられず、どの形式的側面も特異性の検出力や特異反応の記述のしやすさに男女差はないと推察される。特異反応を表出した者のみを検討しても、特異反応を表出した刺激語数に男女差はみられず、刺激語間の違いが表すものが何かにもよるが、＜自己＞領域での検出された特異性の種類あるいは程度に男女差はないと考えられる。

以上のことから、SCTの<自己>領域の刺激語に対して反応形式分析を行った結果、各刺激語の平均文字数や平均出現成分数、平均出現内容項目数、出現構成項目数という基本的な形式に男女差はみられなかった。また、特異反応に関しても、<自己>領域全体でも各刺激語でも、特異性の検出力、検出される特異性の程度に男女差はみられず、また各刺激語の特異性の多様さと考えられる指標にも男女差はみられなかった。4側面を合わせると、<自己>領域における、その人の特性の広さと深さを推察できると考えられる指標もあり、それぞれ男女差はみられなかった。

また、上記で推察される指標の他に、<自己>領域の、あるいは各刺激語の表す特異性の多様さ、特異性の検出力、特異性の程度、特異-非特異の弁別力が推察できる指標が考えられた。

## 研究 5-2 GHQ28 との関連

### 1 目的

本研究では、本反応形式分析法の臨床的アセスメントへの適用可能性を検証するため、自己領域全体を通じた特異反応総数と精神的健康との関係を4側面別に検討する。

### 2 方法

#### 分析対象

研究 5-1 と同様、<自己>に関する 28 の刺激語を対象とした。

#### 臨床実践へのアセスメントの有用性の検証

本研究でも、研究 4 と同様、反応形式分析法の有用性を GHQ28 によって検証した。

#### 参加者・実施方法

研究 4・研究 5-1 と同一の大学生 195 名(平均年齢 19.63 歳、 $SD=1.10$ )であり、同一の方法で収集したデータを用いた。

#### 特異反応の抽出

特異反応は、研究 5-1 で抽出された特異形式をもつ反応とした。

### 3 結果

4つの形式的側面別に、被検査者が 28 の刺激語を通して特異反応を表出した刺激語の数である特異反応総数と GHQ28 合計得点の関連を調べた。4側面のいずれかで特異反応を表出した者を“特異反応表出者”とし、GHQ28 との関連をみる方法も考えられたが、本研究では、形式的側面の有用性をそれぞれ検証した方が、その側面を分析対象に採用するべきかを考察できると考え、分けて検証することとした。

特異反応総数と GHQ28 合計得点について Spearman の相関係数を求めたところ、文字数、成分数については男女共に関連はみられなかった(文字数：男性： $r=.170$ ,  $p=.107$ , 女性： $r=.160$ ,  $p=.104$ , 成分数：男性： $r=.101$ ,  $p=.340$ , 女性： $r=.083$ ,  $p=.401$ )。一方、内容項目数について、男性は関連がみられなかった( $r=.135$ ,  $p=.201$ )が、女性は特異反応総数と GHQ 合計得点に正の相関がみられた( $r=.215$ ,  $p=.028$ )。また、構成についても、男性には関連がみられなかったが ( $r=.136$ ,  $p=.198$ )、女性は特異反応総数と GHQ 合計得点に正の相関がみられた( $r=.232$ ,  $p=.018$ )。

#### 4 考察

本研究は、〈自己〉に関する 28 の刺激語を対象に、被検査者の形式的側面における特異反応と精神的健康との間に関連があるか、特異反応総数と GHQ28 合計得点との関連から調査した。

その結果、女性の項目数と構成の分析に精神的健康と関連がみられた。これらのことから、少なくとも女性の場合、項目数・構成の分析が精神的健康のアセスメントに有用であるといえる。一方、男性には、4 側面すべてで精神的健康と関連がみられなかった。

研究 5-1 で、本研究での特異反応は男女で同等程度の特異性を検出している可能性が指摘された。一方、今回のサンプルがもつ精神的健康の程度には男女差が認められた。しかし、特異反応抽出の水準はともに同じである。健康度の高い集団と低い集団では特異項目抽出の段階で異なる特異性を検出している可能性がある、つまり検出された特異性は同等程度だが、その特異性の内容が男女で異なっているのではないかと推察される。その点を検証するためには、男女同等の精神的健康のサンプルによる比較が必要となる。精神的健康度が同程度であれば、抽出された特異反応が男女で同じ特性を反映し、項目数や構成の分析での特異反応総数との関連で男女同様の結果となったのかもしれない。

関連の見られなかった文字数や成分数は、ともに反応の量に関する側面である。文字数に関して本研究では、過少文字と過多文字を一次元として扱い、平均から離れているものであれば、過多か過少かに関わらず、特異反応とした。しかし、例えば、過少な文字数反応下位 5%未満、過大な文字数反応上位 5%未満をそれぞれ抽出して特異とする、などの手続きを検討することも今後は必要であろう。また、反応の量に関しては、10%という基準が特異とするには大きすぎるのかもしれない。基準の変更によって精神的健康と関連がみられるのか、そもそも量的側面には精神的健康の程度が反映されないのか、引き続き検討しなくてはならない。さらに、本研究で扱う特異反応は相対的に出現率が低い反応である。それは、相対的に健康度の低いものもあるだろうが、高いものも含まれている可能性があり、それらが相殺して、関連がみられない可能性も考えられる。

精神的健康に関して、関連がみられる側面とみられない側面があるということは、各側面の検出する特異性が別の内容を指している可能性を示唆する。広くその人の特性を捉える分析法の立案という点で、それぞれの側面を分析法として採用することに意味があるのではないかと考えられる。一方で、同じ特性を測ることも決して意味がないわけではない。同じ特

性を様々な角度から検証できることも重要だからである。各分析法や指標から読み取れるそれぞれの被検査者像に矛盾がなければ、かなり確固とした特性と考えられるし、矛盾があれば、その矛盾を生み出す機制を考えることがアセスメントとして必要であろう。

### 第3節 研究4・5の考察

#### 3-3-1 研究4・5のまとめ

SCT<自己>領域に反応内容・反応形式の両分析法を適用したところ、男女差に関しては、内容分析、形式分析の4側面すべてで28の刺激語がそれぞれ検出する反応内容の多様さ、反応量（文字数）、情報量（成分数）、情報の種類（内容項目数）、構成の多様さに男女差はみられず、それぞれの刺激語での違いは、すべて刺激語の特性と考えられた。それらの分析側面で出現した各項目がそれぞれその人の特性を反映するとすれば、分析によって各刺激語が検出する特性の多様さに男女差はみられないといえる換えることができる。また、内容分析に関しては、各刺激語の特異内容の多様さにも男女差はみられず、特異性の多様さにも男女差はみられないといえる換えることができる。特性や特異性の多様さはさらに、それらの検出のしやすさ（検出力）、検出された特性や特異性の程度を示すと考えられ、それらにも男女差はみられないと考えられた。

各分析により検討した指標からは、反応内容分析および反応形式分析の構成の分析から、<自己>領域を通して最も検出しやすい、または検出しづらい特性および特異性を反映する項目があるのではないかと考えられた。反応形式分析の4側面からは、<自己>領域全体、あるいは各刺激語が引き出す特異性の多様さ、特異性の検出力の強さ、さらにその検出された特異性の弱さを推測できる可能性が各分析に共通して考えられた。文字数の分析では、非特異反応と特異反応の弁別力を推察できる可能性が考えられた。

特異反応を表出した参加者をみると、反応内容分析、反応形式分析、さらに形式分析を4側面別に検討しても、男女差がみられた所見はなかった。それぞれ検討した指標は、各刺激語の特異性の検出力や検出された特異性の程度、また<自己>領域全体の特異性の検出力を表すと考えられ、それらに男女差はみられないと推察された。他に、反応形式分析では、各刺激語の特異反応表出側面数が検出する特異性の多様さを表すと考えられ、そこにも男女差はみられないと推察された。

特異反応総数とGHQ28合計得点の相関をみると、反応内容と内容項目数、構成に女性のみ正の相関がみられた。これら3側面の分析によって<自己>領域全体で特異反応を表出することは、女性の場合は総合的な精神的健康度の低さと関係があると解釈できる。ただし、女性は内容項目数の分析で28の刺激語のうち、平均1.0の刺激語、構成については平均1.8の刺激語に特異反応がみられる。反応内容分析にいたっては平均3.5の刺激語に特異反応がみられる。よって、反応内容分析で2~3の刺激語に特異反応を表出することは多くの被検査者にみられることであり、解釈の際に注目し値するほどの特異反応の数、つまり精神健康度の低さではないことも、考慮する必要がある。

### 3-3-2 精神的健康と関連がみられた分析側面の特徴

反応内容分析と反応形式分析の項目数・構成で〈自己〉領域 28 の刺激語を通して特異反応を表出した刺激語数（特異反応総数）は、女性にとって精神的健康の低さを示す有効な指標となるようである。これらの分析で特異反応の表出が多いほど、精神的健康度は低い。

各側面とも、文字数・成分数とくらべて、その人の反応がどうであるのか、単純に数えるだけではない、複雑な処理によって導き出される側面である。投映法が元来、その人のパーソナリティの一要素を把握する技法ではなく、様々な要素が互いに影響しあう複雑な様相を把握する技法であることを考えると、分析の処理が深い側面と関連が強いことも理にかなっているように思われる。

### 3-3-3 本研究の課題

本章では、特異反応に着目した系統的な反応分析法を示し、本分析法の適用方法や特異反応の特徴について考察するとともに、SCT 反応内容・反応形式分析法の臨床的アセスメントへの適応可能性を精神的健康度との関連から調査した。

本分析法の適用方法について、研究 4 および 5-1 で男女差の有無を検討した指標に関して、差のみられた所見はなかった。よって、男女別で分析を行う必要はないといえるかもしれない。ただし、統計処理を行っていない刺激語間の違いを検討し、それぞれの指標に当てはまる刺激語に男女の違いがないか、精査する必要がある。研究 4 および 5-1 では、たとえば反応内容分析での最多出現項目が男性で「私が残念なのは(II-21)」，女性で「私を不安にするのは(II-2)」であったなど、男性と女性で各指標にあてはまる刺激語が異なっている場合も散見された。刺激語間の違いは、適用方法だけでなく、特異反応の特徴をもより明確にすると推察され、男性の 28 の刺激語，女性の 28 の刺激語間での差を検討することが次の課題と考えられる。

両分析法の臨床的アセスメントへの適用可能性を検証したところ、女性はいくつかの分析で精神的健康と関連を見出すことができた。しかし、男性には関連が現れなかった。その理由の一つとして、男女の精神的健康度の違いが影響している可能性がある。本研究では、GHQ28 合計得点に男女差がみられ、女性ほど男性の精神的健康度が低くなかった。結果、男性は特異反応との関連が現れるほどの水準ではなかった可能性が挙げられる。また、特異反応がもつ特異性の程度は一緒であっても、特異反応総数が表すものが男女で異なっている可能性もある。これらの点を明らかにするためには、サンプルの精神的健康度を男女で等質にする必要がある。また、他の心理検査、特に投映法との関連や他の心理的側面を測定する検査との関連を精査していく必要がある。

本研究では、GHQ28 との関連を検証するにあたって、特異反応の総数のみを扱った。しかし、反応内容も反応形式も一刺激語に対する特異項目が複数ある場合が多く、特異反応といってもその内容や表現形式は異なるため、どのような特異反応であったかを考慮する必要がある。特異項目それぞれの出現率も若干異なるため、特異反応といってもその項目が異なれば、表出された特異性の程度も異なると推察される。この点を考慮することで、精神的健康

との関連が明確になり、何かしらの法則性を見出すことができる可能性がある。また、その特異反応が非特異反応とどのように違うのかを検討することで、特異反応の特徴が意味するものを推察し、解釈に通じる所見を導くと期待される。

## 第4章 総合考察

本章では、各研究から得られた所見を振り返り、SCT 反応分析法の確立に向けて得られた知見と問題点について整理する。それらをうけて、投映法検査として SCT 反応分析法をどのように発展させていくべきか、今後の展開について考察を行う。

### 第1節 各研究の概要

#### 4-1-1 先行研究との比較による本論文の反応分析法の意義

第1章で述べたように、本研究の目的は、定式化した反応分析法の立案である。臨床実践で行われている所見までの手続きは、直観法によって反応から直接解釈を行うというものであった(佐野・楨田, 1954)。そして、SCT による所見の方向性を統一するため、また 60 もの刺激語からなる所見をまとめるため、整理法が開発されてきた(e.g., 佐野・楨田, 1972; 山本, 1968)。これらは反応から感じとるものをどの程度か段階評定を行い、数値化や記号化したものである。整理法は、所見を数値化・記号化するため、計算が可能となる。よって調査研究で使用しやすいというメリットがある。しかし、あくまでも直観法による所見が素であるため、評定者の独断である、被検査者の回答の歪曲をそのまま所見にしてしまう、といった問題がある。

人工知能(平野・那須川, 2020)や日本語コーパスとの一致率(近藤ら, 1997a)といった一部の特殊な分析法を除いて、SCTの分析法立案を目指した研究は反応分類を用いる事が多い。SCTをツールとして用いた調査研究も、直観法を素にした整理法より、反応分類が用いられてきた。評定者の独断が入りづらくなるためと考えられる。主な分類は評価的観点(e.g., 加藤, 1967; 水野ら, 2013), 具体的な反応内容に即した分類(e.g., 桂ら, 1972; 出石, 2001), 内容様式(e.g., 古屋, 1993; 石井・鈴木, 2010)である。1つの刺激語ごとに、それぞれの反応がどの項目に当てはまるのか分類することにより、直観法より評定者の独断・恣意的となる要素を排除し、さらに各分類項目に分類された反応の数を取り上げることで、数値化、比較が可能となる。しかし、一方で、評価的観点では分類しきれない刺激語があり、一部の刺激語に別の分類軸を用いることがある(e.g., 池田ら, 1982, 伊東, 2010)。それでは、刺激語間の比較が難しくなり、例えば臨床実践で用いた際に、被検査者の特殊な反応がどの刺激語で見られるのかが把握しづらくなる。具体的な反応内容に即した分類も同様の事象が当てはまる。内容様式については、刺激語に共通して用いることができるが、それのみでは、例えば「私の父(I-9)」に「外見の記述」などと分類することになり、反応の情感をくみ取ることができない。よって、内容様式を分類項目に据える場合、複数の観点を設定したり(古屋, 1993), 下位分類項目を設定する方法がみられる(石井・鈴木, 2010)。

本論文では、もっともポピュラーな分析法である反応分類を用いて、調査研究にも臨床実践にも用いることのできる分析法の立案を試みた。反応分類を採用したのは、直観法にいわれる評定者の独断・恣意的であるとの問題を低減させるためである。また、それだけでなく、反応分類の使用は調査研究でよく用いられている通り、数値化・記号化によって、比較することが可能である。その数値化・記号化による比較を臨床実践にも活かし、調査研究と臨床

実践の所見をつなぎやすくしようと考えたのである。

反応分類にも先に挙げたいくつかの問題がある。まず、単一の観点ではすべて刺激語で適用できず、各刺激語にあわせた分類項目の設定では刺激語間の比較ができないという点である。そこで、本研究は複数の観点から反応分類を行うこととした。そうすれば、ある観点ではその反応の特徴を取り上げることが難しくとも、別の観点で取り上げることができる可能性がある。結果、すべての刺激語に同じ分類項目が適用できるのである。その際、臨床実践では、いろいろな角度から反応の特徴を拾い上げる必要があり、古屋(1993)が設定した2軸より多く設定することとなった。さらに、反応内容分析と反応形式分析を行い、反応の特徴をさらに多角的に抽出しようとした。

最後に、回答の歪曲の問題であるが、本論文の分析法は特異反応を抽出するものである。そのような方法を用いたのは、一般的反応に抗って表出される特異反応にこそ、その人の個性的なものが投影されると考えられるためである。回答が歪曲され、一般的反応と遜色ないものになれば、所見で取り上げる対象にはならない。もし歪曲された反応を「一般的な傾向と変わらない」と解釈しても、その被検査者に周囲と変わらず振る舞う(反応する)能力があるということなのだから、間違いではない。また、分析の観点多いため、歪曲によって少しでも不自然な反応になれば、それを検出する機会が多いと考えられる。

これまで提示された分析法には、それら数値化・記号化からスコアリングを行う方法もみられる(e.g., 甲斐, 1985; 加藤, 1967)。スコアリングも反応分類を基礎にしており、それらの方法が有効か否かを検証することも、反応分類が確立してこそと考えられる。

本論文の分析法はこれまでの分析法よりも、包括的かつ系統的に反応を分析する方法と考えられ、調査研究と臨床実践をつなぐものになると期待される。

#### 4-1-2 <家族・家庭>領域における反応内容分析・反応形式分析の試案とそこから得られた提案

第2章では<家族・家庭>に関する11の刺激語を取り上げ、それらに反応分析を試みた。

研究1では、可能な限り不足なくSCT反応の特徴を捉えられるように複数の観点を設定して各反応を分類し、その出現率を算出した。その結果、たとえ複雑な文章構成であっても、反応をもれなくカウントすることができた。また、特異反応を抽出する方法は、低頻出項目に当てはまるか否かを基準とすべきであるとされた。

研究2では、研究1で使用された分類軸および分類項目のうち、反応内容分析として、時制4項目・対象5項目・評価6項目を組み合わせた計120項目に反応を分類し、相対的に出現率の低い特異内容項目を特定する方法を試みた。

統計処理は行っていないが、男女間にみられる数値上の異同をもとに、想定される刺激語や内容項目の特徴について考察を行ったところ、内容分析からは、内容項目によって検出する特異性の内容が異なる可能性がある、刺激語によって検出する特異性の程度が異なる可能性がある、検出する特異性の程度を推察できると考えられる指標が複数ある、<家族・家庭>領域あるいは各刺激語の特異反応の表出しやすさ(検出力)を推察できると考えられる指

標がある、どのような特異反応かに関わらず（特異項目を問わず）、特異反応を表出しただけで、共通の特徴を有すると考えられる刺激語があると示唆された。

研究3では、研究1による4つの分類軸のうち、研究2で扱わなかった構成8項目のほか、反応の長さ(文字数)、反応の情報量(成分数)、反応の情報の種類の数(内容項目数)の計4側面を取り上げ、文字数は平均からかけ離れた反応、その他は出現率の低い反応を抽出する反応形式分析を試みた。

反応形式分析からは、女性の方が男性よりも反応が長く、情報量・情報の種類も多いことがわかった。よって、女性の方がアセスメントされる個人差が大きいのか、その個人差が反応形式の違いとして反映されやすいと考えられた。また、統計処理は行っていないが、数値上の男女の異同からは、それぞれの分析側面で刺激語間の特異性の多様さの違い、特異性の検出力の違い、またその特異性の程度の違いが推察できると考えられる指標があること、文字数に関して、各刺激語の特異反応と非特異反応の弁別力を推察できると考えられる指標があること、内容項目数に関して、男女差や刺激語間の差が表れづらく、特異性を検出しづらい（検出力が弱い）が、それゆえ強い特異性を検出するのではないかと考えられること、ある個人の〈家族・家庭〉領域にみられる特異性の広さと深さを推測できると考えられる指標があることが示唆された。

これら反応内容分析・反応形式分析の試案を用いて、反応を分析したところ、それぞれの観点から特異反応を抽出することができた。また、分析の結果、それぞれ刺激語がもつ特性（検出する個人特性や特異性の多様さやそれらの検出力など）に違いがあるのではないかと考えられた。精研式のみならず様々な文章完成法テストで、各刺激語の性質や有用性の相違は関心のひとつであり、実際に相違が報告されている（*e.g.*, Cromwell & Lundy, 1954; Forer & Tolman, 1952; Sacks, 1949）。また、SCTも、刺激語によって被検査者が認知する曖昧さが異なることは指摘されており（今川, 1982）、各刺激語によって検出される個人特性が異なる可能性は十分考えられる。研究2・3はその刺激語間の違いを主に男女の異同から推察した。よって、刺激語の特性の違いなのか、性差によるものかが明確でない。少なくとも、研究3では構成を除く3側面の全体平均に男女差がみられており、分析にみられる男女間の共通点と相違点が何を意味しているのかを明らかにすることも、今後の解釈仮説の立案に重要な示唆を与えるものと思われる、男女別の分析が必要であることが示唆された。

一方で、研究2・3はあくまでも試案であり、参加者の少なさ、男女比の偏りの問題による所見への影響を払拭できなかった。

#### 4-1-3 反応分析法および特異反応の再検討と臨床的アセスメントへの適用可能性

第3章では、参加者数を増やして第2章で提示されたSCT反応分析法を行い、より特異反応の標準的特徴を明確にしたうえで、分析方法や特異反応の特徴について考察を行うこととした。さらに、特異反応が臨床的アセスメントに適用できる可能性があるかを検証するため、特異反応と精神的健康の関連を検討した。なお、第3章では、SCTの中で最も広範な領域である〈自己〉領域の刺激語を対象とした。

研究 4 では、反応内容分析を〈自己〉領域 28 の刺激語に対して行った。その結果、各刺激語が検出する特性や特異性の多様さ、それらの検出力、検出された特性や特異性の程度と考えられる指標に男女差はみられなかった。よって、検出する特性や特異性に関するそれらの違いは刺激語の特性によるものと考えられた。ただし、特異性（特異反応）の多様さや検出力や程度を決定づけるのは、全体で表される特性だけではない、つまりその刺激語にみられる特性（全体反応）が多様であるから、特性の検出力が強い（弱い）から、検出される特性の程度が強い（弱い）からではない場合もあるのではないかと推察された。その他の指標として、〈自己〉領域全体を通して最も検出しやすい特性や特異性を推察する指標が考えられた。

次に 28 の刺激語を通してみられる特異反応の数（特異反応総数）と精神的健康度（GHQ28）との関連を調べた。その結果、女性は、〈自己〉領域を通じた特異反応数の多さと精神的健康度の低さに関連がみられた。よって、反応内容分析は精神的健康度を推測するという意味で臨床的アセスメントに有用である可能性が示された。しかし、男性ではそのような所見はみられず、この男女の違いが何を表すのかを確認することが今後の課題に挙げられた。

研究 5 では、反応形式分析を行った。その結果、各刺激語への反応の長さ、反応の情報量、情報の種類の数、構成のバリエーションに男女差はみられなかった。〈自己〉領域全体の特異性の検出力、特異性の程度と考えられる指標にも男女差はみられなかった。また、〈自己〉領域にみられる特異性の広さや深さと考えられる指標にも男女差はみられなかった。統計処理は行っていないが、4 側面の分析からは、その刺激語が検出する特異性のばらつき（文字数）や多様さ、検出力、特異性の程度を推察する指標が考えられた。さらに文字数の分析からは特異か否かの弁別力を推察する指標、構成の分析からは〈自己〉領域全体を通して最も検出しやすい特性や特異性を推察する指標が考えられた。

精神的健康との関連を調べた結果、情報の種類の数（内容項目数）と構成に関する分析で、女性は特異反応が多ければ多いほど、精神的健康度が低いという結果が得られ、臨床的アセスメントへの適用可能性を示した。しかし、反応内容分析同様、男性ではそのような所見が得られず、男女の違いが何によるものかを確認することが今後の課題となった。

これら反応内容分析・反応形式分析によって〈自己〉領域の反応を分析したところ、男女差の有無を検討した指標に関して、差のみられた所見はなく、男女別に分析を行う必要があるのか、再検討を要するとされた。具体的には、それぞれの指標の最大や最多、最小や最少の刺激語が男女で異なっている場合が散見されたため、刺激語間の違いを検討したうえで、男女共通と考えてよいかを判断すべきとされた。さらに、本反応内容分析・形式分析の分析方法では、文字数や成分数の多い・少ない反応を別次元とする方法を検討すべきと考えられた。特異反応基準についても、特異 - 非特異反応の弁別基準の変更が検討されるべき点として挙げられた。

さらに今後は、(1) GHQ28 の各因子高得点（臨床的問題を有する可能性がある 6 点以上）の人数を増やし、各刺激語での特異反応と精神的健康について詳細に検討を行うこと、(2) 臨床実践で得られる臨床群データを本研究で得られたデータと比較し、臨床実践での適用を検

討すること、(3)他の心理検査との関連を調査し、特異反応を表出することの意味をより明確にすること、(4)特異反応そのものがどのような反応なのかを検討し、その反応の特徴から解釈仮説の立案を行うこと、(5)他の刺激語領域について同様の分析を行い、分析の有用性と限界について明らかにすること、が必要であろう。

## 第2節 特異反応抽出によって現れる指標とその意味付け

本論文では、反応内容分析・形式分析を行い、まず特異反応の抽出を行った。そこで検討した指標もまた、特異反応の解釈に活かすことができると考えられる。

投映法の考え方をSCTに当てはめると、刺激語および<家族・家庭><自己>といった刺激語領域は被検査者のおかれた“環境”としかえることができる。SCTはその刺激語に対してどのように反応するかが問題となる。それは環境の中でその被検査者がどうふるまうかを投影していると考えることができ、様々な心的な動きを表している。本研究での各分析の側面を“環境へのアプローチを測る視点”と考え、被検査者がその環境をどのように捉え、どの視点からどのようなトーンでふるまうのか(反応内容)、どれほどの活動量であるか(文字数・成分数)、どれほど多彩なふるまいをするか(内容項目数)、どのような連想を起すか(構成)、としか換えることができる。各研究の考察でも取り上げてきたが、本章では、その“環境”について、それぞれどのような視点から何が捉えられるのか、特異反応の抽出によって得られた所見から改めて考察を行う。

### 4-2-1 反応内容分析の指標と意味づけ

反応内容分析では、まず1刺激語あたりの出現内容項目の数を求めた。これは、1刺激語あたりの反応内容の種類がどれほどかを示しており、その刺激語の引き出す反応内容が多様か、限定的かを表す。最多となった刺激語は、<家族・家庭>あるいは<自己>の刺激語領域の中で、最も多様な内容を引き出す刺激語、最少となった刺激語は、最も内容が収束する刺激語といえる。その刺激語でどの内容項目にあたる反応を表出するのかは、それぞれの被検査者の何かしらの特性・性質によると考えれば、出現内容項目のバリエーションとはその刺激語が引き出す個人特性や性質の多様さであると考えられる。1刺激語あたりの特異内容項目の数に関しても同様で、これは1刺激語あたりの特異な内容の種類を示しており、最多となった刺激語は、特異な内容が最も分散した、つまり最も多様な特異性を抽出する刺激語、最少となった刺激語は、最も収束し、最も限定した特異性を抽出する刺激語といえる。<自己>領域の男性の例をFigure6に示す。Figure6の矢印の上段は、各刺激語が検出できる個人特性の種類である。左にいけばいくほど反応がみられた内容項目の種類が多い、つまり多様な内容を引き出す刺激語と考えられる。同じく、矢印の下段は特異反応となる内容項目の種類が多い、つまり多様な特異性を引き出す刺激語と考えられる。刺激語下の括弧の数字は、反応がみられた(上段)、あるいは特異項目となった(下段)内容項目の数である。

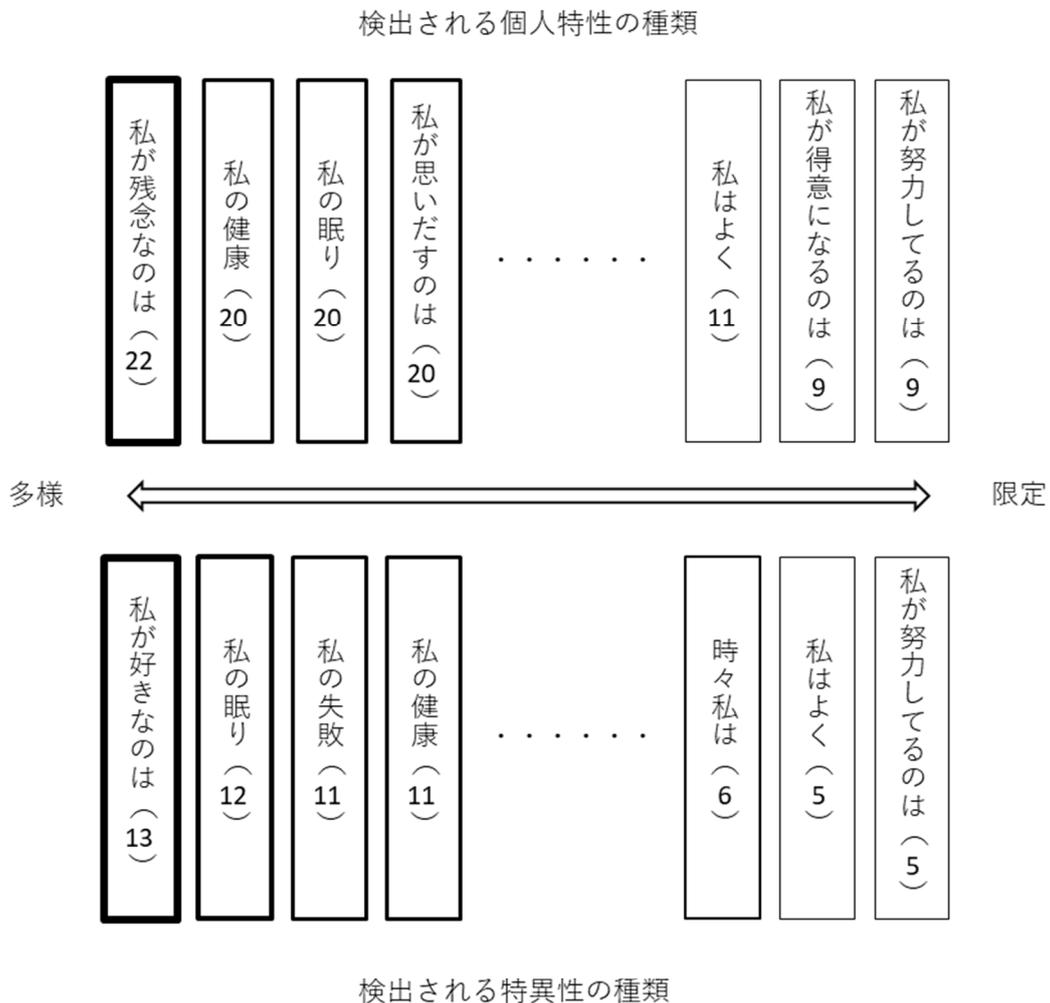


Figure6 男性の反応内容分析で検出される個人特性/特異性のバリエーションの違い  
Differences in variation of traits/originarities assessed by content analysis in male

注) 各刺激語にある括弧内の数字は全96項目中、出現項目/出現特異項目が現れた項目数である。

さらに、多様な特異性を抽出するということは、その内容は問わないとして、特異と判定される可能性も高い、つまり特異性の検出力が高いといえる。さらに特異と判定される可能性が高いということは、検出された個々人の特異性の中には相対的に弱いものも含まれる可能性があることを意味する。

全内容項目のうち、反応がみられた項目の数は、刺激語領域を通して出現した内容の多様性を表す。最も出現した項目は、その領域内で最も出現しやすい内容である。特異内容項目についても同様に、特異となった項目の数は、刺激語領域を通してみた特異な内容の多様性

を表す。また、その領域の刺激語を通して最も特異項目に該当した項目は、最も特異となりやすい内容、つまりその刺激語領域で最も特異とされやすい個人特性や性質を表していると考えられる。

各参加者の特異反応出現の様態では、1 刺激語あたりの特異反応となった参加者数を求めた。これは、その刺激語がどれほどの人を特異とするか、いわゆる特異性の検出力を表していると考えられる。人数が多ければ、その刺激語の検出力は強いといえるが、多くの人を特異としやすく、そこで検出された特異性は弱いものも含まれると推察される。反対に人数が少なければ、検出力は弱い、その特異性は強いと推察される。

特異反応を表出した参加者の割合は、その刺激語領域での特異性の表しやすさ、特異反応総数は、その人の特異性の程度であると同時に、特異性を発揮する可能性の高低を表すと推察される。

#### 4-2-2 反応形式分析の指標と意味づけ

反応形式分析では、4 側面について分析を行った。

文字数の分析では、各刺激語の平均文字数を求めた。これは反応の長さがどれほどかを表しており、最多・最少文字数となった刺激語はそれぞれ最も反応が長い刺激語と反応が短い刺激語を表す。過少文字・過多文字の平均も同様に、それが最大・最小となった刺激語は、それぞれ特異反応の平均的な長さが最も長い・短い刺激語である。

文字数に関する意味づけを Figure7 に示す。平均から各被検査者の特異文字数までの距離 (Figure7 ①) は平均との違いの大きさといい換えることができ、この文字数が多い、つまり距離が長い特異反応ほど、全体平均からかけ離れている、つまり特異性が強い反応と推察される。

過少文字・過多文字の範囲 (②) は、その範囲が広ければ、より特異反応に該当する反応が増える、つまり特異反応の検出力は強いが、検出された内容の特異性は弱いものも含まれると推察され、範囲が狭ければ、特異性を拾いづらく、検出力は弱い、検出された内容の特異性は強いと推察される。また、範囲が広ければ、特異反応の中でも、非特異文字から特異性にかけて離れているものとそうでないものが混在することになるため、特異反応の中でも特異性の違いが大きくなると考えられる。

過少文字・過多文字それぞれと非特異文字間の差 (③) は、特異 - 非特異にどれほどの隔たりがあるか、つまり特異 - 非特異反応を分ける弁別力といえる。その差が大きければ、弁別力は強く、差が小さければ、弱いと考えられる。

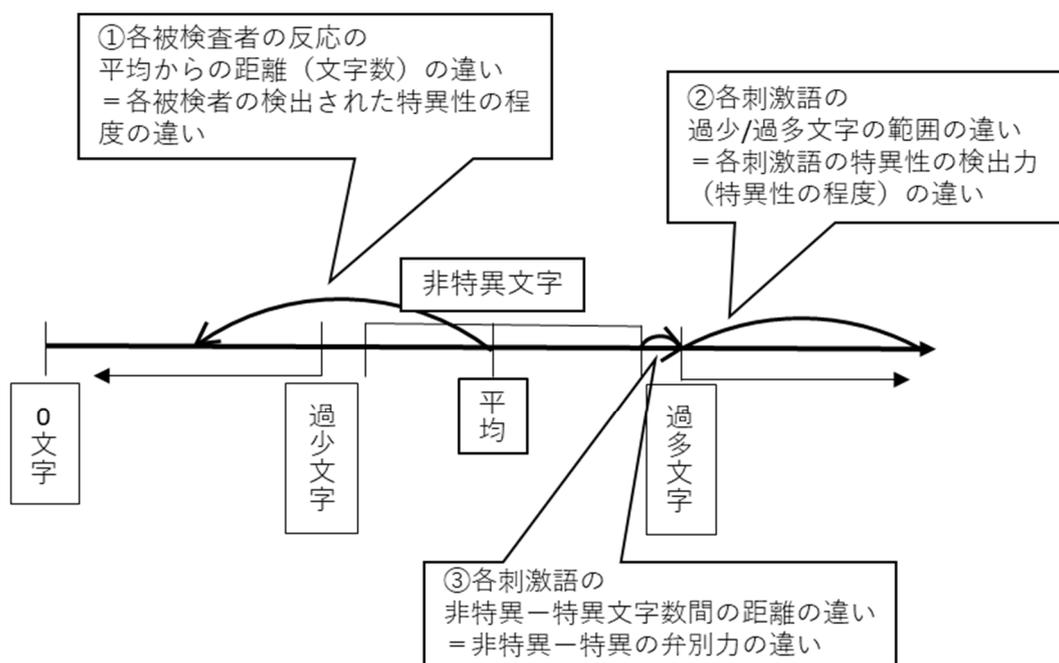
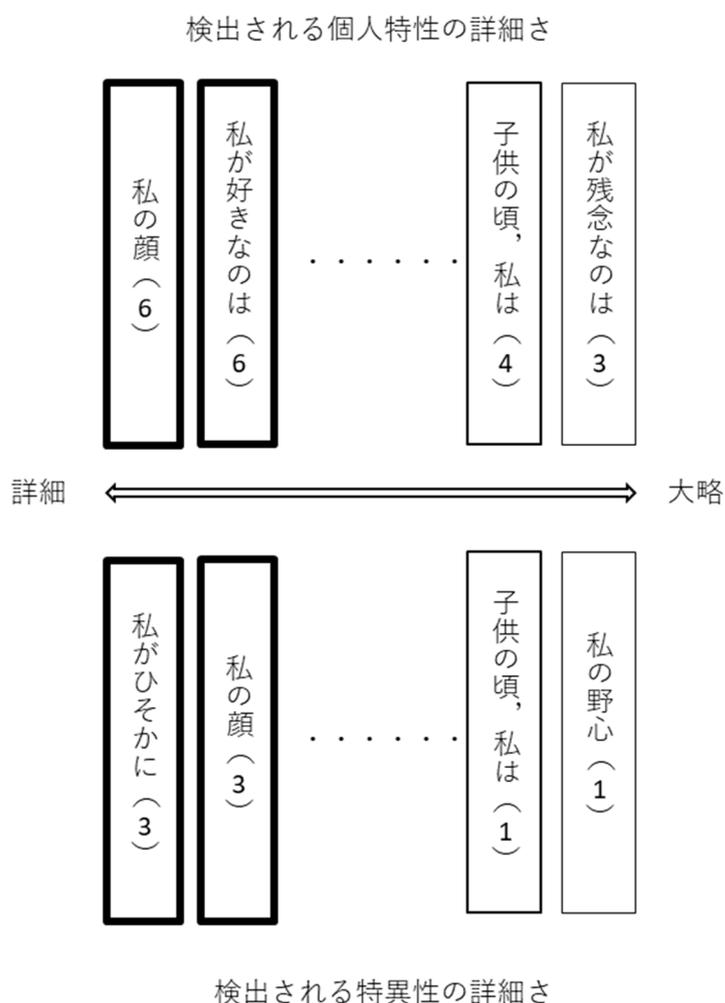


Figure7 文字数の反応形式分析による意味づけ  
Interpretations of letters by form analysis

成分数と内容項目数については、それぞれ同様の分析法を用いているため、各指標も同じ意味付けである。よって、ここでは2側面をまとめて記述する。

まず、それぞれ反応がどれほどの成分数・項目数に出現したかを調べた。これは、それぞれ情報量と情報の種類の数であるが、個人差をどれほど詳細に反映するかを示すと考えられる。これまで、研究3や研究5では、成分数・項目数に関して、“特性や特異性の多様さ”と表してきた。他の側面と記述を合わせることで、より理解しやすくなると考えたためである。しかし、成分数や項目数が1違うことで、全く異なる特性・特異性を表すというよりは、それらの程度の差であったり、微妙な違いであったりを表していると考えたべきではないかと推察される。よって、ここではあえて“個人差の詳細さ”と考えることとする。多くの成分数・項目数に反応が出現すれば、反応間の違い、つまり個人差を詳細に区別しており、反対に少ないと個人差をあまり区別しないことになる。特異成分数・項目数も同様、その刺激語では特異性をどれほど詳細に区別しているかを表していると考えられる。男性の<自己>領域の成分数を Figure8 に例示する。矢印の上段は各刺激語の検出する個人特性の詳細さを表し、左の刺激語ほど多くの成分数に反応が分散する、つまり反応が多岐にわたっているため、個々人の違いを詳細に検出していると推察される。下段は各刺激語の検出する特異性の詳細さを表し、左の刺激語ほど多くの成分数が特異となる、つまり特異反応が多岐にわたっており、個々人の特異性の違いをより詳細に把握できると考えられる。各刺激語の下の括弧はどれほどの項目に反応がみられたか（上段）、特異成分数となったか（下段）その数を記載している。さらに、特異反応の出現率にもよるが、出現する全反応のバリエーションが少

なく、個人差を詳細に区別しないにも関わらず、その刺激語で特異反応を表出する場合、その特異性は強いと考えられる。



**Figure8** 男性の成分数の分析で検出される個人特性/特異性の詳細さの違い

Differences in detail of traits/originarities assessed by form analysis about number of components in male

注) 各刺激語にある括弧内の数字は、出現成分数/出現特異成分数である。

最も特異となる刺激語の多かった成分数・項目数は、それぞれ、その刺激語領域を通して最も普遍的な特異反応の形態であり、最も少なかった成分数・項目数は特異反応の中でもさらに特殊な形態といえる。それゆえ、被検査者間はもちろん、被検査者内でも個人的な側面がかなり強く反映された反応と考えられる。

構成の分析については、まず 1 刺激語あたりで出現する構成項目の数、つまり構成の種類

を求めた。出現する構成の種類が多いほど、その刺激語は多種多様な連想を促すといえるし、またそれは特性の多様さ、検出力の強さ、特性の程度に弱いものが混在する可能性を表す。反対に少ない刺激語は、反応が収束しやすく、特性の限定、検出力の弱さ、しかし特性の強さを反映するといえる。特異構成についても同じく、1刺激語あたりの特異構成項目の数は、検出する特異性の種類を表し、その種類が多ければ、特異性を多様に反映し、検出力も強く、程度は弱い可能性がある。少なければ、かなり限定された特異性を反映し、検出力は弱く、しかし程度は強い刺激語と考えられる。

その刺激語領域で最も出現した構成項目は、その領域で最も一般的な連想の流れ方を表しているといえる。その刺激語領域では、連想が続きづらいか（単一構成）、展開や対比など連想が続きやすいか、続くとすればどのような形で続きやすいのか、ということである。特異構成の方も、最も多くの刺激語で特異となった構成は、その刺激語領域の中でも普遍的な特異構成であり、それに該当する特異反応はあまり強い特異性を反映していないかもしれないが、最も少ない刺激語で特異となった構成による特異反応は、その刺激語領域の特異反応の中でもさらに個性的といえる。

特異反応表出者の傾向からは、反応内容分析と同様の特徴を推察することができる。例えば、各刺激語の特異反応を表出する者の人数は、その刺激語の特異性の検出力や特異性の程度を表すと考えられる。その刺激語で特異反応を表出する者が多ければ、検出力が強いと考えられるが、それだけ多くの特異性を拾っており、弱い特異性の含まれている可能性がある。1人あたりの特異反応総数は、その被検査者がどれほど特異反応を表出しやすいかを表すと推察される。形式分析は4側面あるため、各刺激語で特異反応を表出した側面の数も指標となりうる。特異反応を表出した側面が多ければ、その刺激語に対して様々な特異性を表出したことになる。それは環境（刺激語）に対して、複数の面で特異な働きかけをしているといえることができるかもしれない。

各分析によって抽出された特異性がどのような個人特性や性質を指すのかについて、特異反応抽出の段階では推察することはできない。特異反応表出の意味については第3節にて改めてまとめるとして、ここでは、その前段階である特異反応抽出によって推察される所見、特に刺激語の特徴について論じた。特異性が何を表すのかはわからないが、抽出される特異性の多様さや程度（強度）などが刺激語によって異なることが推察された。

### 第3節 実際の活用に向けた分析的手続き

第3章で行った臨床への適用可能性の検討についての所見、また「4-2 特異反応抽出によって現れる指標とその意味付け」をまとめると、SCT解釈の一助となりうることが期待される。＜自己＞領域の反応内容分析を例に、各刺激語の所見や特徴をまとめた(Table42)。本分析法により、特異反応の有無並びに総数を確認し、その刺激語で特異反応を表出すると、どのような事がいえるのか、推測することができる。解釈までの手続きを Figure9 にまとめた。

Table42 反応内容分析からみた各刺激語の特徴  
 Characteristics of each stimulus word by content analysis

	全体		特異反応					
	出現項目数		特異項目数		表出人数		GHQ28合計との関連	
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
I-1 子供の頃、私は	15	14	9	9	16	15		
I-2 私はよく人から	14	16	8	10	15	15		
I-4 私の失敗	17	15	11	8	12	14		
I-6 私が得意になるのは	9	14	6	9	7	14		
I-8 私が知りたいことは	14	17	7	9	11	13		
I-10 私がきらいなのは	15	17	9	11	15	16		
I-11 私の服	13	17	7	10	13	17		
I-14 私ができないことは	14	12	9	8	11	16		
I-19 私がひそかに	16	18	9	8	11	11		
I-22 時々私は	12	13	6	6	11	12		
I-23 私が心をひかれるのは	15	14	10	9	12	15		
I-24 私の不平は	19	16	11	9	12	12		
I-27 私の顔	17	17	10	9	11	11		
I-30 私が思いだすのは	20	19	9	7	9	10		
II-2 私を不安にするのは	16	26	8	13	13	12		
II-4 私はよく	11	13	5	7	8	14		
II-5 もし私が	12	15	6	7	10	15		
II-9 私の眠り	20	13	12	9	13	14		
II-14 私が好きなのは	18	12	13	7	12	12		
II-15 私の頭脳	13	15	7	7	6	10		
II-17 私の野心	15	12	8	7	10	12		
II-19 私の気持	19	20	10	9	10	11		
II-20 私の健康	20	20	11	10	15	14		
II-21 私が残念なのは	22	19	8	9	10	11		
II-25 どうしても私は	13	14	6	6	10	9		
II-27 私が羨ましいのは	12	11	6	6	10	11		
II-29 私が努力してるのは	9	10	5	6	7	14		
II-30 私が忘れられないのは	15	21	8	9	11	9		
特異反応総数							関連なし	多いほど健康度低い

注) それぞれ赤のセルは最多、青のセルは最少となった刺激語である。

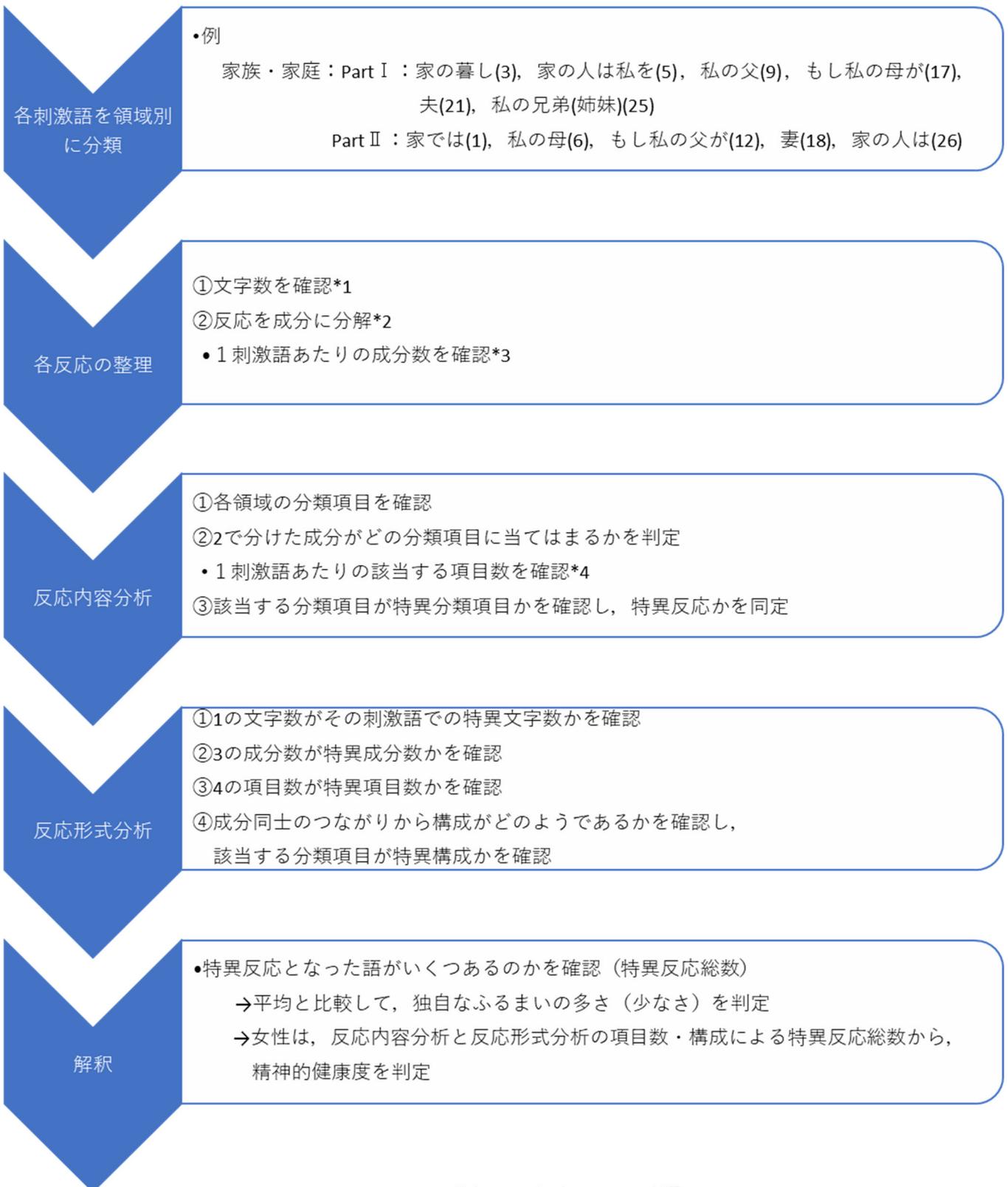


Figure9 分析から解釈までの手順  
 Procedures from analysis to interpretation

例えば、ある女性被検査者の〈自己〉領域で Table63 のような反応を表出したとする。

Table43 女性被検査者の反応例  
An example of responses by a female testee

刺激語	反応	反応内容	反応形式			
			文字数	成分数	項目数	構成
I-1 子供の頃、私は	掃除が嫌いで部屋が汚かった。 今はきれい。	現在-事象-肯定	18	3	3	展開 対比
I-2 私はよく人から	マイペースだと言われる。 私はそう思わないけど。		21	2	1	展開
I-4 私の失敗	はできれば隠したい。 人に知られたくない。		18	3	1	展開
I-6 私が得意になるのは	絵を描くこと。 でも最近、下手になった。	現在-自己-否定	17	2	2	展開
I-8 私が知りたいのは	自分の評価。 周囲の目ばかりに気になる。	時制なし-自己- 評価なし	17	2	2	展開
I-10 私がきらいなのは	共同作業。自分が失敗して 周りに迷惑をかけたくない。		23	3	2	展開
I-11 私の服	は少ない。買うのが面倒。	時制なし-事象- 否定	10	2	2	展開
I-14 私ができないことは	沢山ある。 だからできることを先にする。		17	2	2	展開
I-19 私がひそかに	小説を書いている。けれど、最初に 少し書くだけで最後まで続かない。		30	3	1	展開 展開
I-22 時々私は	誰も家にいない時に歌う。 これがとても楽しい。	現在-事象-肯定	20	2	2	展開
I-23 私が心をひかれるのは	ノスタルジーなもの。癒されたい、戻 りたいと思っているのかもしれない。		31	3	2	展開 並列
I-24 私の不平は	押し殺す。 言い合いは体力を使うだけだ。		17	2	2	展開
I-27 私の顔	は並以下だ。 努力もしてこなかった。		15	2	2	展開
I-30 私が思いだすのは	中学生の頃、人間関係で苦労した こと。一番辛かった。		23	2	1	展開
II-2 私を不安にするのは	課題。対処が分からないと どうすればいいか悩む。		21	3	2	展開
II-4 私はよく	寝ちゃいけないと分かっているのに 居眠りをする。		28	2	1	展開
II-5 もし私が	お金を沢山手にしたら、 とりあえず貯金したい。		21	2	1	展開
II-9 私の眠り	は浅い。いつも夢を見て、 途中で一回起きてしまう。		22	3	2	展開 展開
II-14 私が好きなのは	家族愛を題材にしたもの。 すぐに感情移入してしまう。		23	2	2	展開
II-15 私の頭脳	は良くない。記憶力もだが、 判断力も高くないと思う。		21	3	1	展開 並列

II-17 私の野心	は強くないけど、 他人に私を認めさせること。	現在-事象-中立	19	2	2	展開	
II-19 私の気持	は不安になりやすい。		9	1	1	単一	
II-20 私の健康	は良好だ。めったなことでは崩さない のでたまに崩すと興奮する。		28	4	3	展開 展開 展開	
II-21 私が残念なのは	良いと思ったものが評価されない こと。		17	1	1	単一	
II-25 どうしても私は	恥をかきたくない。		9	1	1	単一	
II-27 私が羨ましいのは	スタイルの良い人		8	1	1	単一	
II-29 私が努力しているのは	みんな知らない。		7	1	1	単一	
II-30 私が忘れられないのは	夢の中の出来事		7	1	1	単一	
特異反応数			6	2	1	2	1

注) 黄色のセルが特異反応となる分析側面である。  
反応内容は特異反応となる項目のみを記載。  
構成は特異反応となる項目に下線を引いて記載。

Figure9 に沿って、この被検査者の反応解釈を試みる。

まず「各刺激語を領域に分類」する。今回はすでに<自己>領域となっているため、記載されているすべての刺激語を対象に分析を行う。

以下では I-1 「子供の頃、私は『掃除が嫌いで部屋が汚かった。今はきれい。』」を例に個々の側面の整理と分析の手順を示す。

次に<各反応の整理>である。I-1 の反応は文字数が 18 文字 (Figure9 「各反応の整理」①)、成分数が『掃除が嫌い』『部屋が汚かった』『今はきれい』の 3 成分 (②) となる。

続いて「反応内容分析」である。分類項目は全 96 項目の<自己>の分類を用いる (①)。『掃除が嫌い』が“過去-自己-評価なし”，『部屋が汚かった』が“過去-事象-否定”，『今はきれい』が“現在-事象-肯定”となり (②)，これは形式的側面だが、それぞれ異なる分類項目に該当するため、内容項目数は 3 となる (②)。これら 3 項目が特異反応となるのかをみると，“現在-事象-肯定”が特異内容項目である。よって、反応内容の観点からみると、当該反応は特異反応といえる (③)。

さらに「反応形式分析」と行う。<各反応の整理>で確認した文字数と成分数、<反応内容分析>で確認した項目数がそれぞれ特異反応に該当するかを確認する。文字数は I-1 「子供の頃、私は」では平均 19.8 文字、特異文字数は 19.2 文字差以上であるため、18 文字は特異反応ではない (①)。成分数も特異成分数は成分数 0 と 4 であるため、該当しない (②)。項目数は成分数 3 と 4 が特異項目数であるため、当該反応は特異反応である (③)。構成は 8 項目のいずれにあたるのかをまず分類する。I-1 の反応は『掃除が苦手』と『部屋が汚か

った』の間に“展開”，さらに『今はきれい』とは“対比”となる。特異構成は“補足”，“転換”，“対比”，“その他”であるため，“対比”が該当し，当該反応は特異反応である(④)。

上記のように，28の刺激語に対して分析を行ったのち，特異反応に対して<解釈>を行う。まず，特異反応の総数についてであるが，反応内容分析からみると，女性の特異反応の総数は平均3.5(3.5の刺激語で特異反応に該当)であるため，6つの刺激語に特異反応がみられる被検査者は，その人が独自の反応をする場面や状況は平均よりも多いといえる。反応形式分析からは，女性の文字数の特異反応総数は平均2.4，成分数が平均1.7，項目数が平均1.0，構成が平均1.8であるため，項目数の特異反応総数2が平均を上回る。反応内容分析及び反応形式分析の項目数は特異反応の数が多ければ多いほど，精神的健康度が低いので，この被検査者の精神的健康度の低さが疑われる。

Figure8にはないが，その他の観点として，反応内容分析による「時々私は(I-22)」は，特異項目数が全28の刺激語中最も少ない。つまり，他の刺激語と比べると限定された特異性をアセスメントする刺激語であり，それによってこの被検査者が検出されたことになる。また，「私の服(I-11)」での特異反応は，全28の刺激語のうち最も該当者が多い。つまり，特異反応になる者が他の刺激語に比べて多く，比較的その特異性は弱いと考えられる。

従来のSCT解釈であると，以下のようなになる。

「この被検査者は，周りに思われている自分と自分自身で認知する自分とが異なっており(I-2)，それは『I-8私が知りたいのは…周囲の目ばかり気になる』や『I-10私がきらいなのは…自分が失敗して周りに迷惑をかけたくない』にあるように，他者にどう思われているのか，悪く思われたくないという思いがあるためと考えられる。そのような思いは，中学時代に人間関係で苦勞した(I-30)ために形成されたのかもしれない。共同作業(I-10)や他者に自分の努力，失敗や恥をさらけ出すことが苦手で(I-4，II-25，II-29)，他者との衝突も回避の傾向にある(I-24)。一方，一人でいるときは自分らしく振舞えていると感じている(I-22)。他者とのつながりを回避するが，「周りに認められたい」という思いも強く(II-17，II-21)，行動と思いがそろわず，他者に対して両価的な感情を抱いているかもしれない。

被検査者自身は絵や小説など創作活動を好むが，うまくいっている感触が持てていない(I-6，I-19)。また，能力や容姿も『並以下』『良くない』としており(I-27，II-15)，自己評価が良くない。さらに，不安になりやすく(II-19)，課題での不安が大きいようである(II-2)。睡眠も浅い(II-9)が，体調はおおむね良い(II-20)。」

反応内容・反応形式分析による解釈だと，以下のようなになる。

「この被検査者は，周りに比べて独自の反応をしやすい傾向，独自の反応をする場面が多いと推察される(反応内容分析・反応形式分析の項目数による特異反応総数が平均よりも多い)。『I-2私はよく人からマイペースだと言われる。』はそれを指していると推察される。

精神的健康面については、低い方に位置する（「精神的健康と関連のある反応内容分析・反応形式分析の項目数での特異反応総数が平均よりも多い」）。

全体に、記述内容と反応分析での所見に合致する点が多く、被検査者の自己認識が正確であることがうかがえる。」

直観法と反応分析法それぞれの所見を比較すると、内容が豊富でその人らしさが伝わるのは、従来の直観法といえるかもしれない。その点については、現段階で特異反応との関連をGHQ28でのみ調査したため、他の指標との関連が認められれば、本分析法でもより情報は豊かになると考えられる。本分析が従来の直観法より優れているのは、周囲との比較によりパーソナリティ傾向の程度を表すことができる点である。従来の解釈では、この被検査者が容姿や能力など様々な面で自己評価の低い人物のように思えるかもしれない。しかし、反応内容分析から、「私の顔（Ⅰ-27）」で『並以下』とするのも、「私の頭脳（Ⅱ-15）」で『良くない』とするのも特異反応ではないことがわかる。つまり、周囲と比較して、特別自己評価が低いわけではない。しかし「私が得意になるのは（Ⅰ-6）」で『でも最近、下手になった』とすることは特異であり、そこがこの被検査者のオリジナルな点、自己評価が低いといえる根拠である。同じように、「私の気持（Ⅱ-19）」で『不安になりやすい』とネガティブな気持ちを記述することは特異反応ではない。したがって、この刺激語での反応を根拠に“不安になりやすい人物”とするのは、尚早といえるかもしれない。

本分析法は相対的に、その反応が特異であるのかをみている。よって、直観法による解釈を修正することもできるし、どの反応がその人らしい反応なのかを浮かび上がらせることができる。

以下に、これら2つの方法を相補的にもちいる解釈を提示する。具体的には、反応分析法によって特異反応を抽出し、その反応を中心に解釈を行う。

「この被検査者は、得意なことでも『下手になった（Ⅰ-6）』と記述するなど、自己評価が低い可能性が高い。自分自身を肯定的に認められないためか、『他人に自分を認めさせること（Ⅱ-17）』を求めているようである。しかし、その思いは『（野心は）強くない』として、自分自身の中でしっかりと意識されていない、前意識段階なのではないかと推察される。また、『Ⅰ-1 子供の頃、私は』でわざわざ“対比”を用いて現在の肯定的な話をする記述は、自分のネガティブ面を打ち消そうとした可能性があり、頻回に用いてはいないようだが、被検査者の特徴的な防衛スタイルの一つであると推察される。さらに、『買うのが面倒（Ⅰ-11）』、『これがとても楽しい（Ⅰ-22）』といった自分自身が抱えている気持ちを積極的に記述するのは、自分のことを知ってほしいという気持ちの表れなのかもしれない。そのような傾向は、自分の志向（Ⅰ-23）や身体（Ⅱ-20）についての記述量が特に多いことから支持される。」

なお、GHQ28との関連の調査で得られた所見を用いると「直観法によって推察された被検査者の内向的で他者の目を気にする傾向が、反応分析によって推察された精神的健康の低さと関係があるかもしれない。」となる。

従来の直観法のみ解釈と比較して、本研究の分析法を併用した解釈では、この被検査者の自己評価が低いことを明確に指摘できると同時に、「前意識段階」「打消しの防衛」など記述にはない被検査者の心的な動きが推察できるといえる。この記述にない被検査者本人も自覚することが難しい心の動きをとらえることこそが、投映法の特徴であり、利点ともいえる。本分析法はその利点を引き出すことができると思われる。

#### 第4節 今後の展開

本論文で行ったSCT反応分析法には、さらに検討を要する点がいくつか残っている。調査研究はもちろん臨床実践で用いられるために、どのような点を検討すべきか、最後に今後の展開を述べる。

まず、本論文では一般の大学生を対象とし、特異反応の抽出、また<自己>領域に関しては臨床的アセスメントへの適用可能性を検証した。<自己>領域の全般的な反応傾向については、調査研究での比較検討に用いる事ができると推察されるが、<家族・家庭>領域の所見は、参加者の少なさから、実際の調査研究での比較対象とするには難しいと考えられる。また<家族・家庭><自己>の両領域にみられた特異反応の傾向や精神的健康との関連に関する所見については、実際の臨床実践での臨床群との違いを考慮し、実際の臨床実践で得られる所見を待たなければならない。また、大学生とは異なる年代に対して、本論文の所見がどれほど適用可能であるか、検討していく必要がある。

本来SCTはパーソナリティ検査であり、その人のパーソナリティを推測するためのツールである。第3章では、臨床的アセスメントへの適用可能性を探るため、精神的健康との関連をみたが、精神的健康はその人のパーソナリティそれ自体を表しているわけではない。精神的健康はその人のパーソナリティと環境の相互作用の“結果”とみるべきであり、むしろその結果に至る様々なパーソナリティ特性や機序をSCT反応分析法はアセスメントできなくてはならない。パーソナリティをアセスメントした結果、その所見が精神的健康と関連している、精神的健康を推察できるというのが、SCTの本来の分析・解釈過程ではないかと思われる。第3章の研究では、女性の反応内容分析と反応形式分析の項目数・構成の分析で特異反応と精神的健康に関連がみられた。しかし、なぜそのような関連がみられるのか、理由や法則性を見出すことが困難であった。それは、特異反応が精神的健康そのものではなく、その背後にある個人特性と関連しているためかもしれない。

パーソナリティ特性や機序をアセスメントするためには、特異反応の有無ではなく、どのような特異反応であったのかを考慮する必要がある。特異反応の有無は、“特異なパーソナリティを持っている可能性があるか否か”以上のことを表すことができない。また、先述したように、刺激語によっては特異反応にもバリエーションがあり、それはその被検査者のパーソナリティの違いを表していると考えられる。「4-3 実際の活用に向けた分析的手続き」で示した本論文の反応分析法と直観法を併用した所見は、まさにその反応の何がどのように特異であるのかを考慮した所見である。その所見の精度を高めるためには、反応分析法による

それぞれの特異反応が何を示すのか、様々なパーソナリティ特性との関連を調査するなどして、明らかにしていく必要がある。特異反応の違いと特性の関連が明らかになれば、それぞれの分析法や刺激語が特異反応によって何を明らかにするのか、それぞれの性質や法則性もみえてくるかもしれない。

分析法の精緻化と同時に、これまで発表されている既存の分析法との異同についても、今後は検証していかななくてはならない。本分析法は他の分析法よりも系統的だが、手数が多し。本分析法による複雑な反応の整理や分析を行うだけの意義があるか、他の分析法との比較が必要である。

本論文では、反応分析法を男女別に施行し、特異反応の抽出も、精神的健康との関連の検証も男女別に行った。しかし、＜家族・家庭＞領域では男女差が認められた指標が、＜自己＞領域では男女差がみられず、領域の問題か被検査者数の問題かを精査しなくてはならない。さらに、昨今認知が進みつつある **LGBTQ** といわれる性的マイノリティに対して、本分析法をどのように適用すべきか、今後の検討で男女差がみられる指標が確認できた場合、性的マイノリティをどのように考えるか、検討していく必要がある。

男女別の分析や、各刺激語の特性を考慮した分析法を求めていくと、分析法自体が非常に煩雑なものになることが懸念される。さらに、その先の解釈においても、詳細な個人特性との関連を検討した結果、関連がみられたとすると、解釈仮説も細かく膨大になるものと思われる。調査研究や臨床実践で実際に使用可能な、また使用しやすい分析法とするためには、可能な限りの分析・解釈手続きの簡略化は必須と考えられる。例えば、文字数の分析と反応成分の分析で得られる解釈が同様のものならば、どちらか一方を採用するという方法が挙げられるであろう。また、個々の分析法により得られる所見を明らかにし、検査目的に合わせて分析する側面を取捨選択する方法も挙げられる。他に、分析法を使用しやすくするための方法として、その被検査者の特異反応をまとめる整理法も有効と考えられる。例えば、60の刺激語あるいはその刺激語領域を通して、その人の特異反応はどの分析側面でみられやすいかを明らかにし、その分析側面で特異反応がみられやすいことを解釈の対象とする方法が挙げられる。この方法は、個々の特異反応を取り上げるのではなく、その人の特異なパターンを取り上げることになる。それによって、その人独自のパターンが起こりやすい理由を推測することとなり、その被検査者が **SCT** 反応を表出する際の、ひいては現実世界で起こりやすいその人独自のこころの動きを推測することができると期待される。さらに、これまで様々な文章完成法テストで行われている刺激語の有用性の検討によって、短縮版の作成も必要かもしれない。つまり、**SCT** 反応分析法の確立に今後必要なことは、分析法や刺激語、特異反応がそれぞれ何を明らかにするのかを精査し、その性質を解明・体系化する、さらに、同一または類似の性質や所見をもつ分析法、刺激語、特異反応をそれぞれまとめることによって、解釈までの手続きを簡潔にすることといえる。手続きの煩雑さは、**SCT** が投映法の中でも特別刺激が多く、豊富な情報を提供する故の弊害といえる。**SCT** に限らず、投映法は分析・解釈手続きが煩雑であるほど所見は細やかとなり、反対に手続きが簡潔であるほど所見は粗くなりやすいものである。“アセスメント所見の細やかさ”と“分析・解釈手続きの簡便さ”

にそれぞれどれほど比重をかければ、調査研究・臨床実践にとって最も実りあるものになるのか、両フィールドでの感覚を磨き、見極めていかななくてはならない。

引用文献

- American Psychiatric Association (2013). *Diagnostic and statistical manual of mental disorders, fifth edition*. American Psychiatric Publishing. (日本精神神経学会 (監修) (2014). DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル. 医学書院)
- Ames, P. C., & Riggio, R. E. (1995). Use of the Rotter Incomplete Sentences Blank with adolescent populations: Implications for determining maladjustment. *Journal of Personality Assessment, 64*(1), 159-167.
- 青野 哲彦・熊代 永・沼田 吉彦 (1983). 文章完成法(SCT)からみた食欲異常症者の心的特性—Anorexia nervosa の分類に関する検討 心身医学, *23*(1), 37-44.
- Archer, R. P., Buffington-Vollum, J. K., Strednym, R.V., & Handel, R. W. (2006). A survey of psychological test usage patterns among forensic psychologists. *Journal of Personality Assessment, 87*, 84-94.
- 有木 永子・水野 康弘・浅川 けい・北島 正人・津川 律子・張 賢徳 (2013). 自殺リスク評価から見た SDS と SCT の関連性: SDS\_Q19 と SCT 刺激語 「自殺」「死」に着目して 臨床精神医学, *42*(6), 797-803.
- Benson, N. F., Floyd, R. G., Kranzler, J. H., Eckert, T. L., Fefer, S. A., & Morgan, G. B. (2019). Test use and assessment practices of school psychologists in the United States: Findings from the 2017 National Survey. *Journal of School Psychology, 72*, 29-48.
- Brown, L. H., & Unger, M. A. (1998). *PAR comprehensive catalog*. Odessa, FL: Psychological Assessment Resources.
- Carter, H. L. (1947). A combined projective and psychogalvanic response technique for investigating certain affective processes. *Journal of consulting psychology, 11*(5), 270-275.
- Cashel, M. L. (2002). Child and adolescent psychological assessment: Current clinical practices and the impact of managed care. *Professional Psychology: Research and Practice, 33*(5), 446-453.
- Churchill, R., & Crandall, V. J. (1955). The reliability and validity of the Rotter Incomplete Sentences Test. *Journal of consulting psychology, 19*(5), 345-350.
- Cromwell, R. L., & Lundy, R. M. (1954). Productivity of clinical hypotheses on a sentence completion test. *Journal of consulting psychology, 18*(6), 421-424.
- 出石 陽子 (2001). 児童養護施設入所児童の心理的側面に関する研究—バウムテストと SCT を中心に— 応用社会学研究, *11*, 61-79.
- Duffy, M. K., Ruegger, L. K., Tiegreen, S. B., & Kurtz, J. E. (2017). Ego development and the internalization of conflict in young adults. *Journal of Adult Development, 24*(1), 40-47.
- Forer, B. R. (1950). A structured sentence completion test. *Journal of Projective Technique, 14*, 15-30.

- Forer, B. R., & Tolman, R. S. (1952). Some characteristics of clinical judgment. *Journal of consulting psychology, 16*(5), 347-352.
- 深津 千賀子 (2008). SCT 小川俊樹(編) 現代のエスプリ別冊 投映法の現在. (pp.132-142) 至文堂.
- Fuller, G. B., Parmelee, W. M., & Carroll, J. L. (1982). Performance of delinquent and nondelinquent high schools boys on the Rotter Incomplete Sentence Blank. *Journal of personality assessment, 46*(5), 506-510.
- 古屋 健 (1993). 都市化社会における家族の変容——非行少年の家族イメージを手がかりに—— 社会科学討究, *39*(2), 691-720.
- Getter, H., & Weiss, S. D. (1968). The Rotter incomplete sentences blank adjustment score as an indicator of somatic complaint frequency. *Journal of projective techniques & personality assessment, 32*(3), 266.
- Grinina, E. S. (2019). Emotional State Features in Women Raising Children with Developmental Disorders. *RUDN Journal of Psychology and Pedagogics, 16*(2), 196-212.
- Guertin, W. H. (1959). An analysis of gross errors on a sentence completion test. *Journal of Clinical Psychology, 15*, 414-416.
- Harper, J. F., & Marshall, E. (1991). Adolescents' problems and their relationship to self-esteem. *Adolescence, 26*(104), 799-808.
- 橋本 泰子・雲井 千香子 (2007). 青年女子における愛着タイプに関する心理研究——自立尺度,SCT,バウムテスト—— 桜美林論集, *34*, 157-167.
- Helson, R., & Wink, P. (1987). Two conceptions of maturity examined in the findings of a longitudinal study. *Journal of Personality and Social Psychology, 53*(3), 531.
- 平野 真理・那須川 哲哉 (2020). 文章完成法テストの臨床的有用性を高める人工知能システム活用の試み: 希死念慮を持つ患者の文章から推定されるビッグファイブ性格特性 精神医学, *62*(9), 1269-1275.
- 櫃田 紋子 (1998). 風景構成法と SCT の関連に関する一考察 湘南短期大学紀要, *9*, 323-334.
- Holaday, M., Smith, D., & Sherry, A. (2000). Sentence completion tests: A review of the literature and results of a survey of members of the Society for Personality assessment. *Journal of Personality Assessment, 74*, 371-383.
- Holsopple, J. Q., & Miale, F.R. (1954). *Sentence completion: A projective method for the study of personality*. Springfield, IL: Thomas.
- 法務省矯正局編 (1965). 法務省式文章完成法 解釈手引き 法務省矯正局.
- 堀越 千知・横田 正夫 (2005). いじめ把握に有効な SCT 項目の検討. 日本教育心理学会総会発表論文集, *47*, 573.
- 池田 由子・河野 洋二郎・西川 祐一・上林 靖子・今田 芳枝・田中 千穂子・中川 幸・森岡 恵・須賀 芳枝・平田 雅子・佐藤 至子 (1982). 中学生の精神衛生に関する研究

- 3-文章完成法テスト 精神衛生研究, 29, 25-38.
- 今川 民雄 (1982). 文章完成法テストの刺激文のあいまいさについて 情緒障害教育研究紀要, 1, 80-85.
- Indow, T., Sano, K., Namiki, H., & Makita, H. (1962). A mathematical model for interpretation in projective tests: An application to Seiken SCT1. *Japanese Psychological Research*, 4(4), 163-172.
- Ishanov, S. A., Osin, E. N., & Kostenko, V. Y. (2018). Personality Development and the Quality of Solitude. *Cultural-Historical Psychology*, 14(1), 30-40.
- 石井 明子 (2013). 文章完成法(SCT). 八尋 華那雄(監修) 臨床心理学の実践 アセスメント・支援・研究 (pp.111-133) 金子書房.
- 石井 明子 (2016a). SCTの反応内容分析法の試み——時制・対象・評価に着目して——. ロールシャッハ法研究, 20, 42-49.
- 石井 明子 (2016b). SCTの自己に関する反応内容分析の試み. 日本ロールシャッハ学会第20回大会プログラム・抄録集, 47.
- 石井 明子 (2017). SCT反応の形式分析法の試み. ロールシャッハ法研究, 21, 10-17.
- 石井 明子 (2019). 文章完成法テスト反応内容分析法の有用性の検討: SCT 自己領域とGHQ28の関連から. ロールシャッハ法研究, 23, 10-17.
- 石井 明子・鈴木 睦夫 (2010). 反応の出現頻度による精研式 SCT 解釈指標に関する研究——家族イメージ査定の観点から(その1)—— 中京大学心理学研究科・心理学部紀要, 9(2), 43-56.
- 伊東 真里 (2010). 心身症状をもつ子どもの心理的特性に関する検討: 文章完成法テスト(SCT)による分析 小児の精神と神経, 50(1), 35-42.
- 岩熊 史郎 (2003). パーソナリティの認知過程(1) ——SCT(文章完成法テスト)のメタ反応の分析—— 日本社会心理学会第44回大会発表論文集, 44, 754-755.
- 岩熊 史郎 (2004). パーソナリティの認知過程(2) ——SCTのメタ反応の内容分析—— 日本パーソナリティ心理学会第13回大会発表論文集, 13, 60-61.
- 岩熊 史郎 (2006). パーソナリティの認知過程(3) ——認知主体の選択的注意—— 日本社会心理学会第47回大会発表論文集, 47, 60-61.
- 岩熊 史郎 (2007). パーソナリティの認知過程(4) ——情報選択とパーソナリティ判断との関係—— 日本社会心理学会第48回大会発表論文集, 48, 676-677.
- 岩熊 史郎 (2008). パーソナリティの認知過程(5) ——パーソナリティ認知の決定要因としての情報選択—— 日本社会心理学会第49回大会発表論文集, 49, 212-213.
- 岩熊 史郎 (2009). パーソナリティの認知過程(6) ——根拠情報とパーソナリティ判断との関係—— 日本パーソナリティ心理学会第18回大会発表論文集, 18, 194-195.
- 岩熊 史郎 (2010). パーソナリティの認知過程(7) ——認知主体の類型化—— 日本パーソナリティ心理学会第19回大会発表論文集, 19, 60.
- Jha, M., & Sharma, V. (2015). Dissociative fugue disorder: Identification and psychological

- intervention. *Psychological Studies*, 60(1), 17-24.
- 神 高雄・大伴 公馬・林 信男 (1962). 文章完成法テストの標準化の試み(1)——性別による比較考案—— 日本心理学会第 26 回大会発表論文集, 272.
- Joy, S. P. (2017). Reading personality: Assessing “big three” traits with the sentence completion method. *Current Issues in Personality Psychology*, 5(4), 215-231.
- 甲斐 裕子 (1985). 登校拒否児の自己認知 情緒障害教育研究紀要, 4, 51-54.
- 片口 安史 (1964). 臨床家のための心理検査 精神心身医学, 4(5), 270-274.
- 片口 安史 (1974). 改訂 新・心理診断法 ロールシャッハ・テストの解説と研究 金子書房.
- 片口 安史・早川 幸夫 (1989). 構成的文章完成法 (K-SCT) 解説 日本総合教育研究会.
- 加藤 実 (1967). SCTにおける無応答の分析 心理学研究, 6, 3-10.
- 桂 戴作・栗山 浩子・長谷川 徹・山口 道也・山田 利子・森下 淳夫・中島 重徳・萩原 忠文 (1972). 気管支喘息の心身医学的観察(その 14) : SCT を利用して調査した喘息患者生活構造の一端について 精神身体医学, 12(5), 319-320.
- 河野 洋二郎・池田 由子・西川 祐一・上林 靖子・今田 芳枝・田中 千穂子・中川 幸・森岡 恵・須賀 芳枝・平田 雅子・佐藤 至子 (1983). 文章完成法テストからみた中学生の人格発達 日本教育心理学会総会発表論文集, 25, 374-375.
- 岸本 寛史 (2015). バウムテスト入門: 臨床に活かす 「木の絵」 の読み方 誠信書房.
- 岸本 直子・根来 秀樹・澤田 将幸・紀本 創兵・太田 豊作・定松 美幸・飯田 順三・岸本 年史 (2012). アスペルガー症候群の青年の自己意識: 文章完成法を中心に 青年心理学研究, 24(1), 5-14.
- 北島 正人・水野 康弘・有木 永子・浅川 けい・津川 律子・張 賢徳 (2014). 風景構成法 (LMT) と自己評価式抑うつ性尺度 (SDS) および文章完成法テスト (SCT) との関連: LMT における構成の型と色彩の程度・種類に着目した自殺のリスク評価 秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要, 36, 193-202.
- 小林 哲郎 (2004). SCT(文章完成法) 氏原 寛・亀口 憲治・成田 善弘・東山 紘久・山中 康裕 (編) 心理臨床大辞典 改訂版 (pp543-548) 培風館.
- 駒崎 勉 (1979). パーソナリティテストとしての SCT に関する一考察: 特に応用とその解釈をめぐって 西人文研究 城西大学経済学会, 6, 15-27.
- 近藤 弓末・西野 順二・小高 知宏・小倉 久和 (1997a). 日本語コーパスを使用した文章完成テストの解析 全国大会講演論文集 第 54 回平成 9 年前期, 2, 35-36.
- 近藤 弓末・西野 順二・小高 知宏・小倉 久和・崎畑 広昭・横尾 摂子 (1997b). 日本語コーパスを使用した文章完成テストの表層的解析 電子情報通信学会論文誌. A 基礎・境界, J80-A(6), 1038-1041.
- 黒田 浩司 (2012). SCT 津川律子(編) 投映法研究の基本講座 (pp.139-152) 遠見書房.
- 熊野 道子 (2006). 自己開示傾向の高低による文章完成法での反応の相違. 心理学研究, 77(4), 360-365.
- Lah, M. I. (1989). New validity, normative, and scoring data for the Rotter Incomplete

- Sentences Blank. *Journal of Personality Assessment*, 53(3), 607-620.
- Loevinger, J. (1976). *Ego development: Conceptions and theories*. San Diego, CA: Jossey-Bass.
- Loevinger, J. & Wessler, R. (1970). *Measuring Ego Development I*. San Diego, CA: Jossey-Bass.
- Loevinger, J., Wessler, R., & Redmore, C. (1970). *Measuring Ego Development II*. San Diego, CA: Jossey-Bass.
- Logan, R. E., & Waehler, C. A. (2001). The Rotter Incomplete Sentences Blank: Examining Potential Race Differences. *Journal of personality assessment*, 76(3), 448-460.
- 槇田 仁・伊藤 隆一 (1993). 精研式文章完成法テスト(SCT)評価と評定者のパーソナリティの関係について 組織行動研究, 25, 73-95.
- 槇田 仁・小林 ポオル・岩熊 史朗 (1997). 文章完成法 (SCT) によるパーソナリティ診断 手引き 金子書房.
- 槇田 仁・小林 ポオル・渡辺 秀樹・岩熊 史朗・西村 麻由美 (1992). 現代日本人の生き方——生活観の構造と変容 その1—— 組織行動研究, 22, 3-129.
- 槇田 仁・小林 ポオル・渡辺 秀樹・岩熊 史朗・西村 麻由美 (1993). 現代日本人の生き方——生活観の構造と変容 その2—— 組織行動研究, 23, 3-170.
- 槇田 仁・佐野 勝男・袴田 明・大久保 康彦 (1956). 文章完成法テストの諸形式について——長文式, 少年用(BG版), 非行少年用(DL版)並びに再試行の可能性—— SCTの研究その3 神医学研究所業績集, 3, 147-161.
- Mihura, J. L., Roy, M., & Graceffo, R. A. (2017). Psychological assessment training in clinical psychology doctoral programs. *Journal of Personality Assessment*, 99(2), 153-164.
- 南 久美子・野添 新一 (2008). 摂食障害患者の文章完成法 (Sentence Completion Test, SCT) から見た家族関係と遷延化に関する検討 日本女性心身医学会雑誌, 13(3), 127-134.
- 宮下 一博・上地 雄一郎 (1981). Loevinger の自我発達理論——理論の概要とその測定法の我が国への導入—— 広島大学教育学部紀要 第1部, 30, 225-235.
- 水野 康弘・有木 永子・浅川 けい・北島 正人・津川 律子・張 賢徳 (2013). Suicide Constellation (S-CON) と文章完成法テスト (SCT) の「自殺」および「死」に関する記述の関連性. 包括システムによる日本ロールシャッハ学会誌, 17(1), 29-37.
- 中川 泰彬・大坊 郁夫 (1985). 日本版 GHQ 精神健康調査表手引き 日本文化科学社.
- 中山 哲哉 (2007). 非行傾向のある子どもの心性における今と昔——文章完成法テストを用いた比較—— 吉備国際大学社会福祉学部研究紀要, 12, 37-43.
- Novy, D. M., & Francis, D. J. (1992). Psychometric properties of the Washington University Sentence Completion Test. *Educational and psychological measurement*, 52(4), 1029-1039.

- 大日方 重利・小西 美佳 (1987). SCTによる登校拒否児の心理診断および指導過程の研究(I) 大阪教育大学教育研究所報, 22, 51-56.
- 大日方 重利・小西 美佳 (1988). SCTによる登校拒否児の心理診断および指導過程の研究(II) 大阪教育大学紀要, IV, 教育科学, 37(1), 35-45.
- 長田 暢子 (2015). SCT(文章完成法)にあらわれる抑うつ傾向 心理臨床センター紀要, 10, 25-33.
- Peterson, C. H., Lomas, G. I., Neukrug, E. S., & Bonner, M. W. (2014). Assessment use by counselors in the United States: Implications for policy and practice. *Journal of Counseling & Development, 92*(1), 90-98.
- Picano, J. J., Roland, R. R., Rollins, K. D., & Williams, T. J. (2002). Development and validation of a sentence completion test measure of defensive responding in military personnel assessed for nonroutine missions. *Military Psychology, 14*(4), 279-298.
- Piotrowski, C. (2015). On the decline of projective techniques in professional psychology training. *North American Journal of Psychology, 17*(2), 259-266.
- Redmore, C., & Waldman, K. (1975). Reliability of a sentence completion measure of ego development. *Journal of personality assessment, 39*(3), 236-243.
- Rohde, A. R. (1946). Explorations in personality by the sentence completion method. *Journal of Applied Psychology, 30*, 169-181.
- Rotter, J. B., & Rafferty, J. E. (1950). *Manual: The Rotter incomplete sentences blank : college form*. New York: Psychological Corporation.
- Rotter, J. B. (1951). Word association and sentence completion methods. In G.M. Anderson, & H. H. Anderson (Eds.), *An introduction to projective techniques* (pp.279-311). New York: Prentice-Hall.
- Rotter, J. B., Rafferty, J. E., & Lotsif, A. B. (1954). The validity of the Rotter incomplete sentences blank: high school form. *Journal of consulting psychology, 18*(2), 105-111.
- Rotter, J. B., Rafferty, J. E., & Schachtitz, E. (1949). Validation of the Rotter incomplete sentences blank for college screening. *Journal of consulting psychology, 13*(5), 348-356.
- Rotter, J.B., & Willerman, B. (1947). The incomplete sentences test as a method of studying personality. *Journal of Consulting Psychology, 11*, 43-48.
- Rozytko, V. V. (1959). Social desirability in the sentence completion test. *Journal of Consulting Psychology, 23*(3), 280.
- Sacks, J. M. (1949). The relative effect upon projective responses of stimuli referring to the subject and of stimuli referring to other persons. *Journal of consulting psychology, 13*(1), 12-21.
- Sacks, J. M., & Levy, S. (1950). The Sentence Completion Test. In E. Lawrence, & L. Bellak (Eds.), *Projective psychology: Clinical approaches to the total personality* (pp. 357-402). New York: Knopf.

- 佐野 勝男・榎田 仁 (1954). 文章完成法テストの研究 その 1—その特性づけと test-battery に於ける位置— 精神医学研究所業績集, 1, 58-89.
- 佐野 勝男・榎田 仁 (1956a). 文章完成法テストの史的瞥見並びに評価項目の設定 SCT の研究その 2 神医学研究所業績集, 3, 136-146.
- 佐野 勝男・榎田 仁 (1956b). 精研式文章完成法の評価方法 精神医学研究.
- 佐野 勝男・榎田 仁 (1960). 精研式文章完成法テスト解説 成人用 金子書房.
- 佐野 勝男・榎田 仁 (1972). 精研式文章完成法テスト解説 (新訂版) 成人用 金子書房.
- 佐野 勝男・榎田 仁・坂村 裕美・白土 久美子 (1960). 少年用文章完成法テスト (SCTBG 版)の改訂—小学生用の作製— SCTの研究その 5 精神医学研究所業績集, 7, 103-117.
- 佐野 勝男・榎田 仁・山本 裕美 (1987). 精研式文章完成法テスト解説 小・中学生用 金子書房
- 佐々木 正宏 (1981). SCT による女子青年の自我発達の測定 教育心理学研究, 29(2), 147-151.
- 佐藤 美和子・古屋 健・石井 創一 (1991). 非行少年の家族関係Ⅱ—SCT にあらわれた家族関係— 日本教育心理学会総会発表論文集, 33, 371-372.
- Sitnik-Warchulska, K. (2016). Self-image and suicidal and violent behaviours of adolescent girls. *Health Psychology Report*, 4(4), 303-314.
- Smith, R., Quinlan, D., Schwartz, G. E., Sanova, A., Alkozei, A., & Lane, R. D. (2019). Developmental contributions to emotional awareness. *Journal of personality assessment*, 101(2), 150-158.
- Smith, R. M. (1963). Sentence completion differences between intellectually superior boys and girls. *Journal of Projective Techniques and Personality Assessment*, 27(4), 472-480.
- Snarey, J., & Lydens, L. (1990). Worker equality and adult development: The kibbutz as a developmental model. *Psychology and Aging*, 5(1), 86.
- 曾野 佐紀子 (1971). 他者のパーソナリティ把握における判断現象の分析—文章完成法テスト(SCT)を用いての Person Perception の一研究— 心理学研究, 42(4), 185-196.
- 曾野 佐紀子・伯井 隆義 (1971). 他者のパーソナリティ把握における判断現象の分析—「文章完成法テスト(SCT)を用いて」— 佐野勝男・榎田 仁 共著 精研式文章完成法テスト解説 (新訂版) 成人用 (pp185-193) 金子書房.
- Sutton, P. M., & Swensen, C. H. (1983). The reliability and concurrent validity of alternative methods for assessing ego development. *Journal of Personality Assessment*, 47(5), 468-475.
- 鈴木 睦夫 (1997). TAT の世界—物語分析の実際— 誠信書房.
- 鈴木 睦夫 (2000). TAT パーソナリティ—26 事例の分析と解釈の例示— 誠信書房.
- 鈴木 睦夫 (2012). 絵解き法 (TAT) のすすめ 中京大学心理学研究科・心理学部紀要, 12(1), 11-159.

- 武内 信子 (1986). SCT による女学生の意識分析——家族関係, 恋愛, 結婚, 男性・女性観—— 紀要, *10*(1), 1-10.
- 玉井 寛・三浦 公一・横山 泉・野間 将平・桜井 裕子 (2009). 自己意識の年齢による変化 1——SCT(文章完成法テスト)の応用—— 福島学院大学研究紀要, *41*, 69-75.
- Tendler, A. D. (1930). A preliminary report on a test for emotional insight. *Journal of Applied Psychology*, *14*, 122-136.
- 寺嶋 繁典・西藤 菜奈子・香川 香・吉川 征延・二宮 ひとみ (2013). 文章完成法 (SCT) の内容分析 関西大学臨床心理専門職大学院紀要, *3*, 41-50.
- Torstrick, A., McDermut, W., Gokberk, A., Bivona, T., & Walton, K. E. (2015). Associations between the Rotter Incomplete Sentences Blank and measures of personality and psychopathology. *Journal of personality assessment*, *97*(5), 494-505.
- 土橋 拓真 (2015). 精研式文章完成法を用いた自我発達水準の測定 心理臨床センター紀要, *10*, 25-33.
- Vincent, N., Denson, L., & Ward, L. (2015). Triggers, timing and type: Exploring developmental readiness and the experience of consciousness transformation in graduates of Australian community leadership programs. *Journal of Adult Development*, *22*(4), 183-205.
- 渡辺 福 (1970). 小児肥満症の臨床的研究: 第II編 心理的観察 千葉医学会誌, *46*, 171-179.
- 渡辺 雅之・山本 里花 (1989). 文章完成法による自我発達検査の作成: Loevinger の WU-SCT の翻案とその簡易化 教育心理学研究, *37*(3), 286-292.
- Watkins, C. E., Campbell, V. L., Nieberding, R., & Hallmark, R. (1995). Contemporary practice of psychological assessment by clinical psychologists. *Professional Psychology: Research and Practice*, *26*(1), 54.
- Weiss, R., Toolis, E. E., & Cerankosky, B. C. (2008). Construct validity of the Rotter incomplete sentences blank with clinic-referred and nonreferred adolescents. *Journal of Personality Assessment*, *90*(6), 564-573.
- Westenburg, P. M., & Block, J. (1993). Ego development and individual differences in personality. *Journal of Personality and Social Psychology*, *65*(4), 792.
- 山田 英美 (1977). 文章完成法検査にみられる施設生活児童の心理-1- 同朋大学論叢, *36*, 115-140.
- 山田 良一 (1977). 生育環境と人格形成の問題: ——SCT による施設児と家庭児の比較を通して—— 山梨大学教育学部研究報告 第一分冊 人文社会科学系, *28*, 188-199.
- 山本 久仁子 (1968). 文章完成法テスト(SCT)の判定基準作成について——その 2—— 臨床心理学会第 4 回大会抄録集, 171.

## 要旨

精研式文章完成法テスト（以下、SCT）とは、提示された刺激語に対して連想されることをそれらに続けて記述し、文章を完成させる投映法検査である。本邦で最も使用されている精研式SCTは、その分析・解釈に直観法が用いられている。直観法が、被検査者理解に有用な方法であることは疑いえない。しかし、そのみでは、解釈が検査者の独断・恣意的であるという批判や被検査者の社会的望ましさによる回答の歪曲の影響を免れない。そこで多くの投映法がそうであるように、SCTにも、系統的で定式化された分析法が必要と考えられ、そのような分析法の立案が本論文の目的であった。

第1章では、これまでのSCTの分析法に関する研究を概観した。これまで分析法はいくつか存在するが、広く用いられるまでには至っていないこと、一方、SCTを用いた調査研究では、SCT反応の分析に反応分類が用いられることが多く、分類は主に評価・具体的反応内容・反応様式の観点から行われてきたことが示された。よって、本論文では、調査研究で用いられてきた反応分類を用いて、調査研究と臨床実践ともに用いることのできる包括的かつ定式的な分析法の立案を目指した。

第2章では、反応分析法の試案を提示した。研究1では、SCT反応を可能な限り不足なく分類できるよう、複数の観点から反応を分類する反応分析法の試案を提示した。家族・家庭領域の11語を対象に、時制、対象、評価、構成の4つの観点にそれぞれ分類項目を設け、大学生200名の反応を実際に分類して項目ごとの出現率を算出した。その結果、反応を分類しきることが可能であり、分析法として採用できると考えられた。また、各刺激語の出現率の現れ方から、その反応が個性的な反応であるかを決定するには、出現率の低い分類項目である低頻出項目に当てはまるか否かを基準にした方がよいと考えられた。

研究2では、研究1で扱った分類のうち、反応内容に関する時制・対象・評価の3軸を組み合わせた120項目の分類項目を設定し、反応内容分析法として、52名の大学生の家族・家庭領域の刺激語への反応の分類を行った。その際、相対的に出現率の低い項目を特異項目、それに当てはまる反応を特異反応とした。研究2から、(1)男女で最も特異となりやすかった内容項目が異なる場合、家族・家庭領域によって捉えられる特異性が異なる、あるいは同じ特異性が異なる形で現れることを意味する、(2)刺激語によって検出する特異性の程度が異なる、(3)特異反応を表出する人数の割合が同じであるということは、そこで検出する特異性の程度も同等と考えられる、(4)〈家族・家庭〉領域を通して特異反応を記述した者の比率や1人あたりの特異反応総数から、男女どちらが特異反応を検出しやすいかが推察される、(5)ある同じ特徴を持つ集団に共通して特異反応がみられる刺激語はその特徴を反映する刺激語と推察される、などが考えられた。

研究3では、研究1で扱わなかった構成の観点からの反応分類、さらに反応形式に関する文字数・成分数・内容項目数を加え、4側面からなる反応形式分析として、特異反応抽出を行った。特異反応は、文字数では平均からかけ離れたものとした。成分数・内容項目数ではそれぞれの出現数の出現率が、構成では分類項目の出現率が、それぞれ相対的に低い出現数・構成項目を特異反応とした。研究3から、(1)男性は女性より反応が簡潔であること、

(2) それぞれの分析側面で特異性の多様さ、その特異性の検出力、またその特異性の程度の弱さが推察できる可能性があること、(3) 文字数では、特異-非特異反応の弁別力を推察できる可能性があること、(4) 内容項目数に関して、男女差や刺激語間の差が表れづらく、特異性を検出しづらいが、それゆえ強い特異性を検出すると考えられること、(5) その人の11の刺激語に見られる特異反応の現れ方によって、特異性の広さと深さを推測できる可能性があること、が示唆された。

研究2・3から、上記の方法によって反応内容分析・形式分析が可能であることは示された。これらの分析法が臨床的アセスメントに有用なものにするためには、参加者数を増やすこと、男女別に分析を行うこと、特異反応が何を表すのか、臨床的アセスメントに有効であるのかを明らかにすることが必要と考えられた。

第3章では、参加者数を増やし、男女別に反応内容分析・反応形式分析を行い、分析法や特異反応の特徴について考察を行った。さらに、今後の展開として、臨床的アセスメントへの適用可能性を検証した。

研究4では、被検査者数を195名に増やし、＜自己＞領域の28の刺激語を対象に、反応内容分析を行った。分類項目は、時制・対象・評価を組み合わせたものであり、対象のみ新たに分類項目を設定した。それら分類項目を組み合わせた96項目に反応を分類し、出現率から特異反応を抽出した。また、被検査者の精神的健康度を日本語版精神健康調査票(The General Health Questionnaire) 28項目版(以下、GHQ28)を用いて調べ、特異反応との関連を調査した。研究4から、(1) 各刺激語が検出する特性や特異性の多様さに男女差は見られず、それらの違いは刺激語の特性による、(2) 特異項目の多様さ(特異項目数)を決定するのは出現項目数だけではない、(3) 検出する特異性の多様さ、特異性の検出力、特異性の程度、自己領域で検出しやすい特性/特異性を推察する指標がある、と考えられた。また、女性は特異反応が多いほど精神的健康度が低いという結果が得られたが、男性では関連がみられなかった。

研究5では、反応形式分析の特徴を検証するため、研究4の反応内容分析を形式分析に変えて同様の手続きを行った。

研究5-1では、＜自己＞領域に反応形式分析を行い、特異反応を抽出した。その結果、(1) 文字数・成分数・内容項目数に関して、全体にも刺激語別にも平均に男女差はみられなかった、構成についても、出現構成項目の数に男女差はみられなかった、(2) 特異反応に関して、自己領域全体でも各刺激語でも、特異性の検出力、検出される特異性の程度と考えられる指標が考えられ、それぞれ男女差はみられず、また各刺激語の特異性の多様さと考えられる指標にも男女差はみられなかった、(3) 4側面を合わせると、自己領域における、その人の特性の広さと深さを推察できると考えられる指標もあり、それぞれ男女差はみられなかった。

研究5-2では、研究5-1で抽出された特異反応総数と精神的健康との間に関連があるか、GHQ28との関連から調査した。その結果、(1) 文字数と成分数に関しては、特異反応総数と精神的健康に関連がみられなかった、(2) 内容項目数と構成に関しては、女性の特異

反応総数と精神的健康に関連がみられ、自己領域で特異反応を表出するほど、精神的健康は低かった。これらの結果から、研究 5-1 より男女で同等の特異性を検出している可能性が示唆されたため、男女で異なる結果となった内容項目数と構成では、男女で異なる特異性を検出しているのではないかと考えられた。また、関連がみられた側面、見られなかった側面があるということは、各側面の検出する特異性が別の内容を指している可能性を示唆し、各側面を分析法として採用することに意味があるのではないかと考えられた。

研究 4・5 から、反応分析による特異反応抽出において、男女で差がみられた所見はなく、男女別の分析が必要であるか、刺激語間の検討が必要であることが示唆された。また、特異反応総数と精神的健康の関連から、サンプルの精神的健康度を等質にし、男女で結果に違いがみられるかを検討することが必要とされた。さらに、特異反応総数以外の指標についても検討することが必要とされた。

第 4 章は総合考察を行った。研究 1～5 の所見から、反応の出現率の算出及び特異反応の抽出を行ったことによって、“多様な個性／特異性を引き出しやすい”、“検出する特異性の程度が強い”など、領域全体あるいは各刺激語、各分析側面の特性が推察された。また、出現した反応ないし特異反応の量的側面について、反応内容分析、形式分析通して男女差がみられた所見はなく、男女分けて分析を行う必要があるか、再検討が必要となった。さらに、女性の反応内容分析、反応形式分析の内容項目数と構成の分析による特異反応は精神的健康との関連を確認することができたが、男性ではそのような所見がみられず、その男女の違いが何を表すのか検討を要するとされた。

本研究では特異反応が何を表すのかを明確にすることはできない。しかし、その反応が特異であること、そしてどこがどのように特異で、その特異性の程度がどれほどかを推察することはできる。実際にこれらの視点を導入して SCT 反応を解釈すると、従来の直観法による解釈と相補的に用いることで、被検査者のパーソナリティがより鮮明に捉えやすくなると考えられた。また、反応分析法により、どの反応がよりその被検査者らしさを表す反応なのか、周囲の同年代の反応と比較する視点が与えられることで、直観法の解釈を修正することができると考えられた。今後の展開として、(1) 他の年齢群や実際の臨床実践で得られる臨床データを対象として、分析法の適用可能性を検証すること、(2) 精神的健康より詳細な個人特性と特異反応との関連を検討し、特異反応表出の意味を明確にすること、(3) 特異反応の有無だけでなく、特異反応の違いが何を表すのかを明確にすること、(4) 既存の分析法との比較によって、本分析法の意義を明らかにすること、(5) 男女の異同、刺激語間の異同を明らかにすること、(6) 男女だけでなく、性的マイノリティに対する分析法の適用を考慮すること、が必要であると考えられた。最後に、詳細な所見と簡便な分析・解釈法をどのように両立させることができるかを今後も考えていく必要があるとされた。

## 謝辞

本稿を作成するにあたり、多くの方のご指導とご支援・ご協力をいただきました。

中京大学心理学部教授の神谷栄治先生、明翫光宜先生には、私の中京大学在学時より講義などをご指導いただき、本稿の完成にあたり快く指導を引き受けてくださいました。丁寧かつ的確にご教授いただき、大変勉強になりました。また学位請求論文審査委員として馬場史津先生、川島大輔先生には、多くのご意見・ご助言をいただきました。先生方に厚く御礼申し上げます。

名古屋大学名誉教授の辻敬一郎先生には、特に博士後期課程に進学した後、研究計画から論文執筆まで幅広くご指導いただきました。先生からの叱咤激励は、当該研究に限らず、「心理学とは」、「研究とは」、「学問とは」に向き合う姿勢を正して下さっていたと観じます。また、指導教員亡き後の私の状況を気にかけてくださり、多くのお力添えをいただきました。先生もご参加の研究会グループのメンバーである中京大学心理学部の樋水秀和先生をはじめ中京大学心理学研究科の先輩・後輩の皆様には、いつも貴重なご助言と励ましをいただきました。厚く御礼申し上げます。

東海学園大学の河野順子先生には調査協力者の募集にあたり、勤務校に研究許可を取り付けてくださり、時に研究論文の執筆にアイデアをくださいました。同校の先生方には、倫理委員会申請にあたりご教授くださった先生方や本稿執筆の進捗を気にかけてくださった先生方など、様々な面から公私にわたりサポートをいただきました。厚く御礼申し上げます。

中京大学名誉教授の八尋華那雄先生には、博士後期課程を退学するまでの約2年半、指導教員としてご指導くださいました。途中からゼミ生になったにも関わらず、気を張らずに院生を続けることができ、その時があって、本稿の完成に至ったと思います。心より感謝申し上げます。

中京大学心理学部教授であった故鈴木睦夫先生には、学部生の時から指導教員としてご指導いただきました。本稿にある研究も先生との共同研究のはずでした。研究に興味を持った私に、その力量を度外視して可能性を開いてくださったこと、厳しくも対等に妥協なく指導してくださったこと、心より感謝申し上げます。

最後に、本稿にある調査研究にご協力くださった調査協力者の皆様に心より感謝申し上げます。励ましの言葉を調査票に残してくださるなど、うれしく思うこともありました。本稿が完成したのも、協力してくださった皆様のおかげです。

## 付録

TableA 反応内容分析による自己領域の出現項目数  
The number of appeared items on the field of self by content analysis

	I-1	I-2	I-4	I-6	I-8	I-10	I-11
男性 女性	男性 女性	男性 女性	男性 女性	男性 女性	男性 女性	男性 女性	男性 女性
出現項目数	15 14	14 16	17 15	9 14	14 17	15 17	13 17
非出現項目数	81 82	82 80	79 81	87 82	82 79	81 79	83 79
	I-14	I-19	I-22	I-23	I-24	I-27	I-30
男性 女性	男性 女性	男性 女性	男性 女性	男性 女性	男性 女性	男性 女性	男性 女性
出現項目数	14 12	16 18	12 13	15 14	19 16	17 17	20 19
非出現項目数	82 84	80 78	84 83	81 82	77 80	79 79	76 77
	II-2	II-4	II-5	II-9	II-14	II-15	II-17
男性 女性	男性 女性	男性 女性	男性 女性	男性 女性	男性 女性	男性 女性	男性 女性
出現項目数	16 26	11 13	12 15	20 13	18 12	13 15	15 12
非出現項目数	80 70	85 83	84 81	76 83	78 84	83 81	81 84
	II-19	II-20	II-21	II-25	II-27	II-29	II-30
男性 女性	男性 女性	男性 女性	男性 女性	男性 女性	男性 女性	男性 女性	男性 女性
出現項目数	19 20	20 20	22 19	13 14	12 11	9 10	15 21
非出現項目数	77 76	76 76	74 77	83 82	84 85	87 86	81 75

TableB 反応内容分析による自己領域の出現特異項目数  
The number of appeared specific items on the field of self by content analysis

	I-1	I-2	I-4	I-6	I-8	I-10	I-11
男性	9	8	11	6	7	9	7
女性	5	6	6	3	5	6	6
出現特異項目数	9	10	8	9	9	11	10
出現非特異項目数	6	5	7	7	8	6	7
	I-14	I-19	I-22	I-23	I-24	I-27	I-30
男性	9	8	6	10	11	10	9
女性	5	4	6	5	7	7	5
出現特異項目数	8	10	8	9	9	9	7
出現非特異項目数	5	7	7	5	8	8	11
	II-2	II-4	II-5	II-9	II-14	II-15	II-17
男性	8	5	6	12	13	7	8
女性	13	7	7	9	7	7	7
出現特異項目数	8	6	6	8	5	6	7
出現非特異項目数	8	13	8	4	5	8	5
	II-19	II-20	II-21	II-25	II-27	II-29	II-30
男性	10	11	8	6	6	5	8
女性	9	10	10	6	6	6	9
出現特異項目数	9	11	10	7	8	4	7
出現非特異項目数	11	9	10	8	6	5	12

TableC 反応内容分析による自己領域の特異反応表出人数  
The number of people having specific responses on the field of self by content analysis

	I-1	I-2	I-4	I-6	I-8	I-10	I-11
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性
特異反応表出人数	16	15	12	14	7	14	11
非特異反応表出人数	75	89	79	90	84	90	80
	80	91	76	88	78	87	78
	87						
	I-14	I-19	I-22	I-23	I-24	I-27	I-30
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性
特異反応表出人数	11	16	11	11	12	15	12
非特異反応表出人数	80	88	80	93	80	92	79
	89	80	92	79	89	79	92
	82	94	80	93	80	93	82
	94						
	II-2	II-4	II-5	II-9	II-14	II-15	II-17
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性
特異反応表出人数	13	12	8	14	10	15	13
非特異反応表出人数	78	92	83	90	81	89	78
	90	83	90	78	90	79	92
	81	92	85	94	81	92	81
	92						
	II-19	II-20	II-21	II-25	II-27	II-29	II-30
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性
特異反応表出人数	10	11	15	14	10	11	10
非特異反応表出人数	81	93	76	90	81	93	81
	95	81	95	81	95	81	95
	80	95	84	90	80	95	80
	95						

TableD 自己領域の出現構成項目数  
The number of appeared structure's items on the field of self

	I-1	I-2	I-4	I-6	I-8	I-10	I-11
出現構成項目数	6	7	5	4	5	6	4
非出現構成項目数	2	1	3	4	3	2	4
	I-14	I-19	I-22	I-23	I-24	I-27	I-30
出現構成項目数	4	6	5	6	5	5	4
非出現構成項目数	4	2	3	2	3	3	4
	II-2	II-4	II-5	II-9	II-14	II-15	II-17
出現構成項目数	5	5	4	5	4	4	4
非出現構成項目数	3	3	4	3	4	2	3
	II-19	II-20	II-21	II-25	II-27	II-29	II-30
出現構成項目数	5	5	5	7	3	4	4
非出現構成項目数	3	3	3	1	5	4	4



TableF 文字数分析による自己領域の特異反応表出人数  
The number of people having specific responses on the field of self by analysis of the number of letters

	I-1	I-2	I-4	I-6	I-8	I-10	I-11
男性 女性	9 8	9 10	8 9	9 9	9 9	9 10	9 10
特異反応表出人数	82 96	82 94	83 95	82 95	82 95	82 94	82 94
	I-14	I-19	I-22	I-23	I-24	I-27	I-30
男性 女性	9 10	9 5	9 6	8 9	9 10	9 10	7 8
特異反応表出人数	82 94	82 99	82 98	83 95	82 94	82 94	84 96
	II-2	II-4	II-5	II-9	II-14	II-15	II-17
男性 女性	9 10	7 9	9 10	9 9	9 10	9 9	9 10
特異反応表出人数	82 94	84 95	82 94	82 95	82 94	82 95	82 94
	II-19	II-20	II-21	II-25	II-27	II-29	II-30
男性 女性	8 7	8 9	8 6	9 9	8 10	9 10	8 10
特異反応表出人数	83 97	83 95	83 98	82 95	83 94	82 94	83 94

TableG 成分数分析による自己領域の特異反応表出人数  
The number of people having specific responses on the field of self by analysis of the number of components

	I-1	I-2	I-4	I-6	I-8	I-10	I-11
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性
特異反応表出人数	6	6	9	7	2	6	3
非特異反応表出人数	85	98	82	97	89	98	88
	98		98		96		96
	89	99	87	95	87	95	87
	94		94		94		94
	I-14	I-19	I-22	I-23	I-24	I-27	I-30
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性
特異反応表出人数	2	7	9	1	5	9	4
非特異反応表出人数	89	97	82	103	86	95	87
	96		96		96		96
	88	96	83	101	88	96	82
	96		96		96		96
	II-2	II-4	II-5	II-9	II-14	II-15	II-17
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性
特異反応表出人数	9	4	8	4	4	10	9
非特異反応表出人数	82	100	83	100	87	94	82
	95		95		95		95
	84	99	86	95	84	99	86
	95		95		95		95
	89	101	89	101	86	95	89
	101		101		101		101
	II-19	II-20	II-21	II-25	II-27	II-29	II-30
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性
特異反応表出人数	6	5	4	5	3	3	9
非特異反応表出人数	85	99	87	99	88	101	82
	101		101		101		101
	86	98	86	98	82	102	86
	98		98		98		98
	88	97	88	97	88	97	88
	97		97		97		97

TableH 項目数分析による自己領域の特異反応表出人数  
 The number of people having specific responses on the field of self by analysis of the number of categories

	I-1	I-2	I-4	I-6	I-8	I-10	I-11
	男性 女性						
特異反応表出人数	8 6	4 10	3 7	3 3	2 3	7 5	1 7
非特異反応表出人数	83 98	87 94	88 97	88 101	89 101	84 99	90 97
	I-14	I-19	I-22	I-23	I-24	I-27	I-30
	男性 女性						
特異反応表出人数	3 5	1 2	1 3	1 4	3 2	2 8	3 3
非特異反応表出人数	88 99	90 102	90 101	90 100	88 102	89 96	88 101
	II-2	II-4	II-5	II-9	II-14	II-15	II-17
	男性 女性						
特異反応表出人数	2 8	1 0	3 1	4 3	2 6	1 5	2 1
非特異反応表出人数	89 96	90 104	88 103	87 101	89 98	90 99	89 103
	II-19	II-20	II-21	II-25	II-27	II-29	II-30
	男性 女性						
特異反応表出人数	8 2	6 4	0 0	8 1	1 4	1 2	1 1
非特異反応表出人数	83 102	85 100	91 104	83 103	90 100	90 102	90 103

Table1 構成分析による自己領域の特異反応表出人数  
The number of people having specific responses on the field of self by analysis of structures

	I-1		I-2		I-4		I-6		I-8		I-10		I-11			
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性		
特異反応表出人数	6	8	10	1	3	6	3	6	1	6	1	6	1	4	6	7
非特異反応表出人数	85	96	81	103	88	98	88	98	90	98	90	100	90	100	85	97
	I-14		I-19		I-22		I-23		I-24		I-27		I-30			
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性		
特異反応表出人数	6	14	6	7	4	10	4	3	5	1	10	13	3	5		
非特異反応表出人数	85	90	85	97	87	94	87	101	86	103	81	91	88	99		
	II-2		II-4		II-5		II-9		II-14		II-15		II-17			
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性		
特異反応表出人数	2	3	4	4	9	8	8	8	5	6	7	6	8	3		
非特異反応表出人数	89	101	87	100	82	96	83	96	86	98	84	98	83	101		
	II-19		II-20		II-21		II-25		II-27		II-29		II-30			
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性		
特異反応表出人数	7	11	9	13	5	8	5	10	1	4	8	2	9	9		
非特異反応表出人数	84	93	82	91	86	96	86	94	90	100	83	102	82	95		